

一般国道 254 号線東松山地内

埋蔵文化財発掘調査報告書

— I —

笠 田 ・ 鶴 田

1 9 8 2

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

例　　言

- 1 本書は、埼玉県東松山市大字上野本に所在する龍田および鶴田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、一般国道 254 号線東松山バイパス建設に伴なう事前調査であり、埼玉県の委託により埼玉県教育委員会が調整し、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が主体となって昭和 56 年度に実施したものである。整理、報告書の作成は、引き続き財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和 57 年度に受託し実施した。なお、発掘、整理の組織は 2 ページに示した。
- 3 出土遺物の整理および図版、挿図の作成は、村田健二、石川俊英が主にあたり、丸山謙司の協力を得た。
- 4 発掘調査の写真は、村田健二、石川俊英が、遺物写真は谷井 駿が撮影した。
- 5 本書の執筆者は、執筆分担の文末に明記した。
- 6 本書に掲載した挿図類は、次の様に統一してある。
　造幣 住居址 (1/80)、土墳 (1/80)
　遺物 土器実測図 (1/4)、土器拓影図 (1/3)、石器実測図 (1/2, 1/3)
- 7 本書の編集は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、調査研究部第五課職員があたり横川好富が監修した。

序

埼玉県では、関越及び東北自動車道などの高速道や、一般国道、県道等の新設及び改良事業によって一層県土の調和と充実が計られています。

埼玉県教育委員会では、これらの開発事業にかかる史跡、天然記念物及び埋蔵文化財の保存について開発関係各機関と路線の計画段階から事前協議を行なっております。

このたび、一般国道254号線東松山バイパス建設が計画され、慎重に協議を重ねてまいりました。その結果、籠田、鶴田遺跡はやむなく記録保存の処置が講じられることになりました。

発掘調査は、教育局文化財保護課が企画調整し、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が受託、整理作業も引き続き実施されました。

この調査により得られた新しい事実と多くの資料は、学術研究及び学校教育に寄与するところ大と考えます。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に到るまで、御協力いただいた東松山市教育委員会ならびに地元の方々、埼玉県土木部道路建設課、東松山土木事務所の方々に対し深く感謝いたします。

昭和58年9月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長 井 五 郎



第7号住居跡出土壺



上野本表採一括土器異形土器



上野本表採一括土器異形土器



第7号住居跡出土壺

目 次

序

例 言

I 調査に至るまでの経過（組織）	1
II 調査の経過（日誌抄）	3
III 遺跡の立地と環境	5
IV 遺跡の概観と調査の方法	13
V 篠田遺跡の遺構と遺物	14
1 繩文時代の遺構と遺物	14
(1) 土 墳	14
(2) 包 含 層	14
(3) グリット	19
2 弥生時代の遺構と遺物	20
3 古墳時代の遺構と遺物	26
4 その他の遺構と遺物	52
VI 鶴田遺跡の遺構と遺物	53
1 繩文時代の遺構と遺物	53
2 古墳時代の遺構と遺物	76
3 歴史時代の遺構と遺物	77
4 その他の遺構と遺物	80
VII 篠田遺跡炭化材樹種鑑定報告	84
VIII 結 語	87

挿 図 目 次

第1図 周辺の主要遺跡分布図.....	6	第32図 第5号住居跡出土遺物.....	40
第2図 筒田遺跡・鶴田遺跡周辺の地形図.....	7	第33図 第6・10号住居跡実測図.....	41
第3図 伝上野本出土遺物実測図.....	9	第34図 第6・10号住居跡遺物分布図.....	42
第4図 筒田遺跡・筒田遺跡グリット網図.....	11・12	第35図 第6・10号住居跡ピット半載図.....	43
第5図 標準層序図.....	13	第36図 第6号住居跡出土遺物実測図.....	43
第6図 第1号土墳実測図.....	14	第37図 第6号住居跡出土遺物拓影図.....	45
第7図 包含層出土繩文土器拓影図(1).....	15	第38図 第8号住居跡実測図.....	45
第8図 包含層繩文土器拓影図(2).....	17	第39図 第8号住居跡遺物分布図.....	46
第9図 グリット出土繩文土器拓影図.....	18	第40図 第8号住居跡・炉跡・ピット半載図.....	47
第10図 第7号住居跡実測図.....	20	第41図 第8号住居跡出土遺物.....	47
第11図 第7号住居跡遺物分布図.....	21	第42図 第9号住居跡実測図.....	48
第12図 第7号住居跡・炉跡・ピット 実測図.....	22	第43図 第9号住居跡遺物分布図.....	48
第13図 第7号住居跡出土遺物実測図.....	24	第44図 第9号住居跡ピット半載図.....	49
第14図 第7号住居跡出土遺物拓影図.....	24	第45図 第9号住居跡遺物実測図.....	49
第15図 第1号住居跡実測図.....	25	第46図 その他の遺構実測図.....	51
第16図 第1号住居跡遺物分布図.....	26	第47図 包含層遺物出土状態実測図.....	54
第17図 第1号住居跡接合関係図.....	27	第48図 鶴田遺跡全体図(1).....	55・56
第18図 第1号住居跡ピット半載図.....	27	第49図 鶴田遺跡全体図(2).....	57・58
第19図 第1号住居跡出土遺物実測図.....	28	第50図 包含層出土土器拓影図(1).....	60
第20図 第2・3号住居跡実測図.....	31	第51図 包含層出土土器拓影図(2).....	61
第21図 第3号住居跡出土遺物.....	32	第52図 包含層出土土器拓影図(3).....	63
第22図 第4号住居跡実測図.....	32	第53図 包含層出土土器拓影図(4).....	64
第23図 第4号住居跡遺物分布図.....	33	第54図 包含層出土土器拓影図(5).....	66
第24図 第4号住居跡ピット半載図.....	34	第55図 包含層出土土器拓影図(6).....	68
第25図 第4号住居跡カマド実測図.....	35	第56図 包含層出土土器拓影図(7).....	69
第26図 第4号住居跡出土遺物実測図(1).....	36	第57図 包含層出土土器拓影図(8).....	70
第27図 第4号住居跡出土遺物実測図(2).....	37	第58図 包含層出土土器拓影図(9).....	71
第28図 第4号住居跡支脚実測図.....	38	第59図 包含層出土土器実測図.....	72
第29図 第5・11号住居跡実測図.....	39	第60図 包含層出土石器実測図(1).....	74
第30図 第5号住居跡遺物分布図.....	39	第61図 包含層出土石器実測図(2).....	75
第31図 第5号住居跡・カマド実測図.....	40	第62図 第2号溝跡実測図.....	76
		第63図 第2号溝跡出土遺物実測図.....	76
		第64図 第1号溝跡実測図.....	77

第65図 第1号溝跡出土遺物実測図	78	第68図 風倒木跡実測図	81
第66図 井戸跡実測図	79	第69図 畦状遺構実測図	82
第67図 ピット群実測図	80	第70図 表採遺物実測図	83

図 版 目 次

- | | | | |
|------|--|------|--|
| 図版1 | (上) 笠田遺跡包含層
(下) 第1号土壤 | 図版18 | (下) 第1号集石土壙断面
(上) 第2号溝北面セクション |
| 図版2 | (上) 第7号住居跡全景
(下) 第7号住居跡ベッド状遺構 | 図版19 | (下) 第2号溝北面セクション
(上) 第2号溝北平部分 |
| 図版3 | (上) 第7号住居跡炉跡
(下) 第7号住居跡貯藏穴 | 図版20 | (下) ピット群
(上) 笠田遺跡包含層出土土器その1 |
| 図版4 | (上) 第7号住居跡遺物出土状態(1)
(下) 第7号住居跡遺物出土状態(2) | 図版21 | (下) 笠田遺跡包含層出土土器その2
(上) 笠田遺跡包含層出土土器その3 |
| 図版5 | (上) 第7号住居跡岸壁出土状態(3)
(下) 第7号住居跡遺物出土状態(4) | 図版22 | (下) 笠田遺跡包含層出土土器その4
(上) 笠田遺跡包含層出土土器その5 |
| 図版6 | (上) 第1号住居跡全景(掘り方)
(下) 第1号住居跡遺物出土状態(1) | 図版23 | (下) 笠田遺跡包含層出土土器その6
(上) 鶴田遺跡包含層出土土器その7 |
| 図版7 | (上) 第1号住居跡遺物出土状態(2)
(下) 第1号住居跡遺物出土状態(3) | 図版24 | (下) 鶴田遺跡包含層出土土器その8
(上) 鶴田遺跡包含層出土土器その9 |
| 図版8 | (上) 第2・3号住居跡全景
(下) 第4号住居跡全景 | 図版25 | (下) 鶴田遺跡包含層出土土器その10
(上) 鶴田遺跡包含層出土土器その11 |
| 図版9 | (上) 第4号住居跡カマド部分
(下) 第4号住居跡遺物出土状態 | 図版26 | (下) 鶴田遺跡包含層出土土器その12
(上) 鶴田遺跡包含層出土土器その13 |
| 図版10 | (上) 第4号住居跡ピット半載面
(下) 第4号住居跡ピット断面 | 図版27 | (下) 鶴田遺跡包含層出土土器その14
(上) 笠田遺跡出土遺物 |
| 図版11 | (上) 第5号住居跡全景
(下) 第6号住居跡全景 | 図版28 | 笠田遺跡出土遺物 |
| 図版12 | (上) 第6・10号住居跡全景
(下) 第6号住居跡ピット半載面 | 図版29 | 笠田遺跡出土遺物 |
| 図版13 | (上) 第8号住居跡遺物出土状態
(下) 第8号住居跡全景 | 図版30 | 笠田遺跡出土遺物 |
| 図版14 | (上) 第9号住居跡遺物出土状態(1)
(下) 第9号住居跡遺物出土状態(2) | 図版31 | 笠田遺跡出土遺物 |
| 図版15 | (上) 第9号住居跡遺物出土状態(3)
(下) 第1号溝状遺構 | 図版32 | 笠田遺跡一括出土土器(1) |
| 図版16 | (上) 鶴田遺跡包含層(東方より)
(下) 第1号風倒木跡セクション | 図版33 | 笠田遺跡一括出土土器(2) |
| 図版17 | (上) 第1号集石土壙全景 | | |

I 調査に至るまでの経過

埼玉県では増大する交通量に対処するため各種の道路建設工事を進めているが、一般国道254号線については関越自動車道の建設に伴い、東松山市・嵐山町・小川町においてバイパスの建設が計画された。このような開発事業に対応するため、県教育局文化財保護課では、開発関係部局と事前協議を実施し、文化財の保護について迷謎がないよう調整を進めてきた。

昭和54年6月13日付け道雄第373号をもって県土木部道路建設課長から「道路改築事業予定地内における埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて（東松山市下野本地内）」文化財保護課長あて照会がなされた。文化財保護課では、東松山市教育委員会の協力を得て現地調査を実施する一方、昭和55年11月25日の昭和56年度公共事業計画聴取会議において、建設計画の具体的な内容を聴取し、昭和56年4月20日付け教文第109号をもって道路建設課長あて大臣下記のとおり回答した。

- 1 路線予定地内には古墳時代の集落4遺跡が所在すること。
- 2 これら埋蔵文化財包蔵地の取り扱いは、できるだけ現状保存することが望ましいこと。
- 3 計画上やむを得ず現状変更する場合は文化財保護法第57条の3の規定に従って、事前に記録保存の発掘調査を実施すること。

その後、取り扱いについて文化財保護課と道路建設課において協議を重ねたが、計画変更は不可能となったためやむを得ず記録保存の発掘調査を実施することになった。発掘調査の実施については、実施機関である財團法人埼玉県文化財調査事業団と道路建設課、文化財保護課の三者により、調査方法、期間、経費を中心に行なった。その結果、昭和56年度後半に№1遺跡、№2遺跡を実施する事が決定された。

法的手続きを済ませた後、昭和56年9月から発掘調査は開始された。

文化庁からは、委保第5—1982号により文化財保護法第57条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査局に対する通知があった。

発掘調査の組織

1 発掘（昭和56年度）

主 体 者 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 長 井 五 郎
副理事長 沼 尾 和 也
常務理事 渡 辺 澄 夫

企画調整 埼玉県教育局文化財保護課

埋蔵文化財係長 栗 原 文 篤
杉 鳥 茂 樹 明
井 上 尚 明

庶務経理 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

管理部長 伊 藤 悅 光
関 野 栄 一 浩
福 田 庄 朗 人

発 振 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調査研究部長 横 川 好 富 朗
増 田 逸 鮎 二 英
調査研究第四課長 谷 井 健 俊
調査研究第三課長 村 田 健 俊
石 川 俊 俊

2 整理（昭和57年度）

主 体 者 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 長 井 五 郎
副理事長 岩 上 進
常務理事 渡 辺 澄 夫
管理部長 佐 野 長 二
関 野 栄 一 浩
福 田 庄 朗 人
本 江 田 和 美 子
福 田 啓 启

整 理 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調査研究部長 横 川 好 富 行
水 村 孝 鮎 二 英
調査研究第四課長 谷 井 建 俊
調査研究第三課長 村 田 建 俊
石 川 俊 俊

3 協 力 者

東松山市教育委員会、地元区長及び地元住民

II 発掘調査の経過（日誌抄）

- 9月1日（火） 現場プレハブの整備、器材の搬入を行なう。
- 9月2日（水） 重機により耕作土除去作業に入る。遺構確認面まで約20cm～30cmと比較的浅い。
- 9月4日（金） 引き続き表土剥ぎ、他は遺構確認作業に入る。
- 9月7日（月） 表面を清掃、五個期と思われる方形プランを4～5確認された。他に溝、土壟状のものを検出、又重機を別地点に移動させる。
- 9月8日（火） 表土剥ぎ開始、溝状のもの2、住居址2軒検出したが、遺物の分布は極めて少ない。
- 9月9日（水） 1H～4H、溝の掘り込み作業に入る。2H～3Hは覆土が薄いため、ほぼ完了、4Hより遺物多量に出土。
- 9月10日（木） 基本グリの設定、細部にわたって4m×4mのタイを打つ。又本日までの調査の結果1H～3Hは出土遺物より五個期、4Hは鬼高窓後半の堅穴と判明
- 9月11日（金） 2H～3Hの遺物分布並びに遺構写真撮影、及び平面図、断面図実測開始。1Hのプラン写真、掘り込み開始
- 9月14日（月） 全体の概念図を作成する。
- 9月22日（火） 5H～6H掘り込み作業に入る。1H断面図作成する。
- 9月24日（木） 1H遺物出土状況写真撮影、7H掘り込み作業に入る。
- 9月28日（月） 7H南コーナー付近から多量の土器出土同時に燒土、木炭を多量に出土。8H～7H掘り込み作業に入る。
- 10月6日（火） 1Hピット半数する。2H～3H、6Hセクション図作成する。又線路跡で確認された繩文包含層を精査。
- 10月14日（水） 4H～5H、7H全景写真撮影、土壤の平面、断面図、9H、平面、断面図作成する。
- 10月15日（木） 4Hカマド部分調査、及び遺物取り上げ、1Hピット調査後貼床を除き、6H～8H～9H全景写真撮影。
- 10月16日（金） 7Hピット確認のため精査、繩文包含層、掘之内1～1式を主体とすることが判明。
- 10月19日（月） 8H～9Hピット確認の精査及び繩文包含層継続。
- 10月26日（月） 4Hピット確認調査、8H平面図作成
- 10月29日（木） 6H拡張住居址であることが判明
- 11月5日（木） 8H～9Hピット断面図作成及び写真撮影
- 11月9日（月） 4Hカマド部分写真撮影、及び平面図作成
- 11月13日（金） 1Hピット断面図作成、及び写真撮影
- 11月16日（月） 繩文包含層遺物取り上げ、完掘状況写真撮影

- 11月17日（火） 航空写真撮影の打ち合わせ
11月20日（金） 全て調査完了
11月24日（火） 航空写真撮影のため調査区全域にわたって清掃
11月28日（土） 清掃完了
11月30日（月） 航空写真撮影を行なう。
12月 1日（火） 鶴田遺跡調査区域について遺構確認作業に入る。
12月 2日（水） 溝状遺構、及び縄文包含層が検出される。縄文包含層については篠田遺跡より引き続いているものと判断した。
12月 3日（木） 残りの地区について表土剥き作業に入る。
12月 7日（月） 溝状遺跡より掘り込み作溝に入る。及びグリット杭 $4\text{ m} \times 4\text{ m}$ を打つ。
12月10日（木） セクションベルトを残し完掘する。集石土壙掘り込み
12月11日（金） 縄文包含層の掘り込み作業に入る。集石土壙セクション図取り。
12月15日（火） 土器のドット表示、及び取り上げ作業に入る。集石土壙写真撮影
12月22日（火） 完掘する。溝状遺構のセクション図取り、及びベルト除去。
12月23日（水） 溝状遺構の平面図取り、写真撮影を行なう。
12月25日（金） 溝状遺構の平面図取り完了。
1月 20日（水） 遺構確認作業に入る。その結果調査区内に東西に走る大溝1本、南北に走る大溝1本が検出した。
1月22日（金） 遺構確認作業継続、引き続き井戸1基、風倒木痕が検出した。
1月25日（月） 大溝掘り込み作業に入る。
1月27日（水） 大溝最下層より須恵器検出する。
2月 6日（金） 南北に走る大溝より多量の焼土が検出した。
2月10日（水） 大溝セクションベルト殆し完掘する。
2月11日（木） セクション図作成、及び写真撮影。
2月15日（月） 井戸風倒木痕掘り込み。
2月16日（火） 井戸完掘、風倒木痕セクション図取り
2月17日（水） 風倒木痕完掘する。但ちに写真撮影。
2月18日（木） 大溝完掘し、平面取り作業に入る。
2月25日（木） 平面図完了する。井戸、風倒木痕平面図作成。
3月 2日（火） 大溝コンタ取り入る。
3月 8日（月） コンタ取り完了。並びに写真撮影
3月 9日（火） $2\text{ m} \times 2\text{ m}$ のグリットを設定プレ調査を行なう。
3月19日（金） 航空写真撮影のうち合わせ、調査区全域清掃する。
3月29日（月） 航空写真撮影行ない、調査完了する。

III 遺跡の立地と環境

篠田および鶴田遺跡は、東松山市上野本字篠田760ほかに所在する。調査対象部分は、南北に走る東武東上線に2分されるが、便宜上西側を篠田遺跡、東側を鶴田遺跡と呼ぶ。〔第2図〕

埼玉県のはば中央に位置する比企丘陵は、都幾川により形成された冲積地、松山台地を境に南北に区分される。松山台地は、都幾川と市野川により形成された広大な冲積地のはば中央、東西に突出した標高20~30mほどの低位台地である。遺跡の占地するこの洪積台地は立川面に相当するもので、段丘疊層の上を平均2~3m程度のローム層が薄く被って分布し、更にその深部には硬質な粘土およびシルト、砂層が広く分布している。

ここでは、松山台地を中心に比企丘陵の遺跡群も加えて、本跡に関連ある遺跡等、生時代後半~古墳時代前半に関わるものに視点を置き概観してみる。

松山台地における遺跡の分布は、ほぼ全域にわたって比較的高い密度で認められ、特に市野川に東西する台地の基部および先端部に集中することはよく知られている。時代を追って見て行くと、縄文時代では、南面する台地基部に岩の上遺跡（加曾利EⅠ~Ⅲ）が、更に台地北縁には前山遺跡（加曾利EⅡ主体）が存在する。共に縄文時代中期後葉に位置する県内有数の規模の大きな集落遺跡である。中期以降では、後期の雉子山遺跡が知られる他、台地のはば全域にわたって堀ノ内式土器の分布が認められる。一方、比企地域における該期の研究の立ち遅れが指摘されているが、松山台地周辺の遺跡についても僅かではあるが補足してみることにする。

まず、早期では物見山丘陵地内の先端部に形成された小支丘の舌部に散見され、前期は関山・黒浜期を中心とした集落である小川町平松台遺跡（金井塚ほか1969）が著名な他、緑山遺跡が知られる。中期に到ると遺跡数は増大しピークを迎える。舞台遺跡（井上ほか1978）、物見山塚群、立野遺跡（今井ほか1980）等が良好な資料を提示している。後、晩期は、後期に雉子山、附川、塚原遺跡が知られるが、前代に比して量的には激減するといふ。晩期の遺跡は、三千塚周辺で若干採取されるほか、次の弥生時代中期初頭～前半代の遺跡が今後期待される嵐山町花見堂遺跡（大潤A式併行）がある程度で極めて少ない。

当該地域の弥生文化の様相は、早くから、櫛文系（吉ヶ谷式土器）、柳描文系（岩鼻式土器）という本質的に異なる2系統の土器文化の存在が指摘されて久しい。それは「そのまま編年觀の軌跡として現在に到っている。最近では、南関東編年への直接的なスライドは修正され、北陸、東海、東関東、中部高地等々の所謂外米系土器群をピックアップし、產地の同定作業、伝播系路の確立、セット関係の充足等、著実に整理統合されつつある。1982年、両系統の編年案が相次いで提出されまた、編年案に関する視点の在り方も一元的ではないなど研究の進展も急速に高まりつつある。

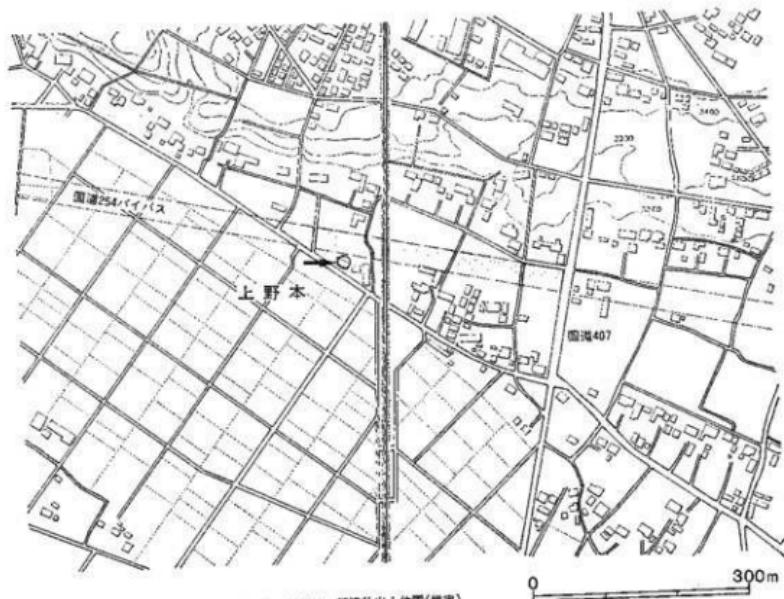
ここでは、松山台地における代表的な弥生時代の遺跡について概観することにする。まず、中期後半代に位置付けられる柳描文系の附川遺跡、雉子山遺跡、岩鼻遺跡がある。これらは、岩鼻遺跡を除くと、都幾川水系に属し、かなり低い位置に占地している。周辺には、高坂台地と南比企丘陵の接点に縄文系の杉の木遺跡、駒塚遺跡が所在する。右に、現水田面からかなりの比高差をもつ位置で

の占地である。後期に到ると遺跡数は増加し、終末に到っては、セット関係にかなり複雑な要因が加味される。今回報告の筆田遺跡第7号住居跡例は、その様相を如実に物語っている。吉ヶ谷式土器の特徴である輪積み痕は退化しながらもなお残しているし、該期の特徴的な高壙、楕円形土器と共に、4本一単位の棒状浮文を口縁部に2対配した壺形土器、五領期の特徴を備えた高壙形土器がそ



- | | | | |
|-----------|-----------|---------|-----------|
| 1 笔田・鶴田遺跡 | 2 雷電山古墳 | 3 吉ヶ谷遺跡 | 4 花見堂遺跡 |
| 5 山ノ根古墳 | 6 五領遺跡 | 7 善清水遺跡 | 8 野本符原塚古墳 |
| 9 古墳・下山遺跡 | 10 正直玉造遺跡 | 11 附川遺跡 | 12 桜山古墳群 |
| 13 根平遺跡 | 14 嵩山遺跡 | 15 駒掘遺跡 | |

第1図 周辺の主要遺跡分布図



第2図 篠田遺跡・鶴田遺跡周辺の地形

これである。ただ、遺構については、壁下のベッド状遺構、貯蔵穴の存在等は、該期の遺構によく認められる事実であるが、柱穴を持たない住居跡の検出例は知られていない。

本例の他、共伴例が明示できるものは、根平遺跡第4号住居跡、桜山遺跡第2号住居跡例の他、未報告ではあるが、滑川村屋田遺跡例がある。いずれも、当該地域における弥生終末段階のセット関係を把握するための良好な資料であり、それはそのまま吉ヶ谷式土器の終末の様相を明確化したものといえる。一方、中部高地に範が求められる柳描文系土器（岩鼻式土器）の様相は、未だ不明な部分が山積されているが、同時に所謂前野町式土器との共伴関係、分布についても今後に残された課題として留意しなければならない。

松山台地における古墳時代前半代の遺跡は、タイプサイトである五領遺跡をはじめ、台地先端部の番清水遺跡、台地基部の附川遺跡などや大形の集落が報告されており、当地域における有力な集落が芽え始めたことを物語っている。一方、首長墓は方形周溝墓に代表される前代の墓制を踏襲しており、古墳の初現は比企丘陵の東北部の最高位に造られた雷電山古墳の出現まで待たねばならないとされていた。しかし、1973年吉見町久米田の丘陵で良好に保存された古式の前方後円墳が発見された。以後、精密な測量調査の結果前方後方墳であることが明らかとなり、その立地および墳形から発見期古墳としての可能性も十分考えられる古墳として注目を集めている。この2基の古

墳は、いずれも未調査であるため、その真偽の程は定かでないが、当該地域における初現期の古墳であることに変りはない。とりわけ、比企地方ばかりでなく、北武藏における発生期古墳の存在については皆無に近い状況であったが、山ノ根古墳に次いで江南村所在の塚1、2号墳も前方後方形であることが坂本和俊氏により明らかにされるに到り、本県における発生期古墳の認識に関して再度検討を要する時期が招來した感がある。

(村田 健二)

参考引田文献

金井塙良一ほか『東松山市史』資料編 1 1981

金井塙良一『原始・古代の吉見』吉見町史上巻 1978

金井塙良一『埼玉県東松山市吉ヶ谷遺跡の調査』台地研究16 1965

金井塙良一「比企地方の前方後円墳—北武藏の前方後円墳の研究(1)、(2)」研究紀要1、2
1979 1980

金井塙良一ほか『平松台遺跡』考古学資料刊行会 1969

金井塙良一ほか『花見堂』大東文化大学考古学研究会 1976

水村幸行『根平』日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告書第27集 1980

水村幸行・井上尚明『物見山塚群』こども動物自然公園内埋蔵文化財発掘調査報告書第24集 1980

小久保義・利根川幸彦『根山古墳群』日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財調査報告第5集 1981

財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

村田健二・井上尚明・劍持和夫・富田和夫・西口正純『埼玉の弥生後期圓錐形土器』 1982

渡辺久生『野本東部遺跡群発掘調査報告書一下道添・東町・吉古海道遺跡』東松山市文化財調査報告書第16集 1981 東松山市教育委員会

塩野 博ほか『関東における古墳出現期の諸問題<資料>』1981 日本考古学協会

表採一括土器について(第3図)

掲載した13点の土器は、昭和30年代の初めに、市道拡幅工事の際に一括出土した資料であるが、上野本在住の松本宗治氏がこれを発見、出土したものの大半を採集、現在まで散逸の憂き目を見るところもなく良好に保管されていたものである。発見した位置および出土状況は、松本氏の記憶によりかなり正確に復元することができた。それによると、検出位置は上野本字筆田737付近の市道部分と思われる。(第2図)この位置から都幾川の沖積低地までは僅か10m弱、調査区までも10数mである。出土状態は、重機による掘削によって黒色土を覆土とする溝状断面が露呈し、その溝状部分の最下位に掲載した土器13点が、まとめて出土したことであった。

以上の状況から、まず推測されることは、環濠あるいは方形周溝墳の存在であるが、掲載した土器群が、供獻土器を主体とし、壺形土器には全て底部穿孔が認められることから、方形周溝墓と考える方が妥当であろう。土器の組成は、壺形土器4、特殊器台形土器1、異形土器1、高环形土器3、器台形土器3、小形壺形土器1である。小形壺を除く全ての土器は、よく磨かれており丁寧な作りのものが比較的多い。特に、頸瓢状の器形になると思われる異形土器は他に例がなく、赤色塗彩し、輪模み痕を顕著に残すことも特徴的である。又、特殊器台については、凡日本的な規模で集成作業が試みられたこともある。(熊野 1974, 1977) それによれば、埼玉県内の事例として、岩槻市諫訪山遺跡の4点が紹介されている。以後、管見に触れたものは児玉郡美里村日の森遺跡例が加わったに過ぎない。一方、この土器についての性格および出自については、熊野氏の報文に詳し



第3図 上野本表採一括遺物

い。簡略にまとめるとして、出土頻度の高い遺構は、特殊な遺構からの出土は少なく、もっぱら住居跡から検出される。用途は、日常的なものではなく非実用的な土器である。呼唱の仕方についても、器台結合土器、高环状器台等々様々であるが、根拠の乏しい段階で即祭祀と結びつけてしまう安易な部分には批判的である。とはいいうものの、装飾性に卓れ、凡日本的に、ほぼ同時期に画一的な土器が出現するのであれば、何らかの祭祀に用いられたと考える方が自然であり、出土量が極めて少ないという事実も、これを裏付ける現象と思われる。本例を見る限り、同時に出土したと考えられる土器の在り方からみて、葬送儀礼に用いられたことは確実視できるが、それ以前（前段階）は屋内祭祀の祭具としての位置付けが可能である様に思われる。いずれにしても、資料の増加を待って再考する必要があろう。

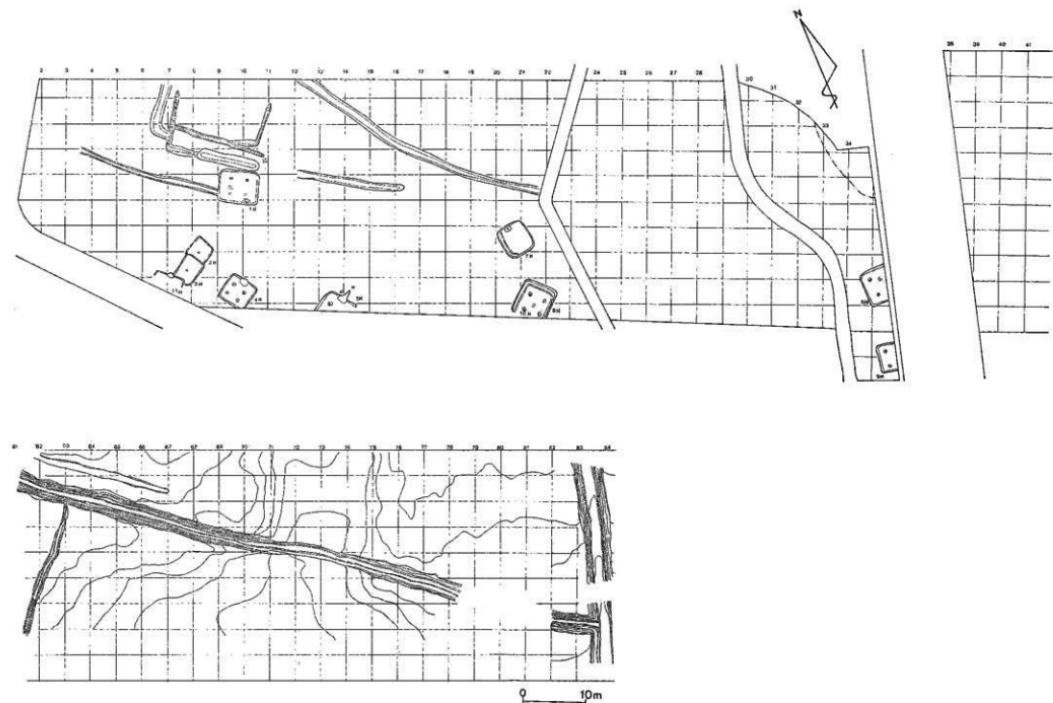
(村田 健二)

参考文献

- 熊野正也「特殊な器台形土器について(1)」史館第3号 1974
 熊野正也「特殊な器台形土器について(2)」史館第7号 1979
 金井原良一他「埼玉の方形周溝墓」埼玉考古第7号 1969
 「日の森遺跡」美里村教育委員会 1978

上野本表採一括遺物（第3図）観察表

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
異形器台	1	口径 19.5 底径 18.8 器高 13.5	口径の比較的大きな器台形土器に強く外傾する口縁部を付加する。脚部は中位から低く広く開く。穿孔は脚部に3孔、口縁部4孔焼成前等間隔に置く。器壁は全体的にやや薄手な作り。	外面は丁寧な継ぎのヘラ磨き、穿孔はやや荒い。内面は、器台部がヘラナデ整形。他はヘラ磨き、焼成、胎土共に極めて良好、色調淡褐色	完形
高杯	2	底径 10.6	脚部は直線的に外反、杯部はやや大形、器壁は薄い。	内外面共丁寧なナゲ整形。胎土やや粗、焼成良好、色調褐色。	杯部欠
異形土器	3	口径(11.0)	相似的で大きさの異なる略圓錐形のものを組み合わせ所謂ひょうたん形の上位に「逆い」の字状の口縁部を付加 痕手	外面全面に丁寧なヘラ磨きを施した後丹形、内面は輪模み痕顯著、焼成胎土共に良好、色調赤褐色	口唇部欠
小形壺	4	底径 4.7	脚部は、断面略ソロバン玉状、器壁は厚手	外面は丁寧なヘラ磨き、内面ナゲ胎土、焼成良好、色調暗赤褐色	口縁部欠
高杯	5	口径 8.3 底径 10.9 器高 7.8	杯部は碗状、脚部は中位で低く広く開く。丁寧な作り。器壁は薄い。	杯部外面はヘラナデ、脚部はナゲ整形。焼成、胎土良好。色調暗褐色	脚部欠
高杯	6	口径 9.5 底径 8.5 器高 8.4	やや粗雑な作り。杯部は碗状、脚部は短かく、緩やかに外傾、器壁は薄い。	内、外面共ナゲ整形。杯部内面は丁寧なナゲ。胎土・焼成良好、色調褐色	口縁部欠
器台	7	口径 8.6 底径 10.1 器高 8.3	あまり外反せず直線的に開く脚部に、口径の広い扁平な受部をのせる。受け部の突出は弱い。	焼成前の穿孔3穴、外面は継ぎの丁寧なヘラ磨き、焼成・胎土良好、色調暗褐色	完形
壺	8	口径 8.2 底径 4.8 器高 11.1	球形胴部、脚部は下端はややつぼまる。口縁部はほぼ直立して立ち上がる。器壁は薄手、底部穿孔。	口縁部横ナゲ。胴部は継ぎの丁寧なヘラ磨き、内面ナゲ整形、胎土良撰、色調赤褐色。	完形
小形壺	9	口径 8.2 底径 4.5 器高 8.4	口縁部は外傾せず、肥厚して立ち上がる。胴部は張らみが弱い。胴部下位に穿孔	内外面共アランダムなナゲ。口縁部は横ナゲ、胎土、焼成良好、色調暗褐色	完形
器台	10	口径 6.0 底径 9.6 器高 7.5	受け部は突出部なく、小さい。脚部は上半で急に開く。穿孔は3穴 焼成前	内、外周共ヘラナデ整形、受け部はやや荒いナゲ、胎土、焼成良好、色調、褐色	片欠
器台	11	口径 8.8 底径 10.2 器高 9.0	整った作り。全体的に直線的、受け部口縁は、脚部に比して小さい。器壁は厚手。	外面は細かい刷毛目後丁寧なヘラ磨き、穿孔は受け部中心および脚部に3穴、色調赤褐色(丹波形)	完形
壺	12	底径 4.7	球形胴部、整った作り、焼成前底部穿孔	全面ナゲ整形、焼成、胎土良好、色調暗褐色	片欠
壺	13	口径 8.8 底径 6.2 器高 9.6	口径に比して、器高が短かい。口縁はあまり外傾せず直線的。胴部は略球形、底部は平底。	外面、口縁部は横ナゲ、胴部は浅く細かい刷毛目整形、焼成、胎土良好、色調暗褐色。	完形



第4図 篠田・鶴田遺跡遺構分布図

IV 遺跡の概観と調査の方法

遺跡の立地する部分は、前章でも触れた通り、都幾川の沖積地から比高差2~3mほどの南北に狭長な低位台地である。バイパス路線は、この低位台地にほぼ沿って走るが、篠田遺跡の東半及び鶴田遺跡ではかなり内側を通ることから遺構の密度も稀薄な状況となっている。遺構確認は、早い段階での削土と度重なる深耕からはほぼ全域にわたってハードローム面が露呈し、確認面となっている。加えて、縱横に走る畦状の擾乱によって遺構の遺存状態を更に悪化させている。

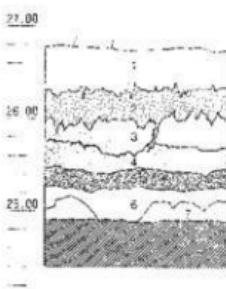
検出された遺構は、弥生時代後期（吉ヶ谷期）の住居跡1軒、古墳時代前期の住居跡8軒、古墳時代後期の住居跡2軒の計11軒が検出、土壇は縄文時代の所産と思われるもの7基。同集石土壇1基、風倒木跡5基、近世の井戸状段構1基である。又、篠田遺跡の東端から東上線をはさんで鶴田遺跡の西半部分にかけて、ほぼ東西に展開する縄文時代後期（堀ノ内1・2段階が中心）の包含層が存在する。以上、調査面積から検出された遺構の占地密度を考えれば、決して多いとは言えない量であるが、その大半が台地の縁辺に近い篠田遺跡で検出されたことは、多分に地形的な占地様相を如実に物語っているものといえる。

調査の方法は、グリット法を採用、路線に則して4m×4mの方眼を基本単位とし、必要に応じて小区を設定した。その際、東西ラインは北を起点にアルファベット列とし、南北ラインは西を起点に数列とした。なお、遺構の測量は国土座標をもとに基準点を設けたが、路線に則したグリットを設定したため、グリットの示す方位はN—。—。レベルは全て明記し、層位が明示可能なものについては記録した。又、自然遺物についても、同様な処置を探ったが、炭化材の樹種鑑定についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に鑑定を依託した。

(第5図)

最後に、本跡の標準的層序を明示する。作団位置は、地形的に最も安定した部分（鶴田遺跡）を標定し、テストピット（5B-Cグリット）を設けた。詳細は次の通りである。

- 第1層 褐色土 耕作土
- 第2層 黄褐色土 ソフトローム（擾乱が著しい。）
- 第3層 暗黄褐色 ハードローム、多量の赤褐色スコリア混入。
- 第4層 灰黄褐色土 非常に硬く良く締まっている。スコリア多量混入。
- 第5層 赤褐色土 所謂「赤沙利層」、硬く締まっている。
- 第6層 灰褐色土 鉄分をブロック状に混入、極めて硬い。
- 第7層 灰褐色土 第6層に比してやや暗みを増す。境界は漸移的
- 第8層 暗褐色土



第5図 標準層序図

V 篠田遺跡の遺構と遺物

1 繩文時代の遺構と遺物

(1) 土壇と出土遺物

第1号土壇（第6図）

本土壇は8-Cグリットで検出された。第8号住居跡の約1mの地点に位置する。長径0.65m×短径0.46m、深さ0.1mを計る。プランは隅丸方形を呈する。長軸方向はN-15°-Eを示す。層位は2層で暗黄褐色土、褐色土である。遺物は覆土中より繩文土器数片が出土したが、いずれも小破片のため実測が不可能であった。

(2) 包含層と出土遺物

篠田遺跡に見られた繩文時代の包含層は、後述する鶴田遺跡に於く包含層と同一である。位置する地点は東上線に隣接した所にあり、西側に小支谷が入るため、東西6m×南北4mと範囲はきわめて狭い。この地点は以前に桑畑に利用されたために搅乱がローム近くまで及んでいる所もあった。又地下水の水位が高く、ロームまで達しないうちに水が湧出してくる。そのためローム層は水つきローム的な状態であった。

包含層の層位は大きく2層に分類され、黒色土、ローム粒子を含んだ黒褐色土をベースにしている。出土した土器は繩文土器のみで時期は中期加賀利Ⅱ～Ⅲ式、後期称名寺式、掘之内Ⅰ～Ⅱ式である。特に、後期称名寺式、掘之内Ⅰ～Ⅱ式土器が主体となっている。出土状況は、第1層である黒含土層中からの出土したものが大部分を占めていた。出土した土器の状況はいずれも小破片で接合可能な土器はほとんどなかった。

包含層出土遺物

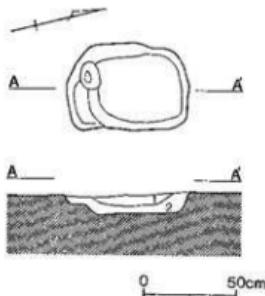
篠田遺跡出土の繩文時代の遺物は、包含層、グリットに分類して記載した。時期は前期黒浜式、中期加賀利Ⅳ～加賀利Ⅴ式、後期称名寺式、掘之内Ⅰ～Ⅱ式である。特に掘之内Ⅰ～Ⅱ式が主体を占める。以下時期毎に分類し説明を行なう。

第1群土器

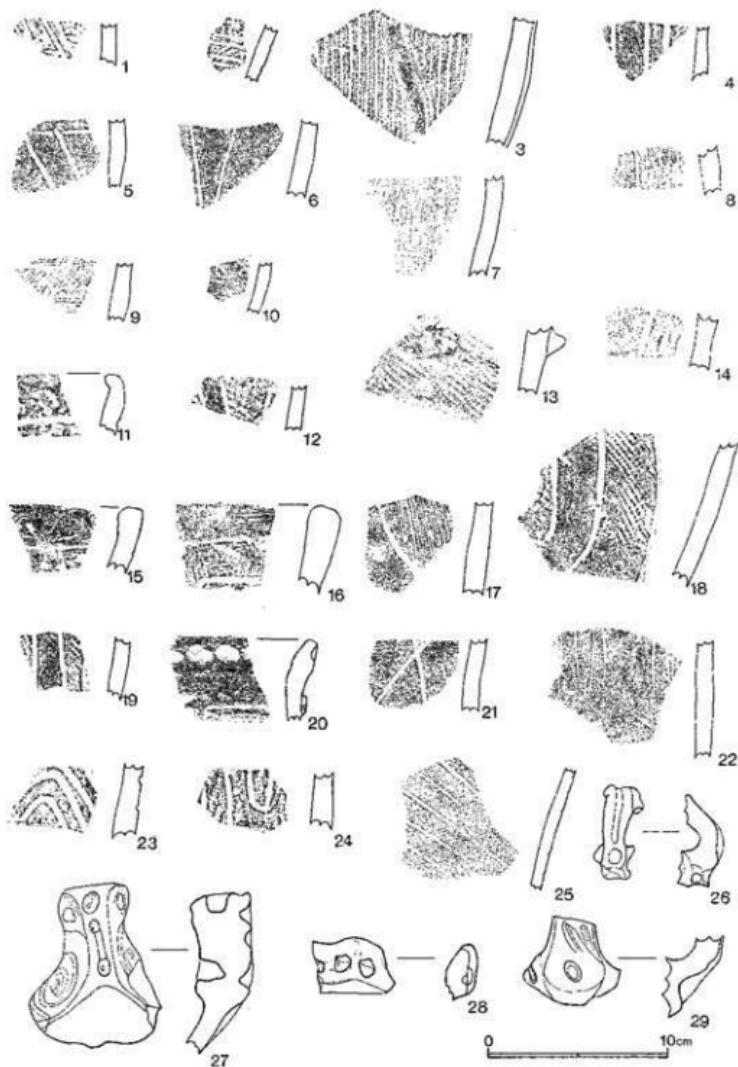
加賀利Ⅳ式に比定される土器を一括した。1は繩文、2は縦位にめぐる条縫を地文とする。3は繩文施文後2木の懸垂文が施される。1～2は加賀利Ⅳ式、3は加賀利Ⅴ式に比定される。

第二群土器

後期称名寺式土器である。4は縦位にめぐる沈縫内に2列の刺突が施されている。5は胴部に縦位の条縫がめぐっている。6は頸部に横位に一条、縦位に多条の条縫が施される。



第6図 第1号土壇実測図



第7图 包含出土编文土器拓影(1)

第三群土器

堀之内Ⅰ式土器を一括した。分類は文様より、沈線によって文様が構成されるもの、縄文を地文に沈線が施されるものとにした。

第1類（第7図、7～17）沈線によって文様が構成されるもの7は胴部に縦位横位に2条の太い沈線がめぐる。9は口縁内外に1号の沈線が施され、胴部は無文帯となっている。10～13は口縁部が無文帯をなし胴部に縦位にめぐる沈線を持つ。10～11は1条、12は3条、13は「匂」字状の沈線が施される。15～16は多条化した沈線がめぐるものである。14は横位に1条、斜位に2条の沈線が施される。15～16は多条の沈線がめぐるものである。15は3条の沈線が縦位、斜位に施され、16は2条の沈線が縦位、斜位に施されている。17は横位平行する2条の沈線、斜位に2条の沈線が施されている。

第2類（第7図、18～21）文を地文として沈線が施されるもの。18は口縁が外反し、口縁部下に円形の列点文がめぐる。胴部には、縄文を施文後斜位に2条の沈線が施される。19は浅鉢で円形の列点文、横位に太い沈線が1条めぐり、胴部にはL Rの縄文が施されている。20～21は縄文を施文後、多条の沈線が施される。20は3本1単位の太い沈線が縦位、斜位にめぐる。21は横位に1条、斜位に5条の沈線が施されている。

第四群土器

堀之内Ⅱ式を一括した。Ⅰ式同様、文様構成によって、沈線を地文とするもの、縄文とするものに分類したが、沈線系についてはⅠ式との区別が難しく、Ⅱ式と思えるものを掲げた。

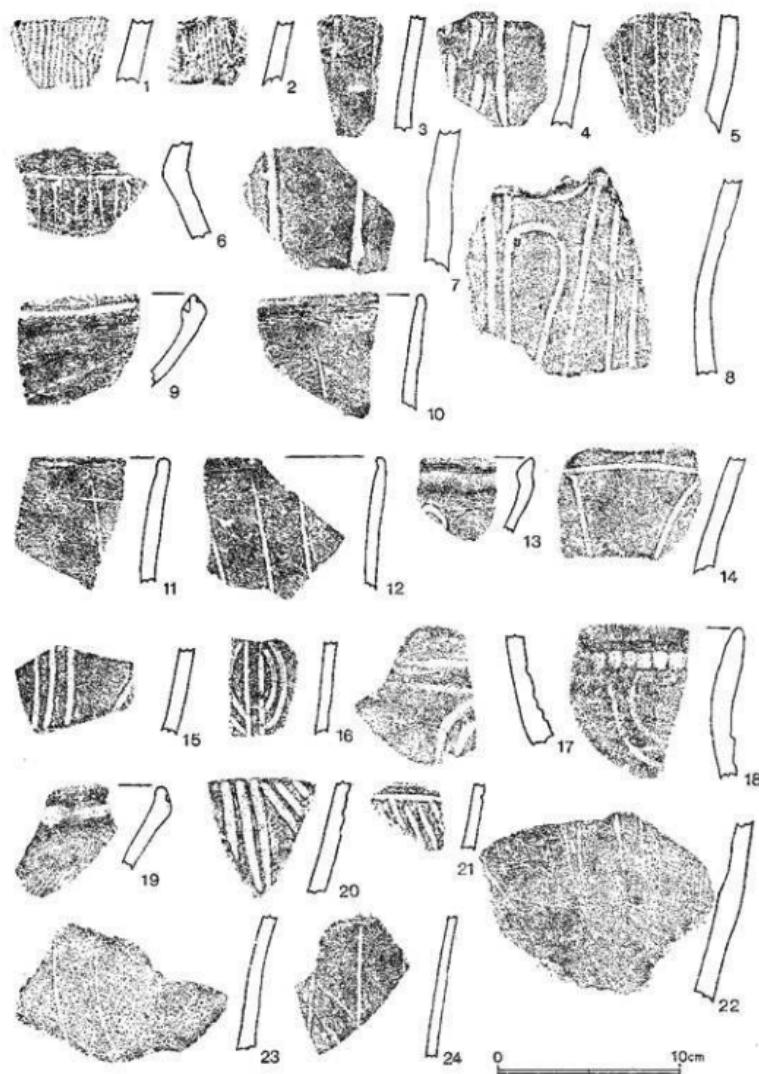
第1類（第7図、22～24、第8図、1～10）、24、1～3、5、10は胴部に3条、もしくは数条の沈線が施される。22は細い沈線で縦位、斜位にめぐる。23は斜位に平行して2条の沈線がめぐる4、8、9は縦位、横位に「匂」字状の沈線が施されている。6は横位に1条、斜位に2条に3条の沈線がめぐり、7は斜位に、直線的、曲線的な2条の沈線が施される。

第2類（第8図、11～16）縄文を地文に沈線か施されるもの。11～12は口縁部が内湾する。11は横位にめぐる2条の沈線間にL Rの磨り消し縄文が施されている。12～15は口縁上部が無文になり、胴上に2条の平行する沈線が横位、斜位に施されて三角形状を呈する。沈線間に縄文が施される磨り消し縄文が施される。16は胴部に2条の平行する沈線間に縄文が施され、その下に曲線的な磨り消し縄文が施されている。17は口縁部に貼付文が伴ない、内側には刻目を持つ隆帯がめぐっている。口縁部下には曲線的な磨り消し縄文が施されている。

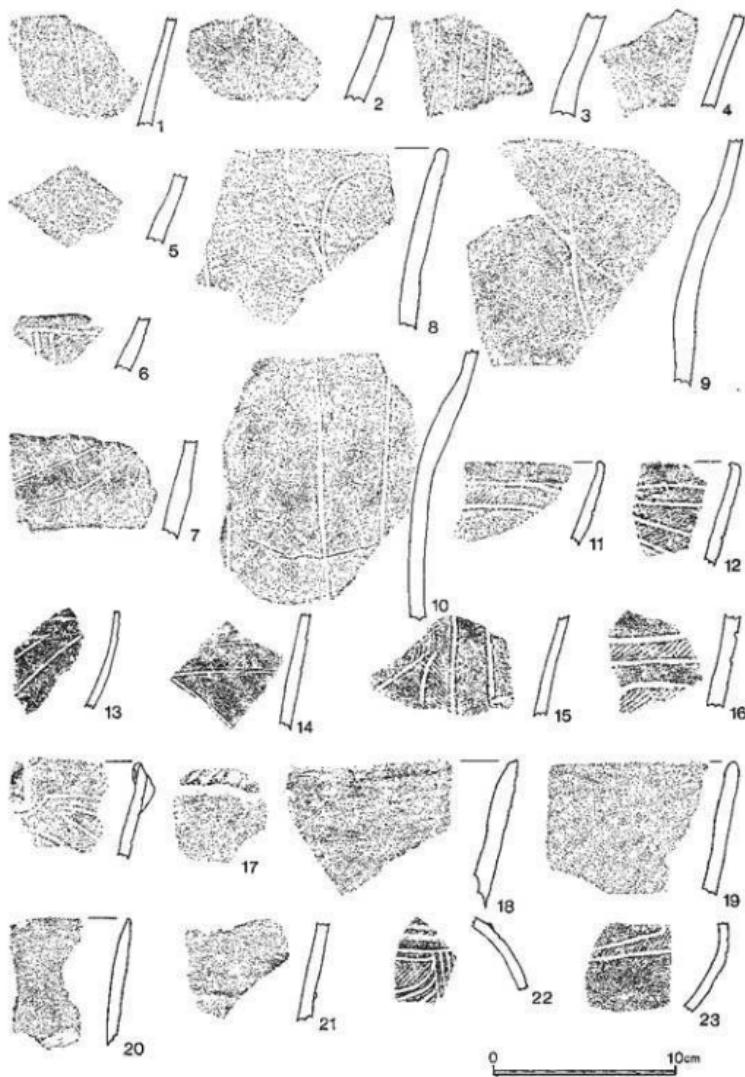
第3類（第8図、18～21）無文土器である。堀之内Ⅰ～Ⅱ式の区分が難しいため、Ⅱ式の中に含めた。19～21は口縁部破片である。21は器間に研磨が加えられているが、19～20は器皿が荒くザラザラしている。21には胴部に微隆起を持つ。

第5群土器（第8図、22～23）

注口土器である。22は刻目を伴う隆帯を持ち、縄文を施文後、横位、縦位、斜位にわたって沈線がめぐる。23は横位にめぐる2条の沈線間に磨り消し縄文が施されている。22は堀之内Ⅰ式、23は堀之内Ⅱ式に比定される。



第8図 包含層繩文土器拓影(1)



第9図 ガリッド出土縄文土器拓影図

グリット出土土器

グリット内より土器である。

第1群土器（第9図、1～13）

前期から中期末までの土器を一括した。1、2ともに前期黒浜式土器である。半載竹管文によつて横位、斜位に文様が施される。3はRの捲糸を地文に蛇行懸垂文がめぐる。4は縦位に3条の沈線を持つ磨り消し繩文である。5～6は細い沈線を地文として施文している。5は横位に1条、斜位に2条の沈線を持ち、6は胴部にかけて2条の沈線がめぐる。7～10は条線を地文とする土器である。7～8は胴部に縦位に平行して条線が施され、9～10は交差する条線がめぐっている。11は口縁部下に沈線によって区画された磨り消し繩文が施されている。12は斜位に施された沈線間に磨り消し繩文が施されている。13は左右の口縁部に無文の突帯を持つ両耳壺である。3は加曾利E I、4～6、7～10は加曾利E II、11～12は加曾利E III、13Bは加曾利E IV式に比定されよう。

第2群土器

後期称名寺式土器である。文様構成によって沈線を地文とするもの、繩文を地文とするものに分類した。

第1類（第9図、14～17）沈線によって文様が構成されるもの、14は縦位にめぐる沈線間に刺突を持つ、15～16は口縁部下に横位にめぐる沈線が施されている。17は斜位にめぐる沈線間に櫛描文が施される。

第2類（第9図、18～19）磨り消し繩文が施されるもの。18は縦位、斜位に施される沈線間、19は縦位にめぐる沈線間にL Rの磨り消し繩文が施されている。

第3群土器

堀之内I式である。分類は沈線によって文様が構成されるもの、繩文を地文として沈線が施されるものとにした。

第1類（第9図、20～22）沈線によって文様が構成されるもの。20は口縁部下に円形の列点文を持ち、胸部に貼付文が施されている。21は縦位、斜位に交差する2条の沈線を持ち、22は縦位に条線が敷状施されている。

第2類（第9図、23～24）繩文を地文として沈線が施されるもの、23は繩文を施文後、胴部に太い弧状の沈線がめぐる。24は「U」字状の沈線間に縦位の沈線が施される。

第4群土器（第9図、25）

堀之内I式である。胴部に斜位に平行してめぐる沈線間に3単位の磨り消し繩文が施されている。第9図26は横状の把手部で把手部に沈線が施される。27は波状口縁を持つ深鉢の把手部である。器面には盲孔が施され、うず巻き状の沈線がめぐっている。28は小波状になったもので2つの盲孔が施される。29は横状把手であり、口縁が内溝する。橋状下には盲孔が施されている。

（石川 俊英）

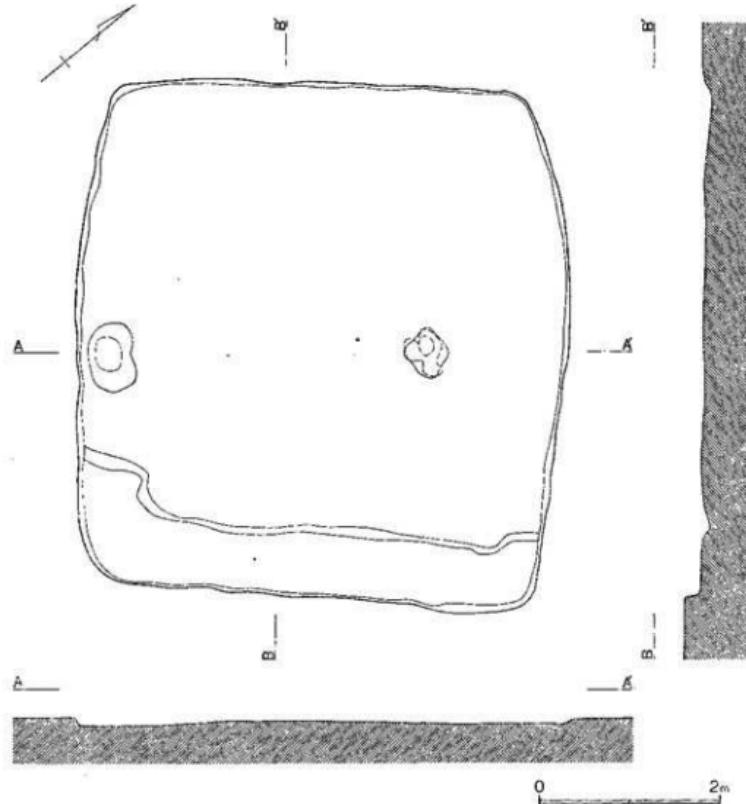
2 弥生時代の遺構と遺物

第7号住居跡（第10図～第14図）

本跡は、20-Dグリットに位置する。

確認時の所見は、表土を除去した段階から個体規模のかなりまとまった土器が出土するのに反し、プランが不鮮明で草木による擾乱が著しく進行しており、良好な遺存状態は期待できなかった。

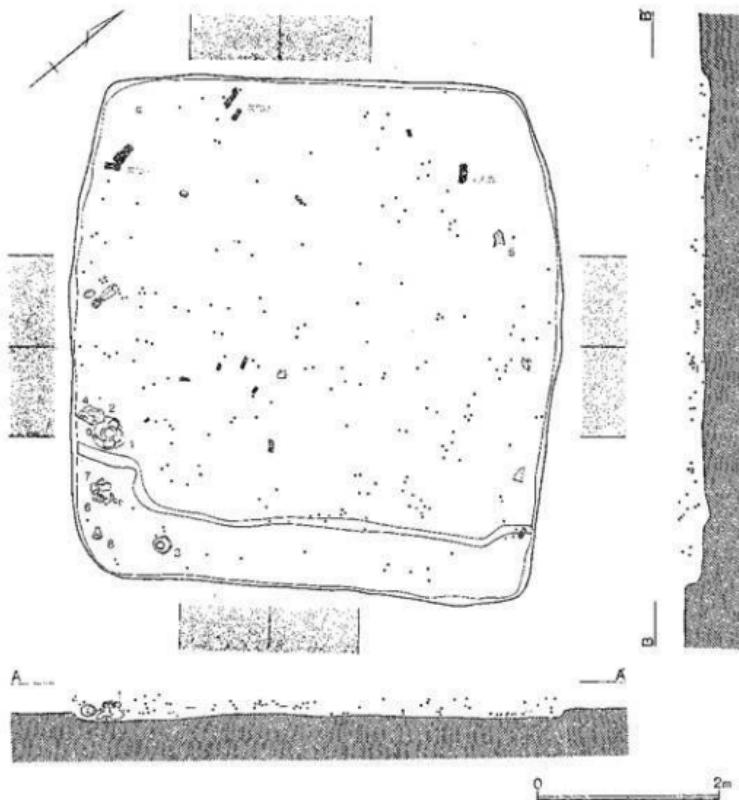
規模は東西 5.7 m、南北 5.5 m のほぼ整った隅丸方形を呈する。中軸線の示す方位は N-37°W を指す。壁はおおむね緩い傾斜をもって立ち上がるが、壁高は最深部（南東コーナー付近）で 20



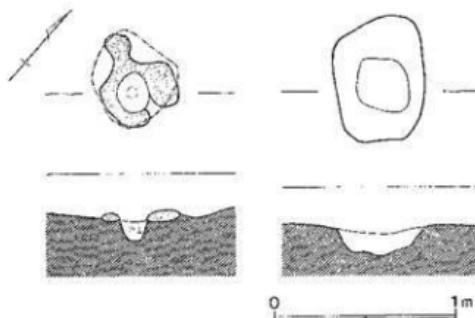
第10図 第7号住居跡実測図

cm最浅部（北西コーナー付近）では8cmを測る。東壁下および南、北壁の一部の壁下には幅70cm、高さ10cmほどの所謂ベット状造構が存在する。構造は版築によるものではなく、全てロームの削り出しによる。床面は小規模な起伏に富み、かなり硬度も高い。表面には、強い熱を受けた部分があり、赤変して硬化した箇所も認められる。炉はやや北壁よりで検出された。浅く皿状に掘り込んだ後、東西50cm、南北45cm、厚さ15cmの粘土を据え、中央に径20cm、深さ10cmほどの掘り込みがあり土器の据え付け部分と推定される。炉と対峙する位置（南壁中央部）に70×50cm、深さ15cmほどの浅い方形プランをもつピットが検出されたが、主柱穴および周溝は見い出せなかった。

埋没土および遺物の出土状態 大別3層、褐色土（第Ⅰ層）、黒褐色土（第Ⅱ層）、暗黄褐色土



第11図 第7号住居跡遺物分布図



第122図 第7号住居跡坑跡・ピット実測図

されるものに大別されるが、前者は完形ないし、火形破片が多いのに対して後者は接合関係をもたない小破片が多い。ここでは前者の出土状態について検討してみることにする。

本跡より得られた完形ないし図示可能な遺物は極めて特徴的な出土状態を示し、堅穴住居の円的な現象面での性格を規定できる出土状態を示している。壁下に設けられたベッド状の部分を一層示す存在のものとした一連の土器群の出土、さらに床面を被覆する炭化材、カーボン、燒土を含んだ薄い黒褐色土層が、南東コーナーを軸として放射状に分布すること、さらに、床面直上で数多く検出された河原石の存在等は極めて示唆的な「モノ」の在り方として注目される。

竪田第7号住居跡出土土器（第13図概要表）

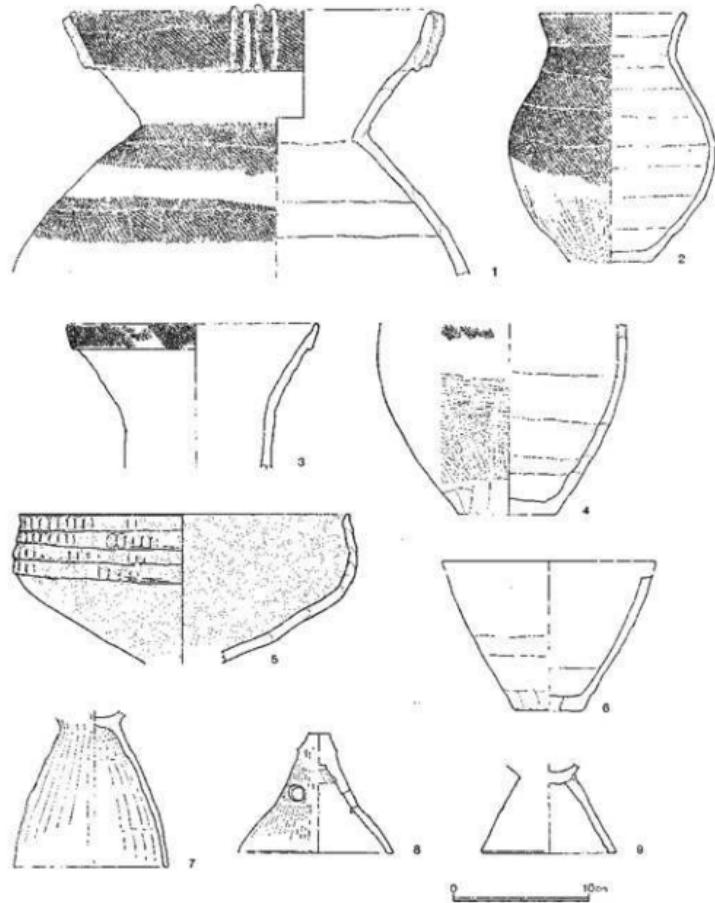
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 26.8 胴径(36.1)	口縁部は最上部の粘土盤をくらして貼付し複合形態をとり、4本1単位の棒状浮文を2対配す。頭部は「く」の字状に強く屈曲、胴部はやや継長。口縁部、頭部、胴部上半に単第RLを上→下へ順次施文その間は磨きにより無文に残す輪郭み痕は内面顕著	内面は丁寧なナゲ整形。外面の織文施文部以外はよく磨かれている 胎土・焼成良好、色調淡褐色	16欠
壺	2	口径 10.9 底径 6.2 器高 18.3	口縁部はやや短かく緩やかな立ち上がり、胴部は長胴ぎみ、内面の輪郭み痕は顯著、器盤は薄い、口肩部は原体押圧、口縁部から胴部中位まで単第RLを5段施文	外面胴部下半は継位の丁寧なヘタ磨き、内面はナゲ整形、胎土・焼成良好、色調暗赤褐色	完形
壺	3	口径 18.6	筒状の頭部からロート状に外反、口縁部は最上部の粘土盤を若干くらして貼付、細かい単第RLを施文器盤は薄い。	内外面共丁寧なヘタナデ、焼成良好、胎土やや粗、色調褐色	14欠

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	2	底径 7.2	最大径は胴部上半にある。器壁はやや厚く、特に底部は肥厚。胴部上半は細かい単節RLが施文	外面は上半がナデ、下半は横位のヘラ磨き、縦位のヘラ磨き、縦位のヘラ削りがそれぞれ施される。内面はヘラナデ。焼成良好、胎土良好 色調褐色	16欠
高杯	5	口径 24.5	大形の杯部で脚は欠、体部は緩やかな立ち上がり、口縁部へは腰をもたず緩やかに内湾、更に口唇部は弱く外反、口縁部は4段の輪郭み度を意識的に残す。器壁はやや厚め。	口縁部の輪郭み部分は指による押えが加わる。内外面共ヘラ磨きの後、赤色塗彩が施される。焼成良好 胎土や粗 色調赤褐色	16欠
鉢	6	口径(15.8) 底径 5.1 容積(11.0)	小形で台形状、造りはシャープで直線的、器壁は薄く、底部は肥厚 焼成前径1.6cmの穿孔	内外面共ナデ整形。外面下端は横位のヘラ削り、焼成良好 胎土良好 色調褐色	16欠
高杯	7	底径 11.3	細くて高い脚部 下半はあまり開かず、ややすぼまる。器壁は薄い	内外面共縦位のヘラ磨き、杯部は内外面共赤色塗彩 焼成良好 胎土や粗 色調褐色	16欠
高杯	8	底径 11.5	脚部下半を界に急な立ち上がり、よく整った形態 穿孔は3個所、径1.2cm	外面は縦位のヘラ磨き、内面は横位のヘラナデ整形 焼成・胎土共良好、色調褐色	
高杯	9	底径 10.0	直線的でシャープな造り、杯部には「く」の字状に強く屈曲	外面は横位の丁寧なヘラ磨き、内面はヘラナデ整形 焼成・胎土共良好 色調褐色	

拓影図説明（第14図）

全て壺形土器である。1～3は口縁部で、1は3段の粘土紐を故意にずらして貼付、更に指頭による押圧を加える。2、3は、単節RLを横位に施文。4、5は頸部で、胴部上半を単節による横転施文により充填するものであろう。いずれも頸部は無文に残し、よく磨かれている。焼成・胎土共に良好で堅い焼きである。

(村田 健二)

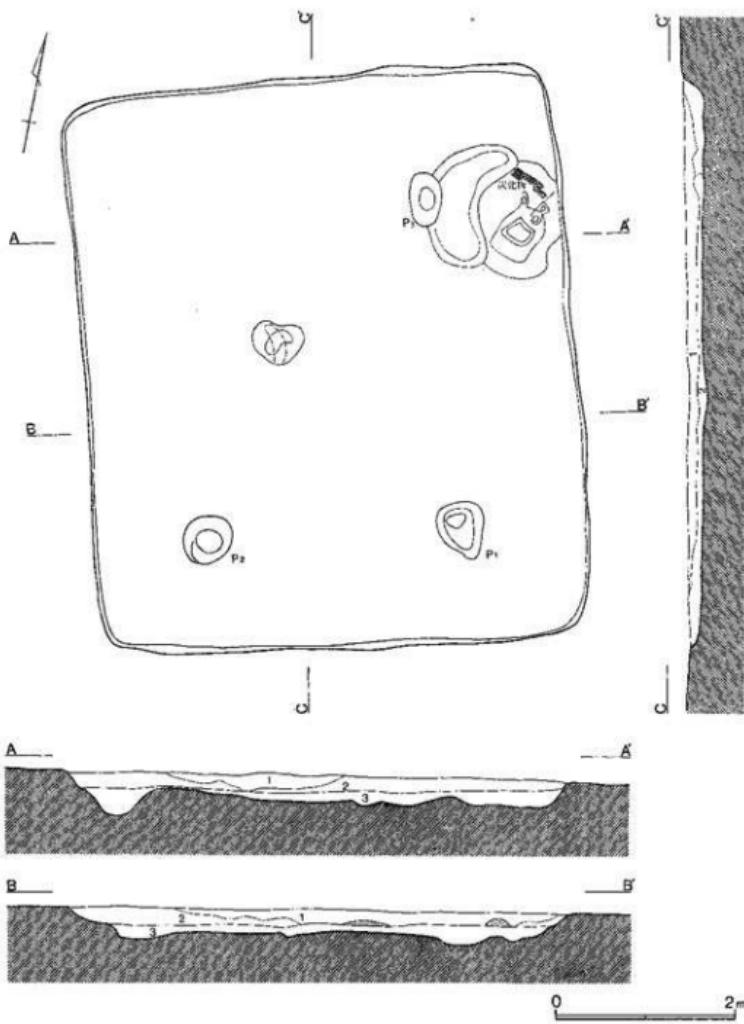


第13図 第7号住居跡遺物実測図



第14図 第7号住居跡出土遺物拓影図

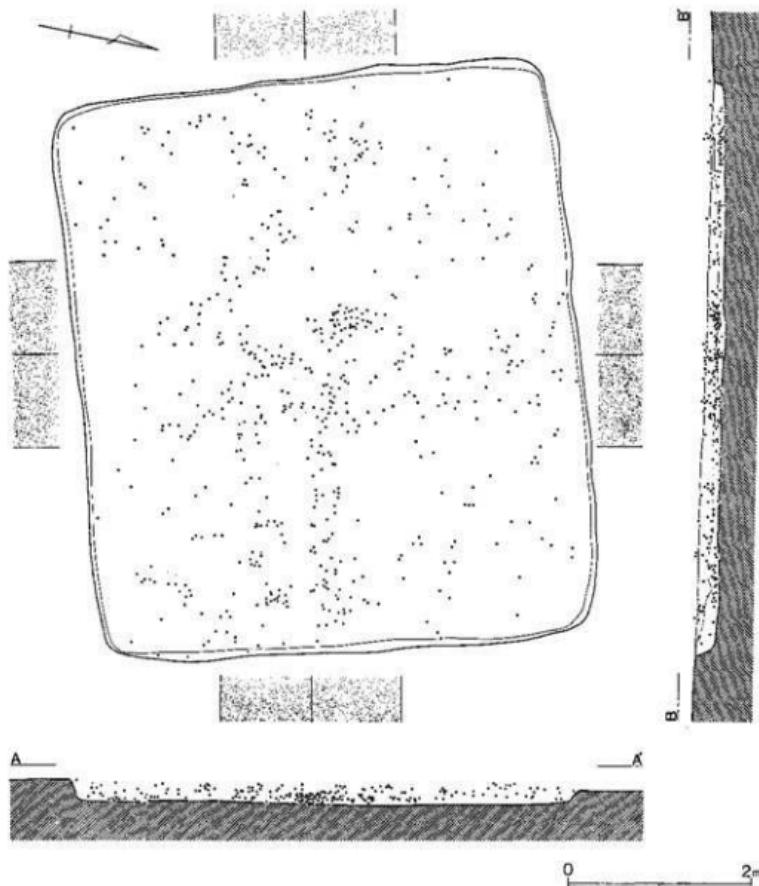
3



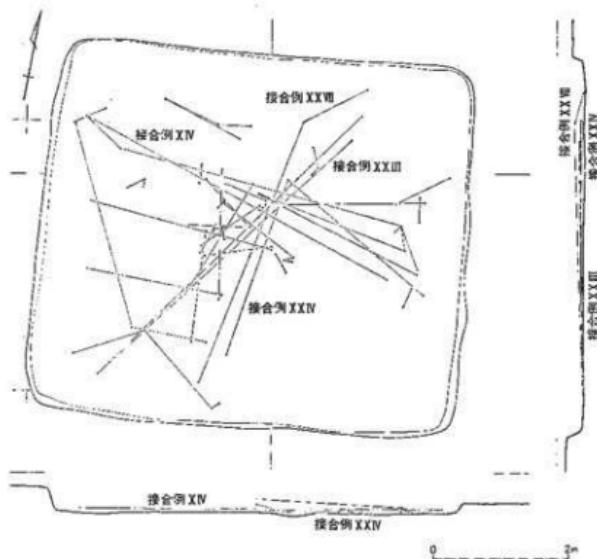
第15図 第1号住居跡実測図

第1号住居跡（第15図～第18図）

調査区西端、9—Fグリット位置する。切り合ひ関係は、1号溝で北壁西側を切り、更に2号溝が東壁中央および床の一部を切って存在する。平面プランは、長軸を東西による整った長方形屋である。規模は、東西6.32m、南北5.50m、残存する壁高は北壁を最大値に21cmを計る。長軸の中軸線の示す方位はW-13°-Sである。ピットは、5個検出された。内、主柱穴と考えられるのは、図18で示したP₁・P₂およびP₃が相当する。しかし、4本目が想定される北東部では5cm程の浅い凹

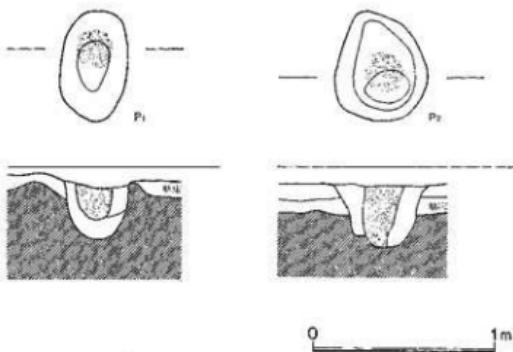


第16図 第1号住居跡遺物分布図



第17図 第1号住居跡接合関係図

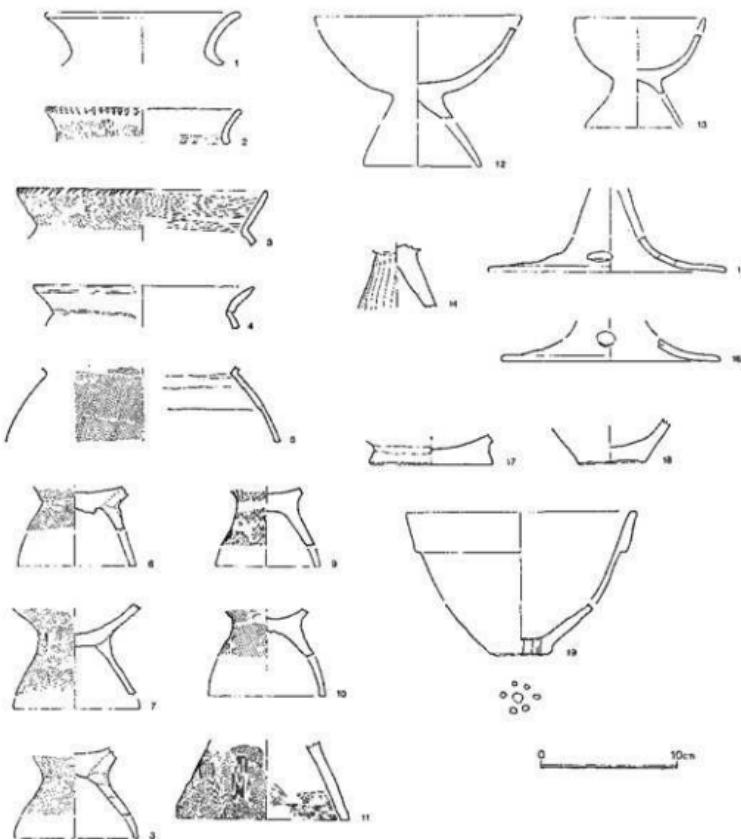
みが認められたに過ぎない。P₁は、北壁下にあり壁に向かって斜めに掘り込みを持つ。所謂様子用ピットと考えられ入り口部が想定される。P₂は、開孔部の周囲を幅60cm、厚さ7cm程の低い凸堤がある貯蔵穴と思われる。炉は、やや北壁寄りに位置する。形態は、東西50cm、南北60cm、深さ28cmの断面皿状を呈する。燒



第18図 第1号住居跡ピット半載図

土は、中央に薄い層として認められる程度である。底面は、南半部に焼土化部分が認められる。遺物の出土状態 出土遺物の内訳は、総数642点の内土器片557点、自然石85点である。土器は、その大半が台付壺形上器の胴部片であり、次いで脚部が多く、口頸部は極めて少ない。他は、図示した器台、高杯甌が出土したが蓋の出土はごく少量である。出土状態は、南壁下を中心に大形破片が

北壁周囲では、上位に大型破片、下位に小型破片が分布している。これを更に接合例から観ると、ほぼ同様な傾向を窺うことができる。図示した30例の接合資料は、多分に同一個体を含むが、その多くは、高低差・接合距離に類似点が認められる。この様な事実は、本跡廃絶期の様相を知る重要な要素になり得る。特に、入口の位置関係および、北壁の遺物の在り方、接合例の位置関係は、北壁下の埋没が最も早く進んだことを裏付けており、所謂第一次埋没土の想定が考えられる。



第19図 第1号住居跡出土遺物実測図

篠田第1号住居跡出土土器(第 図)観察表

器種番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺 1	口径(14.3)	部は強く「く」の字状に屈曲して立ち上がる。	内、外面共丁寧なナデ整形 焼成 良好、胎土良好 色調赤褐色	接合資料Ⅹ △殆欠
台付壺 2	口径(14.2)	口縁部は緩やかに屈曲	外面縦位の刷け目、内面横位の刷け目、口唇部は上方から板状工具による押圧	接合資料Ⅺ △殆欠
台付壺 3	口径(18.4)	口縁部は「く」の字状に屈曲	外面斜面、横位の刷け目、内面は横位の刷け目、口唇部は斜位からの板状工具による押圧	接合資料Ⅱ △殆欠
壺 4	口径(16.0)	口縁部は「く」の字状に強く外反輪廻み痕等によりおうとがり立つ。	内、外面共口縁部横ナデ、胴部は横位のヘラ削り	接合資料Ⅹ △殆欠
台付壺 5		脚部は整った球形、輪横み痕顯著	外面は斜位に幅広の刷け目、器壁は薄く、シャープな作り	接合資料Ⅸ △殆欠
台付壺 6		形態不整 二次火熱を受けもらい	外面粗いハケ 内面天井部は粘土瘤が突出 胎土粗 燃成良好 色調暗褐色	△殆欠
台付壺 7	底径(9.0)	二次火熱を受けもらい	外周粗いハケ 器壁は荷い仕上げ 燃成良好 色調暗褐色	△殆欠
台付壺 8		脚部はやや内湾ぎみに底部へ移行 輪横み痕顯著	荒いハケ目 燃成良好 胎土粗 色調暗褐色	△殆欠
台付壺 9		小形の脚部 底部は直線的に開く	荒いハケ目 燃成良好 胎土粗 色調暗褐色	△殆欠
台付壺 10		やや小形の脚部 底部へやや内湾ぎみに移行	幅広の荒いハケ目 燃成良好 胎土粗 色調暗褐色	△殆欠
台付壺 11		大形の脚部 直線的に強く開く	外面が縦位に、末端は横位の丁寧なハケ目、内面は横位のハケ目 燃成良好 色調褐色	接合資料 △殆欠
高 壺 12		壺部下端は弱い棱をもち、緩やかに外反、器壁は全体的に厚い	内、外面共丁寧なナデ整形 燃成 良好 胎土良好 色調赤褐色	接合資料Ⅸ △殆欠
高 壺 13		小形 壺部は塊状に内湾 器壁はやや厚い	内、外面共丁寧なナデ整形 燃成 良好 胎土良好 色調赤褐色	△殆欠
高 壺 14		やや高めの脚部 器壁は厚い	外面縦位のヘラ磨き、燃成良好 胎土良好 色調赤褐色	

器種番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高杯	15 底径(17.4)	4孔 胸部の幅が長く低い。立ち上がりは急	内面横位、外面縦位の丁寧なナゲ 焼成良好 脱土粗 色調赤褐色	殆欠
高杯	16 底径(16.0)	3孔 胸部の幅が長く低い。立ち上がりは急	内面横位、外面縦位の丁寧なナゲ 焼成良好 脱土粗 色調赤褐色	接合資料XX 15欠
甌	17 底径 9.0	器壁は厚い、胸部は球形と思われる	内・外側共丁寧なナゲ焼成良好 脱土良好 色調褐色	
甌	18 底径 5.0	小形、器壁は厚い、底面はやや上底風	内・外側共丁寧なナゲ 烧成良好 脱土良好 色調褐色	殆欠
甌	19 底径 3.8	小形、焼成前の穿孔、7孔、内蔵ぎみに立ち上がる	内・外側共ナゲ整形 烧成良好 脱土良好 色調赤褐色	

第2号住居跡（第20図）

本跡は、8—Dグリットに位置する。

規模は東西3.5m、南北3.4mを計り、整った隅円方形プランを呈する。中軸線の示す方位はN—28°—Eである。重複関係は3号住居跡との間にあり、南壁の大半が切られて存在する。遺存状態は極めて悪く、自然傾斜の影響を受ける南半部は床面を欠いており、もっとも良好な北壁でも8cm程度である。床面上の施設は、東壁寄りに径50cm×60cmほどの赤化した部分があり、掘り込みを持たないがと考えられる。また、西壁寄りには70cm×45cm、深さ15cmほどの不整形ピットが検出された。

遺物の出土状態 出土遺物の総数は僅かに14点で、全て五領期の所産と考えられる壺形土器の小破片である。大半は床面に密着した形で出土した。また、多量の木炭および脱土の細粒子がかなり密に分布し、木炭は炉址の周囲が特に顯著であった。

以上、本跡の廃絶時期を物語る明確な資料の提示はできないが、土器細片をも加味すれば大略五領期の所産と考えて大差ないであろう。

(村田 健二)

第3号住居跡（第20図）

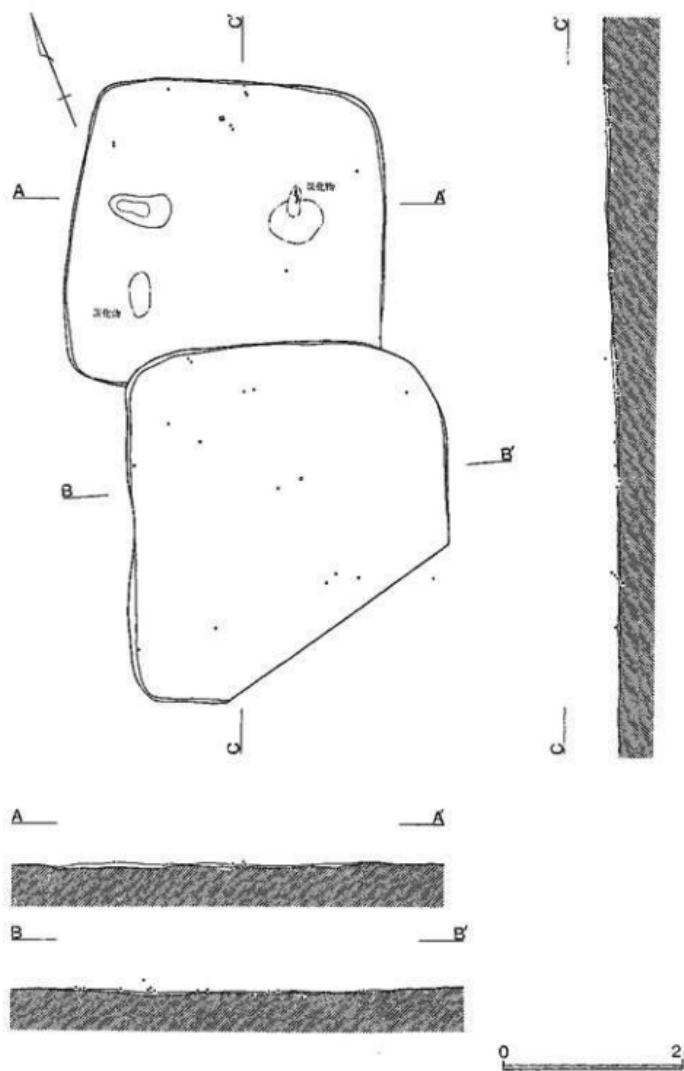
本跡は、8—Cグリットに位置する。

規模は東西3.5m、南北3.95mを計り、整った隅円長方形プランを呈する。中軸線の示す方位はN—24°—Eであり、重複する2号跡とほぼ等しい。床面は削平のため痕跡を止めず、炉跡、ピットなど内部施設も一切検出されなかった。掘り形は確認面から5cm前後の深さを有し、ローム、ブロック、複色土により充填されていた。

遺物の出土状態 掘り形充填土中より出土されたものが大半で、土器14点、石製品の木製品1点の計15点である。出土位置は特に個たりを持つこともない。また、垂直分布に浮遊する遺物が多いことは、充填土として瞬時の所産であることをよく物語っている。

本跡の廃絶時期は、2号跡同様土器細片をもって語る他はないが、一様五領期の範疇と考えられ2号跡廃絶後、時を経ずして當なされたものと理解される。

(村田 健二)



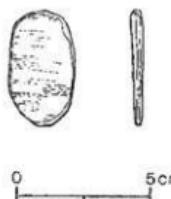
第20図 第2・3号住跡実測図

第4号住居跡（第22図～第25図）

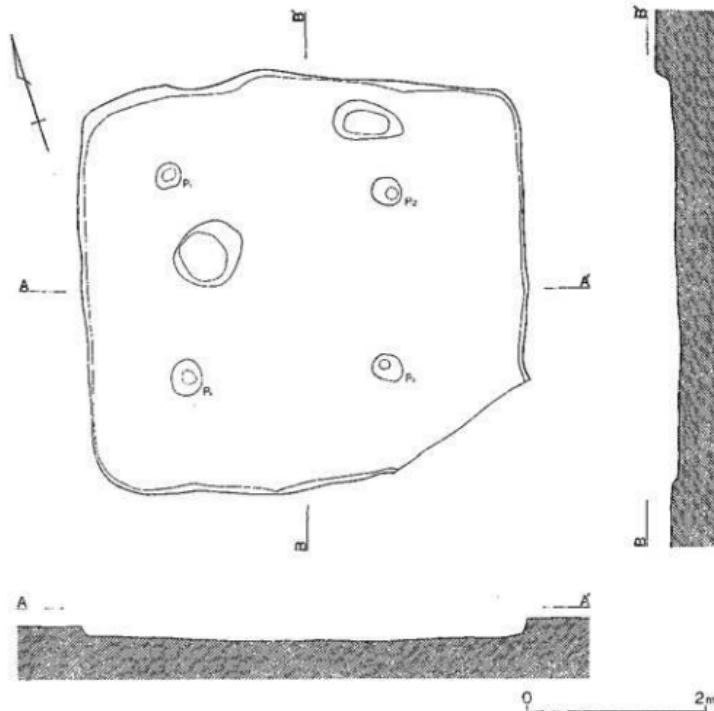
本跡は、9-B グリットに位置する。主軸の示す方位

は N-19°-E である。壁高は深耕と東への緩傾斜の為、北壁の20cmを最高に漸次レベルを減じ、東壁部では確認面とほぼ同値となる。床面はフラットである。壁溝は存在しない。ピットは6個検出され、内 P₁～P₄ は主柱穴と考えられる。P₅ はカマドの東側に隣接しており貯蔵穴と思われる。P₆ は8cm弱の浅い皿状の掘り込みで充填土には焼土が混入していた。

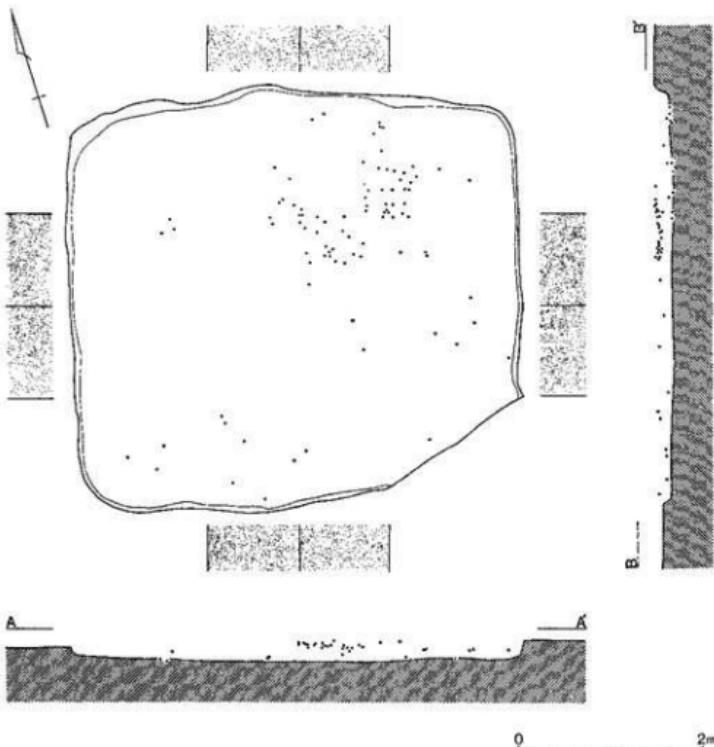
カマドは北壁のはば中位に構築されている。壁外への掘り込みは少なく、實際に軌道をもつ。調査時の所見を總てその構造を概観すると、燃焼部分に70cm×70cm、深さ5cmの浅い不整の掘り込みを



第21図 第3号住居跡出土遺物



第22図 第4号住跡実測図

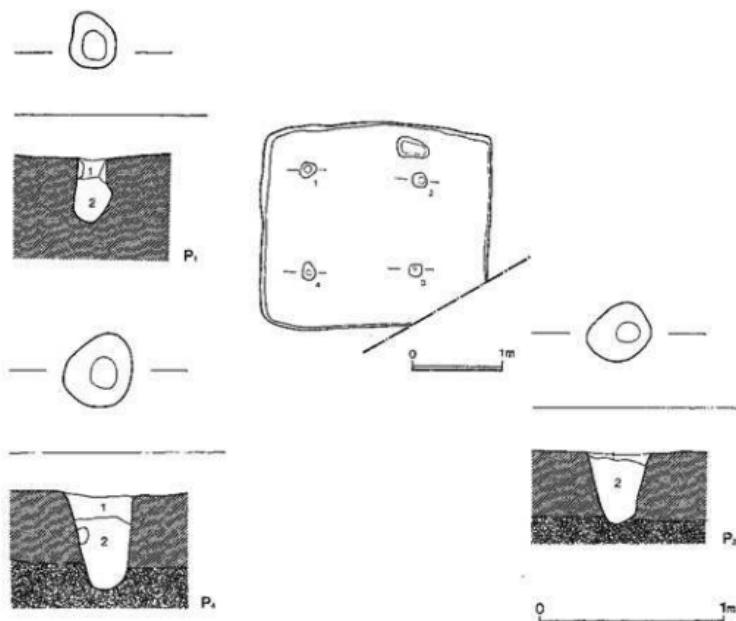


第23図 第4号住居跡遺物分布図

造り、その両側に径40cmほどのピットを設け袖部の位置を決める。西側には逆位、東側には正位の状態で長胴甕を埋め込み粘土にこって固定する。両袖部に長胴甕2個体（1個体は底部穿孔）を横位に配して懸架する。全体を砂質粘土により被覆する。支脚用には、方形状の自然石をもつている。

以上の様に推測可能であり、煮沸用の甕および支脚は南北のセクション図により明らかなる通り本来の位置関係を知ることができる。

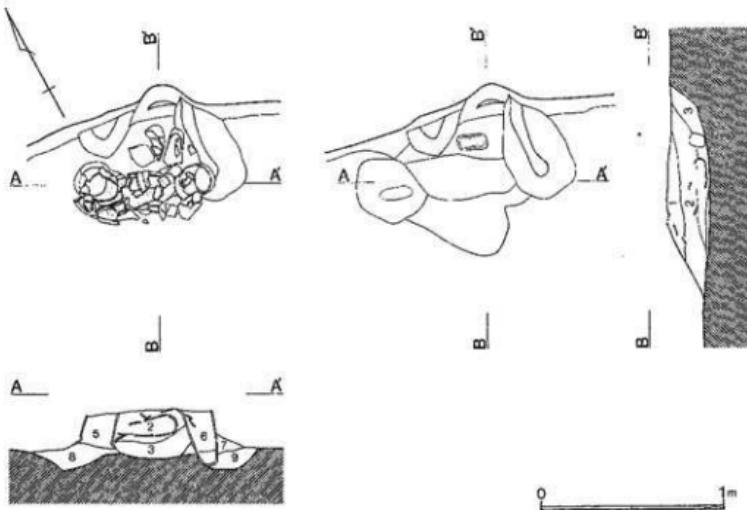
遺物の出土状態 出土総数は84点である。内土器74点、石（自然石）10点である。遺物の総数84点は該期の住居跡としては決して多い方ではなく、遺存状態の悪さが反映したものと考えられる。土器74点の大半は、長胴甕の胴部片でかなりまとまった出土状態を示している。平面分布によればカマドおよびカマド周辺に一群、カマドの南側に一群、そして散漫に分布するものに分けられる。垂直分布ではカマド内のものを除くと、カマドの南側の一群には床面直上のものと確認面上で分布するものに分けられる。さらに、接合関係はカマド内およびカマド南西の床面直上に分布する一群



第24図 第4号住居跡ピット半裁図

にのみ認められ、他は皆無である。

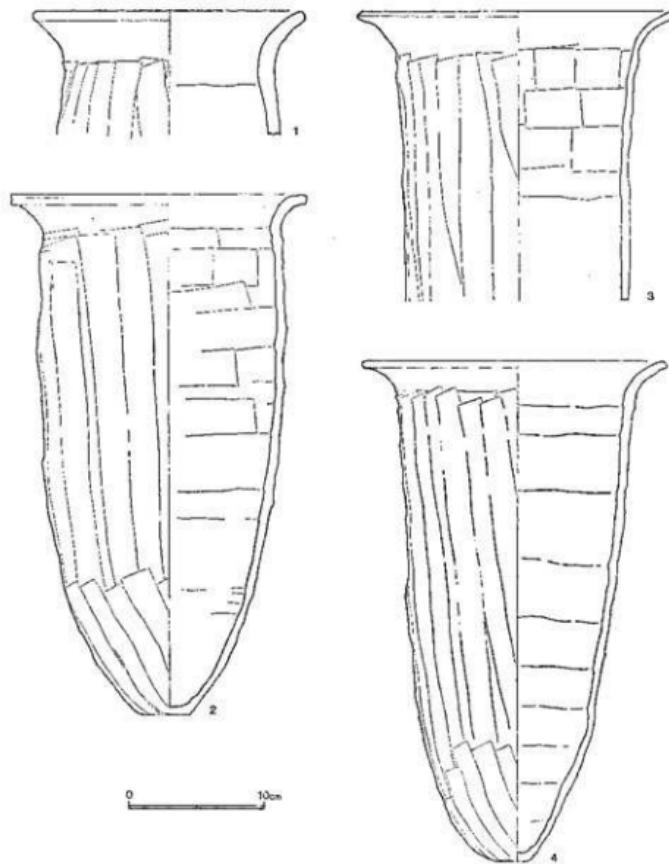
以上の事実から本跡廃絶期のものはカマドおよび周辺で出土した。長胴甕、須恵器、蓋形土器が相当するものと考えられる。
(村田 健二)



第25図 第4号住居跡カマド実測図

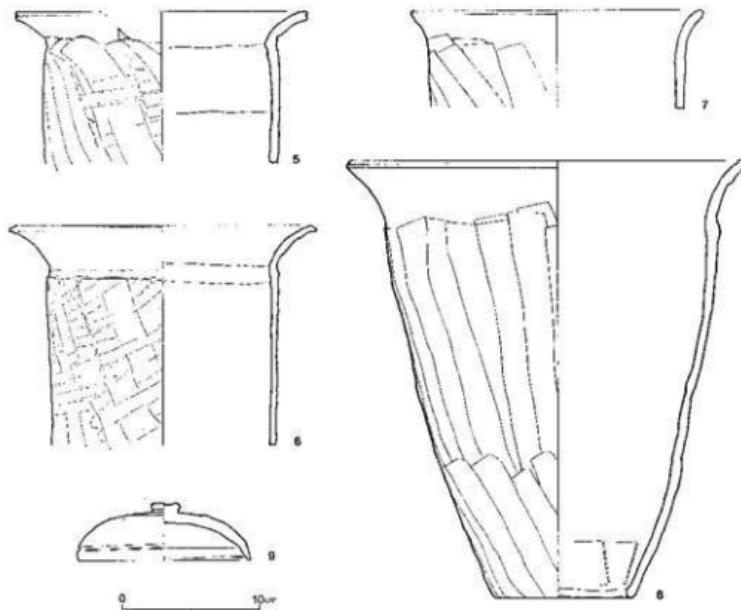
第4号住居跡出土土器（第26～27図）観察表

器種	与号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師甕	1	口径(20.0)	口縁部は緩やかに外反、肩部は張らずに、直線的な胴部へ移行 器壁は厚い。	口縁部内外面横ナデ、胴部外面は継位のヘラ削り、内面は横位のナデ 焼成良好 色調棕褐色 胎土良好	胎欠
土師甕	2	口径 21.8 底径 3.4 器高 38.0	口縁部は緩やかに外反、肩部は膨底により生じた強い稜をもつ。胴部は中位でやや張らみを持つがほぼ直線的である底部は極めて小さい。輪積み痕顯著 凸凹が目立つ	口縁部内外面横ナデ、胴部は継位のヘラ削り、輪積み痕顯著、焼成良好、色調褐色、胎土七やや粗	胎欠
土師甕	3	口径 23.4	口縁部は緩やかに外反、胴部は直線的、輪積み痕が顕著、凸凹が目立つ。	口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は継位のヘラ削り、内面横位のヘラナデ、焼成良好、色調褐色、胎土良好	胎欠
土師甕	4	口径 22.4 底径 3.0 器高 36.0	口縁部は強く外反、胴部は直線的 底部は丸底風、輪積み痕が顕著で表面の凸凹が目立つ。	口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は継位のヘラ削り、内面は丁寧なナデ、焼成良好、色調棕褐色 胎土やや粗	胎欠



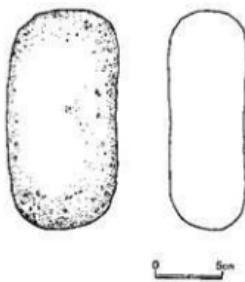
第26図 第4号住居跡出土遺物実測図(1)

器種番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師甕 上部窓 5	口径(21.0)	口縁部は強く外反、胴部は直線的 器面は輪郭み痕跡が著で凸凹が目 立つ。器壁は薄い。	口縁部内外面横ナデ、胴部外面は 斜位のヘラ削り、器面はヘラ削り 整形時に生じた凸凹および輪郭み 痕が顕著、焼成良好、胎土良好 色調暗褐色	輪欠



第27図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

器 蔵番号	大きさ(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
土師甕 6	口径 22.4 底径 31.6 器高 10.2	口縁部は強く外反、胴部は直線的 器面は輪積みおよび整形時の凸凹 が顯著、器壁は極めて薄い。	口縁部内外面横ナデ、胴部外面は 斜位のヘラ削り、器面は整形時に 生じた凸凹が著しい内面は丁寧な ナデ、焼成良好、胎土良好 色調 暗褐色	孔欠
土師甕 7	口径 28.8 底径 31.6 器高 10.2	口縁部は緩やかに外反、口縁部は 若干突出、胴部は緩やかにすぼま る。器壁はやや肥厚器面は凸凹が 顯著	口縁部内外面横ナデ、胴部外面は 斜位のヘラ削り 内面は丁寧なヘ ラナデ 焼成良好 胎土粗 色調 褐色	孔欠
土師甕 8	口径(21.2)	口縁部は短かく、緩やかに外反、 器壁はやや肥厚	口縁部内外面横ナデ、胴部外面は 斜位のヘラ削り、内面は丁寧なヘ ラナデ、焼成良好、胎土大略良好 色調褐色	孔欠



第28図
第4号 住居跡実測図

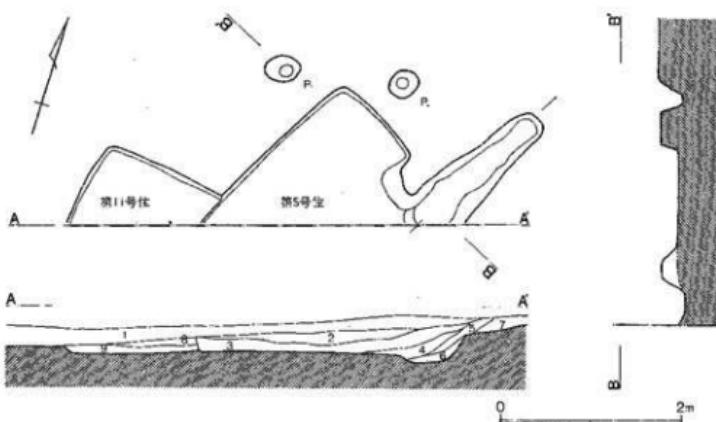
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器	9	口径 12.4 肩部径 7.0 器高 4.1	全体的に丸みを持ち、肩部の棱も 不鮮明である。口縁部上に太い条 線をもつ。つまみは、低い乳頭状 のもの。	ロクロ模は不鮮明特に内面は平滑 にナヂ調整が施される。焼成良好 色調淡青灰褐色	孔欠
磨石	10	長さ 16.0 厚さ 8.0 幅 5.8	広い面の裏方に使用した痕跡が認 められる。特に圓化した面はかな り使い込んでいる。		

第5号住居跡（第29・30図）

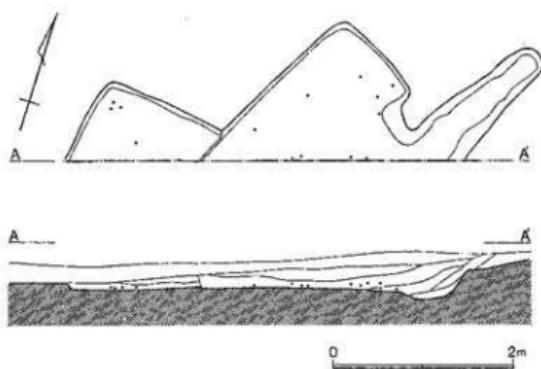
本跡は、13-A グリットに位置する。遺物の大半は調査区外にあり、発掘部分は全体の5分の1に満たない。重複関係は東側の10号跡との間にあり本跡が新しい。

形状は方形を基調とし東壁のほぼ中央にカマドが設けられていること以外全て不明である。中軸線の示す方位 N-30°-E である。全体は垂直に近い掘り込みをもち、壁高は最深部で26cmを測る。床面はフラットであるが、軟弱な造りである。壁溝は存在しない。ピットは、床面上では遂に検出されなかったが、東壁外26cmに径35cm、深さ30cm、北壁外40cmに径32cm、深さ28cmのP₁、P₂があり、位置的に考えて壁外柱穴を想わせる。カマドは東壁のほぼ中位に存在する。遺存状態は、天井部が消失しているが袖部は幅30cm、長さ35cmが計測でき比較的良好といえる。掘形の形状から機能面を探ると、まず壁外へおよそ13mほど突出する壁道をもち、燃焼部は長径1m強、短径60cmほどの橢円状の掘り込みをもつ。袖部は全て砂質粘土により構築されている。遺物の出土状態は、その総数が18点と少なく、規則性等を分析するには余りにも少ない数量であるが、実に特徴的な分布を示している。遺物は土師器変形土器に限られ、床面直上ないしは床面に近い部分にある物と、カマド燃焼部より得られた一括土器がその全てである。胴部破片である為同定は難かしいが、同一個体である可能性が強い。

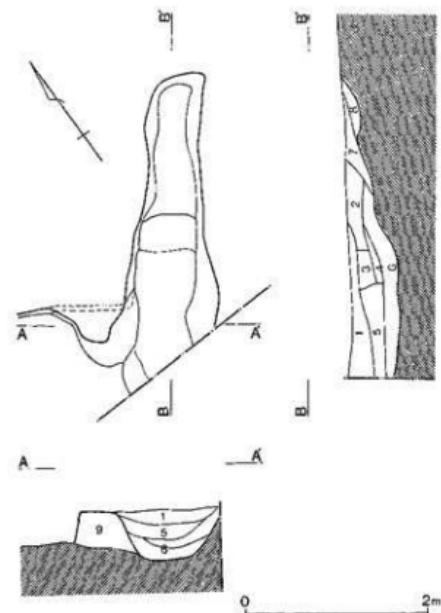
（村田 健二）



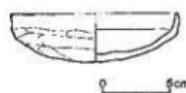
第29図 第5・11号住居跡実測図



第30図 第5・11号住居跡遺物分布図



第31図 第5号住居跡カマド実測図



第32図
第5号 住居跡出土器物

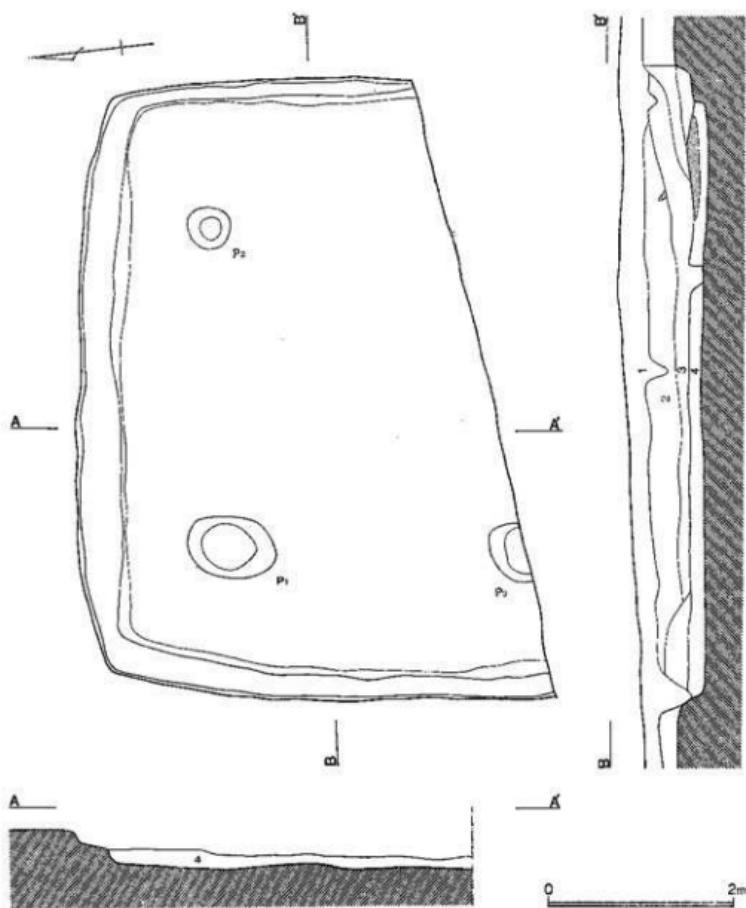
篠田遺跡第5号住居跡出土土器（第32図）観察表

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土器	1	口径 12.3 器高 3.5	部体は丸みをもって立ち上がり、 口縁部は硬く立ち気味となる 器底は薄い。	口縁部内外面横ナデ、底部ヘラ削 り、胎土・焼成大略良好 色調褐 色	残欠

第11号住居跡（第29・30図）

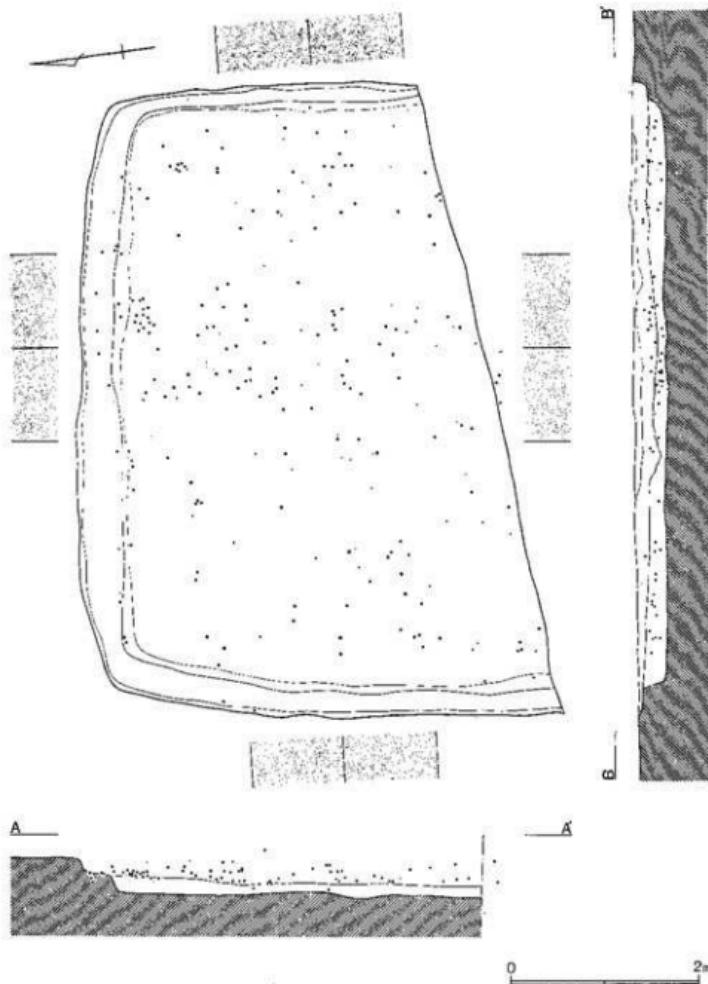
第5号住の西側で重複関係にあり、東壁部を破壊され、南側の大半は木掘区に含まれる為詳細は不明である。プランは、コーナーをもつことから方形であることは理解されるが、15cm前後の浅い壁と、床面にまで及ぶ搅乱の跡、造構の性格すら明確にし得ない。塗溝、ピットは検出されなかつた。遺物は、全て土器で、床面直上より出土した。出土土器は、変形土器の胴部片であるが、刷け目が全てに見られることから、大略五氣期の所産であることが想定される。（村田 健二）

第6・10号住居跡（第33図・第34図）



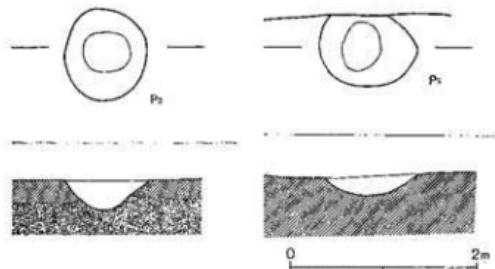
第6・10図 住居跡実測図

本跡は、21-B グリットに位置する。一部調査区外にかかるため遺構の全容を明らかにすることはできない。重複関係は、2軒の方形住居が入れる風に重なって存在する。新旧は、深く内側に位置するものが古、浅く大きなものが新である。呼唱は、新を第6号住古を第10号住とした。



第34図 第6・10号住居跡遺物分布図

第6号住居は、整った方形プランを呈する。規模は、東西6.75m、南北は推定6.60m、壁高は平均50cmを計る。壁講は存在しない。壁の立ち上がりは総じて急な造りであるが、床面へは緩やかに移行する。床面は、陛下を除く全ての部分が貼り床されており、フラットで堅く良くなってしまった状態



第35図 第6・10号住居跡ビット半載図

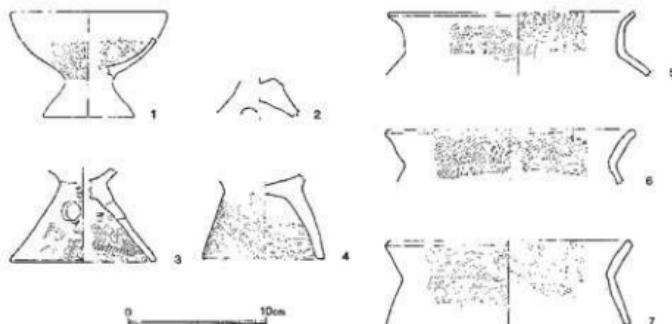
明瞭であるが、北寄りに変色した部分が確認できた。

遺物の出土状態 総数178点が出土した。その内訳は、土器146点、自然石22点あるが、図示可能なものは極めて少ない。土器の大半は、台付壺形土器であるが、吉ヶ谷期の壺形土器数点が含まれていた。出土状態は、平面分布、垂直分布を観る限り狭い範囲で、やや比高差をもった（集中ブロック）をいくつか形成する形で存在する。接合例は認められないが、同一個体と解されるものがかなり含まれている。一方、他遺構に見られる様な、他時期の混入は認められない。また、層序は長期の埋没と解し難い堆積を示している。

（村田 健二）

で検出された。ビットは、図示したP₁、P₂、P₃が検出されたが、本跡の下位に存在する10号住居と共有しており『同位置改築』の好例と思われる。炉跡は中央やや北寄りに位置する。貼り床を浅く掘り込んだ簡略な地床跡である。規模は、東西60cm、南北85cm、深さ8cmを計る。黒色中の切り込みのため焼土は不

第10号住居跡 第6号住居跡床面の堅固に貼り床された部分が相当し、6号住居跡の壁間をそれぞれ均一に25cm程つづめた範囲である。規模は、東西6.30m、南北は推定6.10m程、壁高は確実面からおよそ70cmを計る。床面は、地山ロームをフラットに仕上げており、極めて堅緻である。炉跡は検出されなかった。ビットは、前述通り第6号住居と共有している。規模は、第33図の通り開孔部に比して貧弱な深度であるが、当地域特有の『赤砂利層』が浅く位置することが大きな弊害とな



第36図 第6号住居跡出土遺物実測図

ったものであろう。

遺物の出土状態 出土総数149点。内訳は土器142点、自然石7点を数える。出土状態は、第6号住居同様ブロックを形成するが、出土遺物の大半が床面より浮遊して検出された。特に集中個所も認められない。更に、充填土の分割も不可能であった。以上、本跡もまた「かたづけ行為」の後短期間での埋没が成されたものと考えられる。

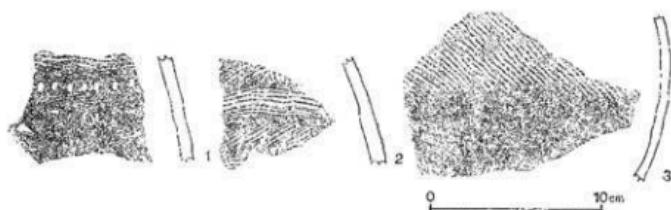
第6号、第10号住居は、所謂「切り合い」ではなく「同位置改築」、良好な貼り床部分が示す通り、拡張例として良好な資料といえる。

篠田遺跡第6号住居跡出土土器（第36図）簡表

器種番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高杯 1		深い碗形を呈し、形態良く整い丁寧なつくり、器壁は薄い。	外面共丁寧なヘラ磨き、焼成良好堅い焼き、胎土良撰 色調淡赤褐色	%欠
高杯 2		焼成前穿孔（3孔）やや小形	外面共丁寧なヘラ磨き、焼成良好 胎土やや粗 色調褐色	
高杯 2 底径	10.2	形態良く整い丁寧なつくり、焼成前穿孔（3孔）	外面共刷毛目が斜位に施されるが外面は更に磨きが加わる。焼成良好、胎土良撰 色調暗褐色	%欠
台付甕 4 底径	8.8	直線的で開きの弱い脚部 器壁はやや厚い。	外面は斜位の荒い刷毛目、内面はナデ整形 焼成良好 胎土やや粗 色調褐色	
台付甕 5 口径(17.8)		口縁部は断面「コ」の字状に屈曲 全体的に薄い器壁、丁寧なつくり	外面は縦位、内面は横位の刷毛目 焼成良好 胎土良撰 色調褐色	%欠
台付甕 6 口径(18.2)		口縁部は「く」の字に強く屈曲、 器壁は口縁部がやや肥厚 やや荒いつくり。	外面は斜位、内面横位の刷毛目 焼成良好 胎土やや粗 色調褐褐色	%欠
台付甕 7 口径(17.9)		口縁部は緩やかに屈曲、口唇部は若干突出 脊部はあまり張らない	外面は斜位、内面横位の刷毛目、 焼成良好 胎土良撰 色調褐色	%欠

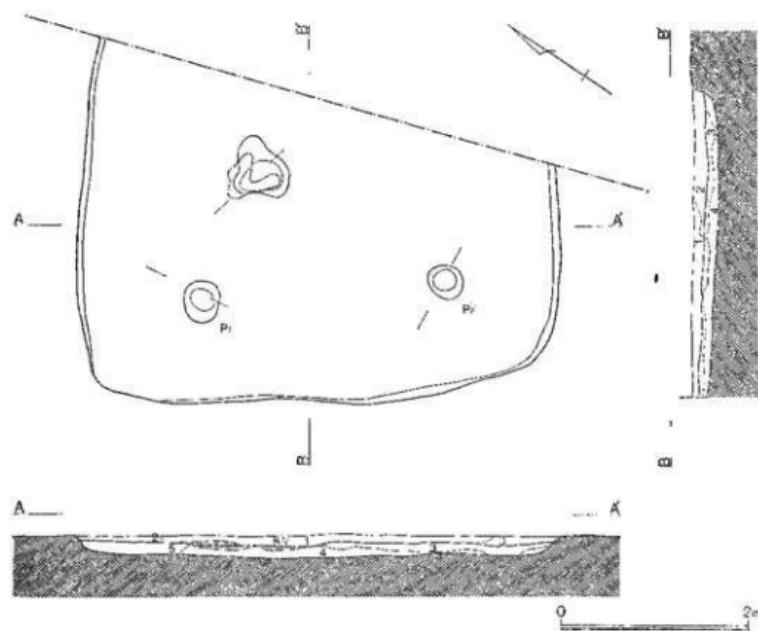
拓影図説明（第37図）

1、2は大形整形土器の脚部上半である。1は波状文下に板状の工具による刺突文が、2は5本一組の櫛歯による平行線文を等間隔に配し、右廻りの波状文により充填、器壁はやや肥厚、3は窓形土器の脚部中位である。上半は細い単節RLにより充填、下半はよく磨かれている。焼成は極めて良い。



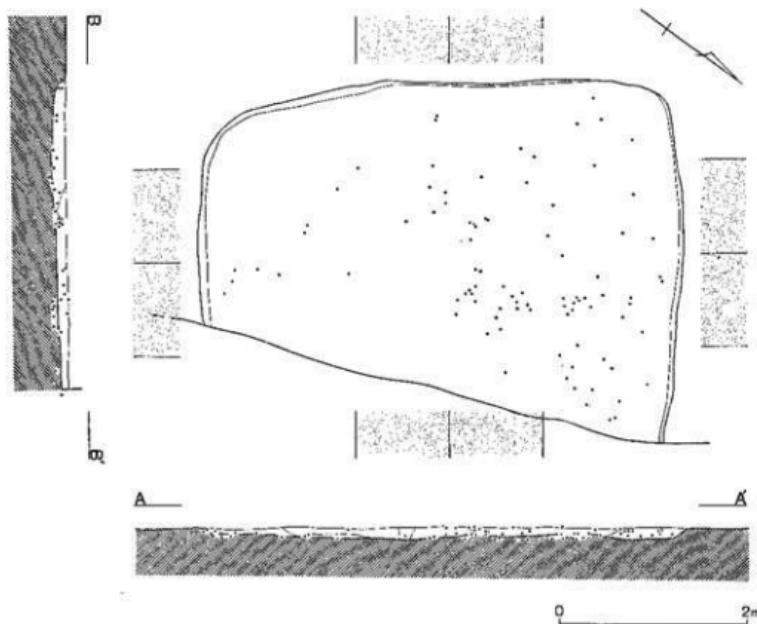
第37図 第6号住居跡出土遺物拓影図

第8号住居跡（第38～41図）



第38図 第8号住居跡火葬図

本跡は、35-Cグリットに位置する。東半部が調査区外（東武東上線）に含まれる為、全容を明らかにすることはできなかった。また、後世の攪乱により、確認面がかなり低い位置に下がった。プランは、唯一明らかな西壁を柱穴位置から、一辺 5.2 m 程の整った隅円方形が考えられる。壁は、かなり詰め立上がりを示し、壁高の最高値は、西壁の 12cm を計る。床は全面貼り床が施されるが、硬度は極めて低く、炉跡周辺も同様に軟弱であった。貼り床下の掘り方はほぼ全面 10~15cm

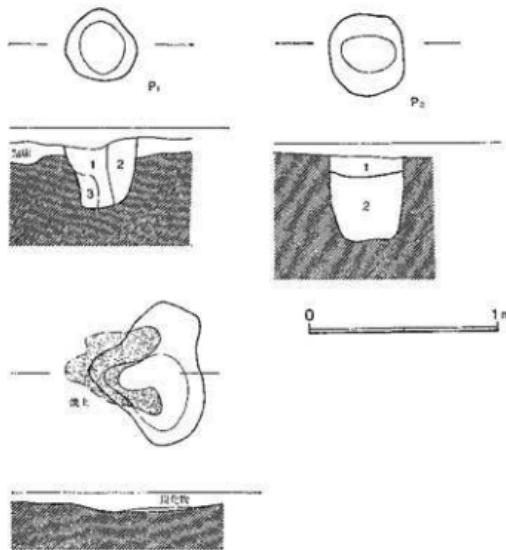


第39図 第8号住居跡遺物分布図

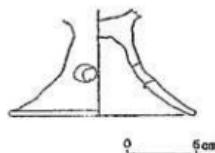
程の深度を持ち床下の掘り方はほぼ全面10~15cm程の深度を持ち、床面は比較的フラットな造りである。ピットは、西側に2個検出された。規模・形状等は、第44図の通りである。炉跡は、北寄りに位置する。規模は、東西65cm、南北60cm、深さ15cmを測る。プランは、やや北寄りに不整形の強く熱を受けた部分が存在する。全体としては、断面浅い皿状を呈する簡略な地床炉である。

遺物の出土状態 出土総数170点、内訳は土器、162点、自然石8点である。本跡の出土状態はやはり特徴的で、層位に則していくつかのブロック状を成している。また、図示可能な大形破片の出土も高壙形土器脚部1点のみであり、接合資料も存在しない。以上の様な廃棄パターンは、ある一定時間内における分割廃棄（投棄）であったことが看取される。

（村田 錠二）



第40図 第8号住居跡・炉跡・ピット半壁図



第41図 第8号住居跡出土遺物

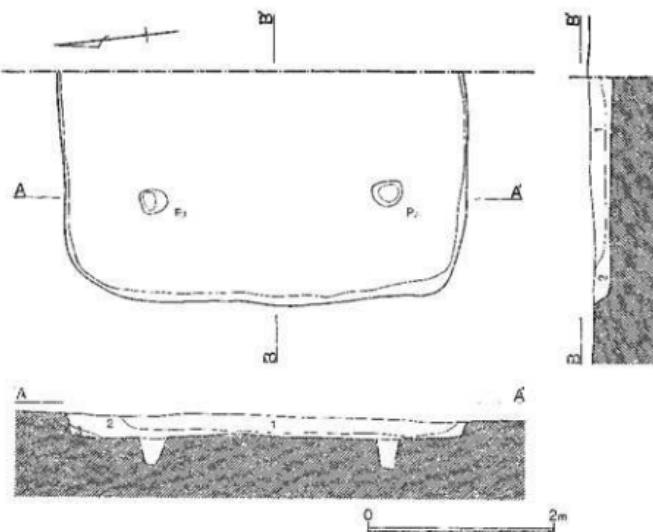
篠田遺跡第8号住居跡出土土器（第41図）観察表

器種番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高 坯 1	底径 13.4	脚部のみ造存、坯部との接合部はやや太目。整った作り器壁は薄い焼成前等間隔に穿孔（3孔）	内面は主に横位のナデ、外面は縱位のナデ並形 烧成良好 脂土や粗 色調淡赤褐色	殆欠

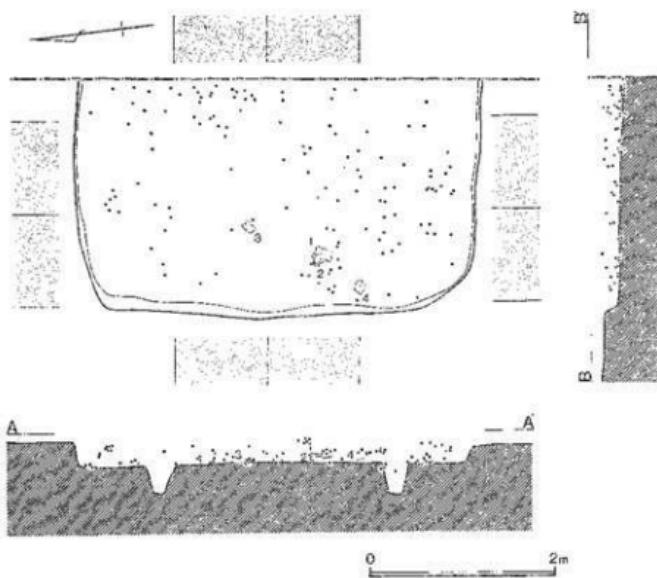
第9号住居跡（第42～45図）

本跡は、35-A グリットに位置する。東側は調査範囲外の部分（東武東上線）に接する。住居跡は、かなりの部分を、この範囲外に包含させているため全容を知るのは困難である。

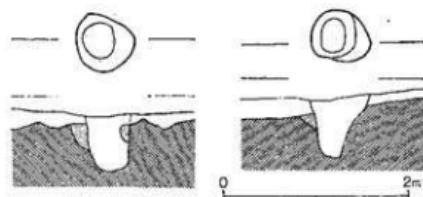
プランは、検出された東壁から推定すると、隅丸長方形である可能性が高い。規模は、南北4.4m、東西は、炉跡が調査範囲内に見当らないことから5m強の数値が考えられる。壁体は、大略東西が緩やかな立ち上がり、南北がやや急な立ち上がりである。壁高は、平均25cm程度が確認された。床面は、貼り床の痕跡はなく、ソフトローム下位を使用しているが、西壁下から住居跡中央にかけて、ローム床が露呈せず、黒色土が薄く被覆する部分が存在した。ピットは、主柱穴と思われるものが2個検出された。第44図で示した通り、断面形は円筒状に掘り抜かれており、底径がほぼ柱の太さを示すものと思われる。規模は、開口部径30cm、深さ30cm、弱開口部平面形は隅丸方形を呈する覆土の層序は、草木の擾乱により不鮮明であるが、大略3層に区分される。第1層は、ローム・ブ



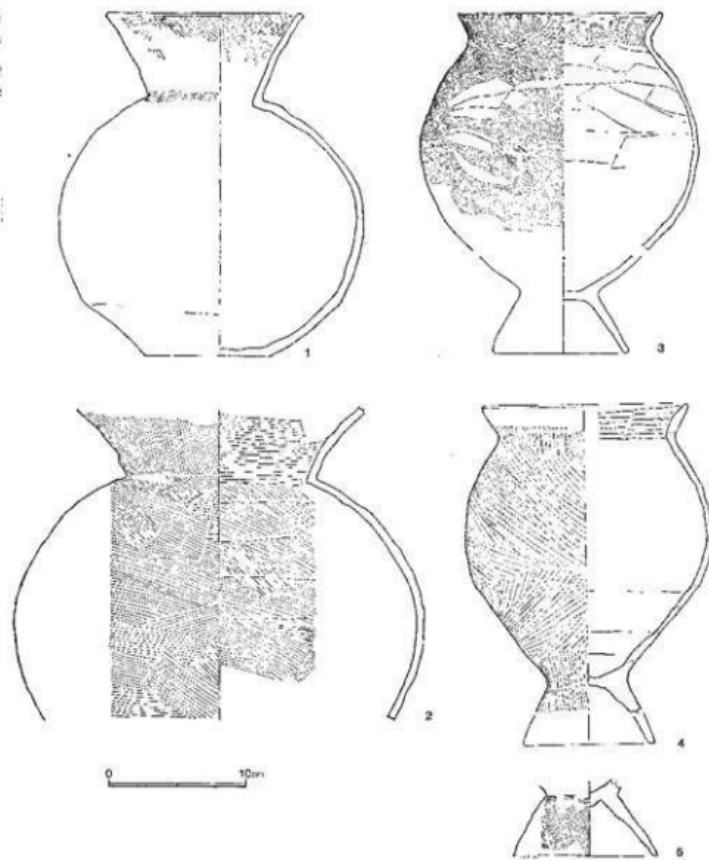
第42図 第9号住居跡実測図



第43図 第9号住居跡遺物分布図



第44図 第9号住居跡ピット半断面図



第45図 第9号住居跡遺物実測図

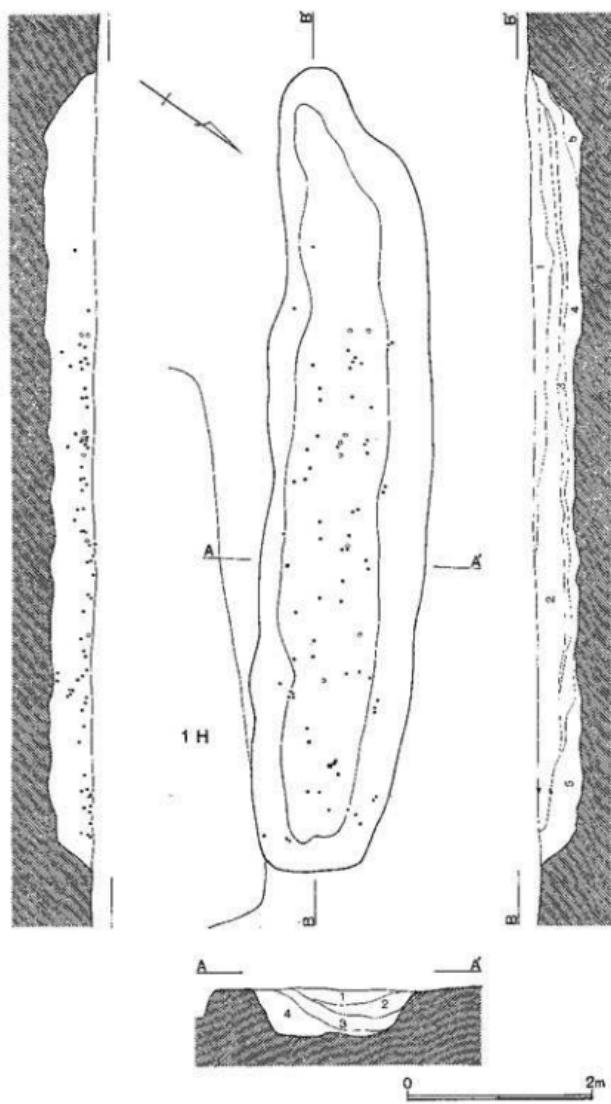
筆田遺跡第9号住居跡出土土器（第45図）観察表

器種番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺 1	口径 14.4 底径 9.3 器高 24.9	頸部は強く「く」の字に屈曲、口 部はやや立ちぎみに外反、胴部 は少しつぶれた球形、下位は輪状 み底が特に顯著	全面に刷けによるナデ整形が施さ れた後、丁寧なヘラ磨き、内面は ナデ整形 焼成良好 胎土良撰 色調明褐色	%欠
壺 2		口縁部は強く「く」の字に屈曲。 胴部はややつぶれた球形を呈する 口縁部の接合は極めて不完全、器 壁は薄い。	内外面共荒い刷け目、縱あるいは 斜位に施される。焼成良好 胎土 やや粗 色調暗褐色	%欠
台付壺 3	口径 15.0	口縁部は短く、斜め上方に立ち上 がる。口唇部は斜位の刻みが加わ る。胴部はほぼ球形をなす。器壁 は薄く良く整っている。	外面は全面に斜位の刷け目、胴部 はナデ調整、内面は口縁部が横位 の刷け目、胴部はナデ整形、焼成 良好、胎土良撰 色調暗赤褐色	%欠
台付壺 4	口径 15.2 底径 (9.6) 器高(24.7)	口縁部は短く緩やかに屈曲、最 大径は胴部中位にあり、下半は急 激にすぼまり。胴部は比較的小さ く低い。器壁は薄い。	口縁部は横ナデ、胴部は浅く太い 刷け目が斜位に全面施される。内 面は口縁部に同様の刷け目が、胴 部はナデ整形、焼成良好 胎土や や粗 色調暗褐色	%欠 二次熟
台付壺 5	底径 10.5	脚部のみ造存 強く「ハ」の字状 に開き、比較的低い。	外面は荒い刷け目、内面ナデ整形 焼成良好 胎土やや粗 色調明褐色	

ロックを混入する褐色土、第2層は、しまりの強い黒褐色土、第3層は、ロームを密に含む暗褐色土である。尚、第1・2層間は、極めて漸移的に移行する。

遺物の出土状態 出土総数は170点である。その大半は、土器であり自然石が数点含まれる過ぎない。出土状態は、壁際が高く、住居跡中央が低い位置で出土するが、床面直上からの出土は少ない。また、図示した1~4の内、3を除く完形ないしは半完形土器は、かなり浮いた状態で出土している。この様な出土状態は、廃屋化した住居がすぐ埋め戻されず排棄の場として活用されたものとして理解するのが妥当であろう。

最後に、床面上を薄く覆う黑色土については、遂に、中山谷遺跡(1975 古泉弘)、富士山遺跡(1978 藤井裕紀江)で住居跡使用中の堆積物として理解されている。 (村田 健二)



第46図 第1号溝状遺構

4 その他の遺構と遺物

第1号溝状遺構（第46図）

第1号住居跡の北側で検出され、東端部は第1号跡の北壁東半および床面の一部を削り取って存在する。検出グリットは、8～10—Eである。

規模は東西8.70m、南北1.80m、深度平均60cmを測る。断面の形状、特に立ち上がりは船底状を呈するが、溝底は起伏に富み、平坦な部分は少ない。中軸線の示す方位は、N—54°—Eである。

遺物の出土状態 出土総数75点の内、5点の練泥片岩を除けば全て土器である。器種は台付甕に限られるが、いづれも細片であるため同化対象のものはない。出土状態は、床上20～30cmで検出されるものが多く、1・2層に集中して分布することが解る。

本跡からは、付層施設あるいは明確な土器の出土もないことから、この性格について言及することはできない。ただ言えることは、覆土上位で出土した台付甕が第1号住のものと近似もしくは同一個体が包含されている事実と、第1号住より後出であるという事実のみである。

（村田 健二）

IV 鶴田遺跡の遺構と遺物

1 繩文時代の遺構と遺物

(1) 第1号集石土壙（第47図）

本跡は42-Dグリッドに位置する。本跡は縄文時代後期包含層の調査中に、砾の集中が認められ精査の結果ほぼ円形プランを呈する集石土壙であることが明らかとなった。

本跡平面形は、円形を呈し径2.4mを計る。断面形は緩やかに立ちあがる皿状を呈する。覆土は第Ⅰ層褐色土（ローム粒子多量混入）第Ⅱ層褐色土（若干のカーボン粒子混入）の2層からなる。また、壁面は火燒を受けた褐跡は認められない。

本跡出土の礫は径2cm～30cm位のものが約196点検出されている。大半が火熱を受け赤色を呈している。礫の出土状態に顯著な規則性は認められないが、確認面より第Ⅰ層中位に集中する傾向が看取される。また、時期を決定づける遺物は皆無に近く、僅かに包含層出土の遺物と同時期に比定されると考えられる無文の土器が2片覆土上層より出土している。

以上本跡の産業時期は、以上の事実から第Ⅱ層堆積後と考えられるが、具体的な時期決定を促す資料はなく、大略縄文後期の範囲で理解しておく。

(2) 土壙（第47図）

遺物集中分布区（包含層）の南側に散在する形で検出された。特に時期を決定し得る明確な土器の出土は認められないが、包含層出土遺物（堀ノ内Ⅰ・Ⅱが中心）と同様の時期の遺物が出土することから、ほぼ同時期に存在したものと考えられる。

第1号土壙

平面形は不整形、規模は、東西1.54m、南北1.30m、深さ1.3mを測る。断面形を見る限りピット様の落ち込みの様に思える。土壙底部より堀ノ内期の土器小片が小量出土した。

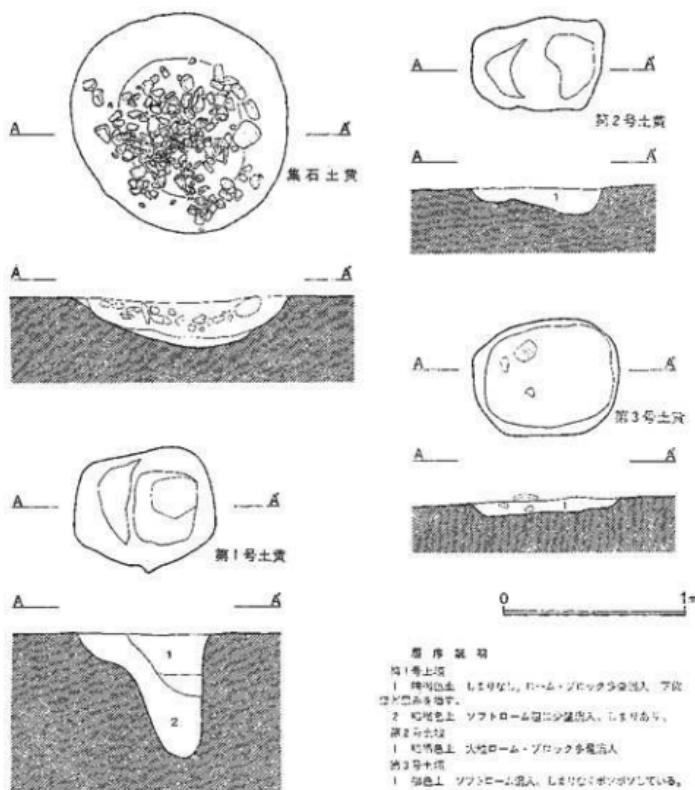
第2号土壙

平面形は不整形を呈する。規模は、東西1.42m、南北1.02m、深さ28cmを測る。断面形は、やや浅い皿状を呈する。平面形態は半月形のテラス部をもち、東に掘り込む形態である。

第3号土壙

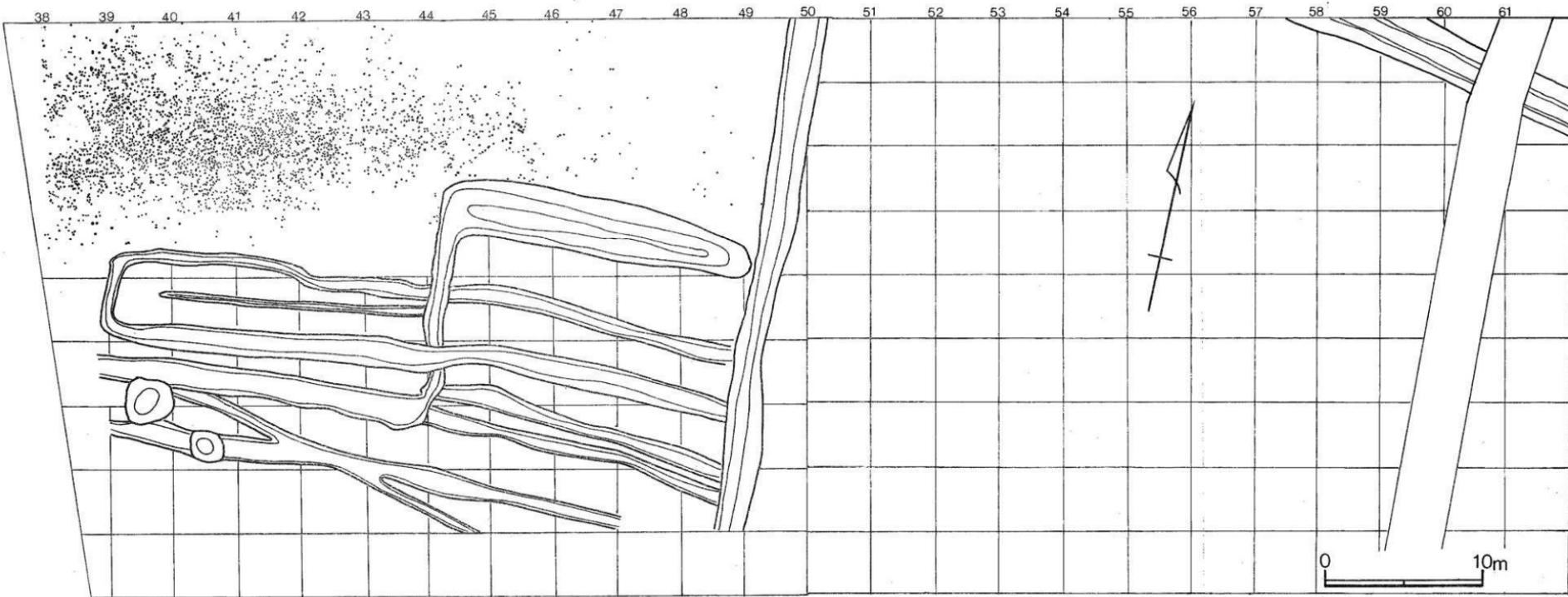
平面形は、略隅丸方形である。規模は、東西1.66m、南北1.24m、深さ20cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。確認段階から、土器片が多數出土した。覆土は、草木の搅乱により一様に不鮮明な区分となっている。

（石川俊英）

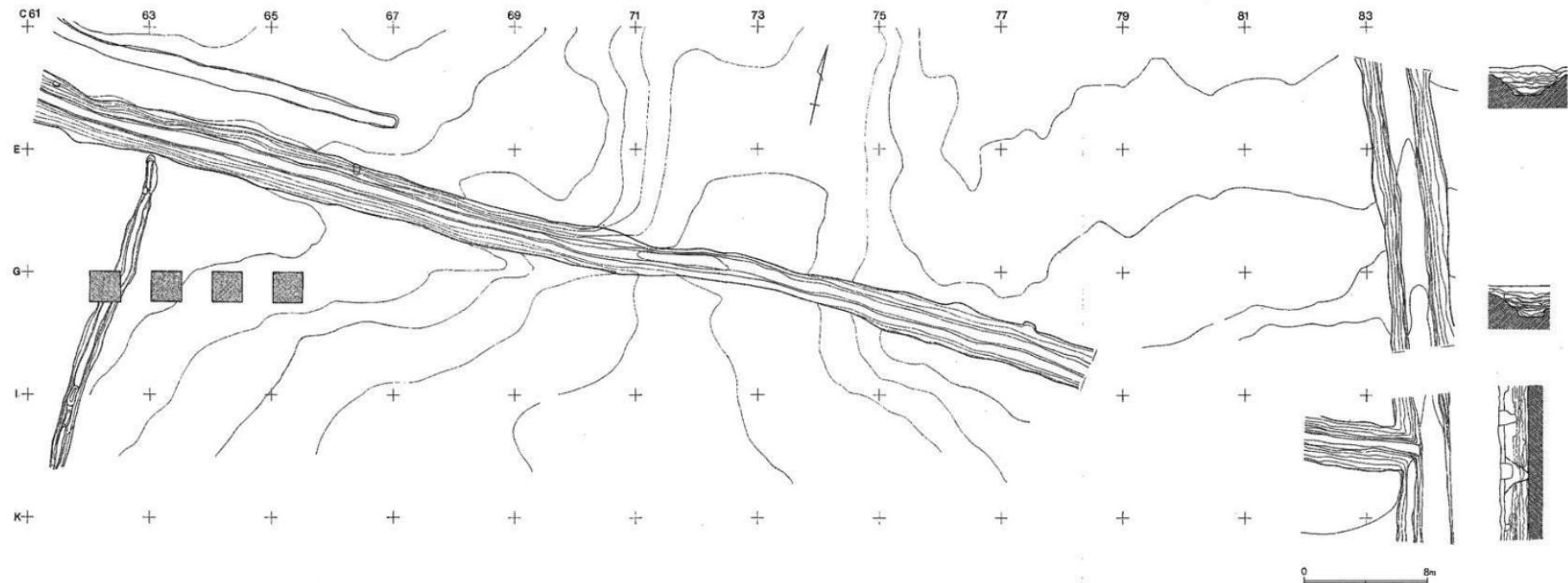


第47図 集石土質・土壤実測図

層序 説 明
第1号上段
1 砂利色土 しまりなし。ルーム・ソニック多発現入。下位
ほど盛みを出す。
2 黒褐色土 ソフトローム層に少量混入。しまりあり。
第2号中段
1 黑褐色土 火性ローム・ソニック多発現入。
第3号下段
1 黑褐色土 ソフトローム混入。しまりなくボンボンしている。



第48図 鶴田遺跡全体図(1)



第48図 鶴田遺跡全体図(2)

(3) 包含層（第48図）

今回の調査によって検出した遺物包含層は、東武東上線をはさんで、篠田、鶴田両遺跡にまたがっている。特に鶴田遺跡において多量の土器が出土したため、遺物包含層として確認された。まず微細に両遺跡の地理的規模を考えると、小さな谷が奥深く侵入していることから、この谷に遺物包含層が形成されたものと考えたい。包含層の分布については、東西約40m×南北約10m程度で、鶴田跡の発掘対象面積から見ればごくわずかである。調査区の関係上、包含層の全容を知ることは不可能であるが、谷が北西方向に延びるため包含層も谷に沿って広がることが推定される。包含層は暗褐色土の單一層で、比較的厚く堆積している地点でも、深さが約30cmほどで、層位的な区別は不可能であった。土層の堆積状況もほぼ均一である。

遺物は大部分縄文土器で、及び利用不能となった凹石、打製石斧などである。土器については、本遺跡より出土した土器の大部分を占めている。出土土器について、早期芽山式、前期黒浜式、中期河玉台式、曾利式、加曾利E Ⅰ～Ⅳ式、後期称名寺式、堀之内Ⅰ、Ⅱ式であった。特に称名寺式から堀之内Ⅰ～Ⅳ式にかけて時間的な断絶はない。また出土した土器の状況を見れば、ほとんどが小破片で、接合が可能な土器はほとんど皆無に近かった。分布について見れば第55・56図に示したように広い範囲に分布は見られるが、あまり集中して出土はしていない。取り上げた土器についてはレベルはほぼ均一であった。

包含層の性格については、土器が集中、もしくはブロック状に出土はしていないが、使用不能となった石器の投棄、小破片の出土状況から土器廃棄場として考えたい。

(4) 包含層出土土器（第50～59図）

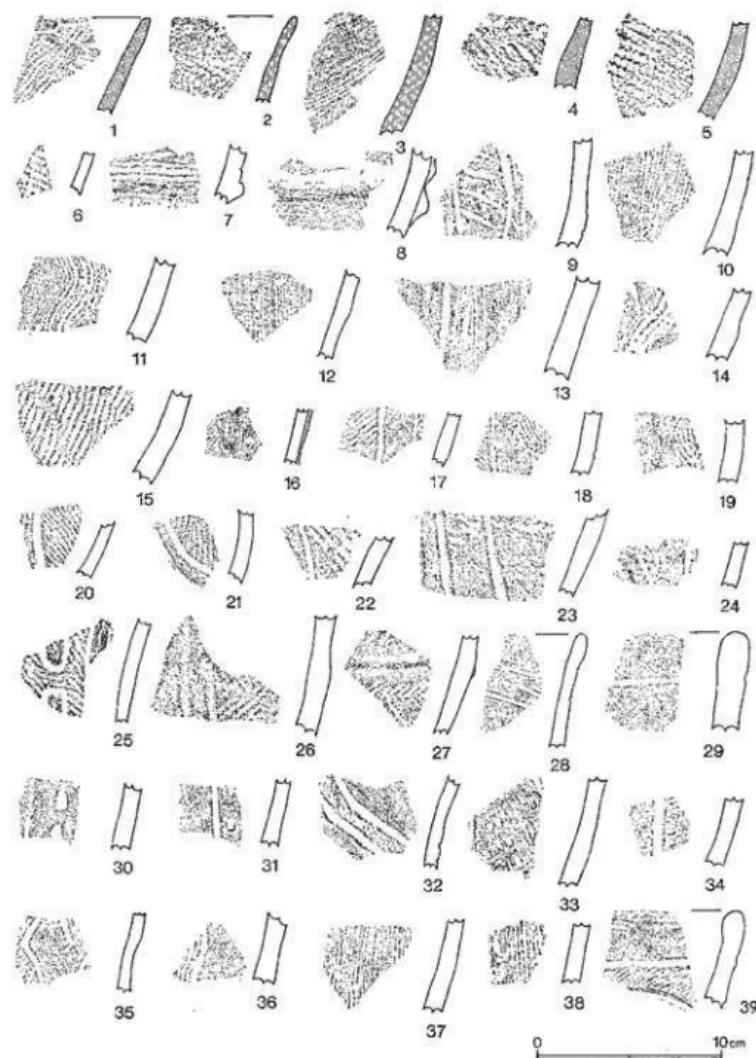
鶴田遺跡出土の縄文時代の遺物は、全て包含層より出土したものである。時期は早期芽山式、前期黒浜式、中期河玉台式、曾利式、加曾利E Ⅰ～Ⅳ式、後期称名寺式、堀之内Ⅰ～Ⅳ式である。主体をなす土器は篠田遺跡同様、堀之内Ⅰ～Ⅳ式である。以下時期毎に分類し説明を行なう。

第1群土器（第50図）

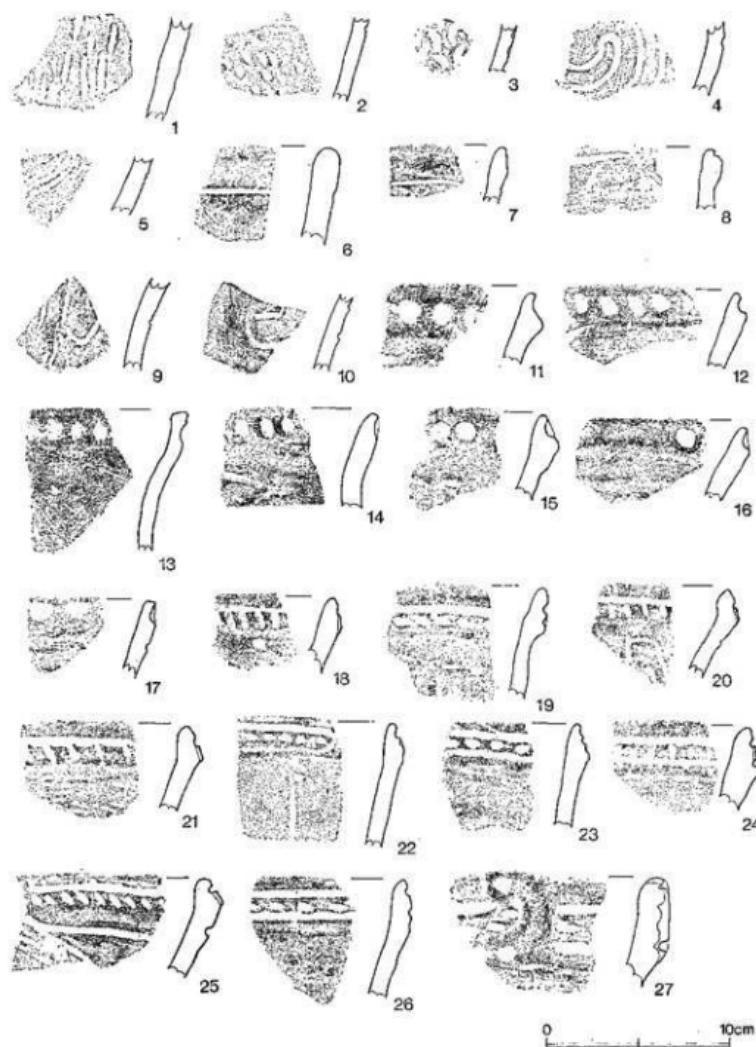
早期から中期末までの土器群を一括した。1、3は条痕を持ち、胎土に織維を含む。2、4～6はR Lの縄文を施している。特に2、5は太い原体を用いており、いずれも胎土に織維を含む。7は墻帶内に2条の角押文が施されている。8は無文帶に2条の墻帶をめぐらしている。9は梢円状に区画された沈線内に斜位にめぐる沈線が短く施されている。10、12、13は肩部にかけて縦位に直線的な条痕めぐり、11、14は竪行する条痕が施されている。15はL Rの縄文が施文される。16はL Rの磨り消し縄文が施され縦位に微隆起がめぐる。17、22、23、24、26は縦位にめぐる沈線間に磨り消し縄文が施文されており、18～21は曲線的に施された沈線内に磨り消し縄文が施文されている。25はR Lの磨り消し縄文を直線、曲線的にめぐらしている。27はL Rの縄文が微隆起下に施文されている。1、3は芽山式、2、4～6は黒浜式、7は河玉台6式、8～9は曾利式、10～14、15、17、22～24、26は加曾利E Ⅰ式、16、18～21、25は加曾利E Ⅱ式、27は加曾利E Ⅳ式にそれぞれ比定されよう。

第2群土器

後期称名寺式土器を一括した。文様構成によって刺突を持つもの、沈線だけを持つもの、柳描を



第50図 包含層出土土器拓影図



第51図 包含層出土土器拓影図(2)

持つもの、繩文を施文されるものとに分類した。

第1類（第50図、28、30～31、第51図、1～3、第51図、25）刺突を持つ土器である。28は横位にめぐる2条線内に刺突施され、30～31は縦位にめぐる沈線内に刺突が施されている。1～2は刺突が縦位にめぐらしている。3は半円月状に刺突したものを「コ」字状に施している。特に3の土器については日本海側に広い分布を持つ三十稻場式に類似するもので注目される。25は縦位、斜位に施された沈線間に刺突を持つ。

第2類（第50図、29、第51図、13～15）沈線によって文様構成をとる土器である。29は口縁部下に横位にめぐる1条の沈線が施されている。13は蛇行する沈線がめぐり、14～15は沈線がヒレ状に施されている。

第3類（第50図、32～38）櫛描状の文様が施されるもの。32は斜位に平行してめぐる2条の沈線間に櫛描が施される。33～35は沈線によって区画された沈線内に櫛描が施される。36は曲線的に櫛描文をめぐらしている。37～38は縦位に櫛描文を施している。

第4類（第50図、39、第51図4）繩文によって文様が施されるもの。39は口縁部下に横位、及び曲線的にめぐる沈線内にL Rの磨り消し繩文が施文される。4はうず巻状にめぐらされた沈線間に磨り消し繩文が施文されている。

第3群土器

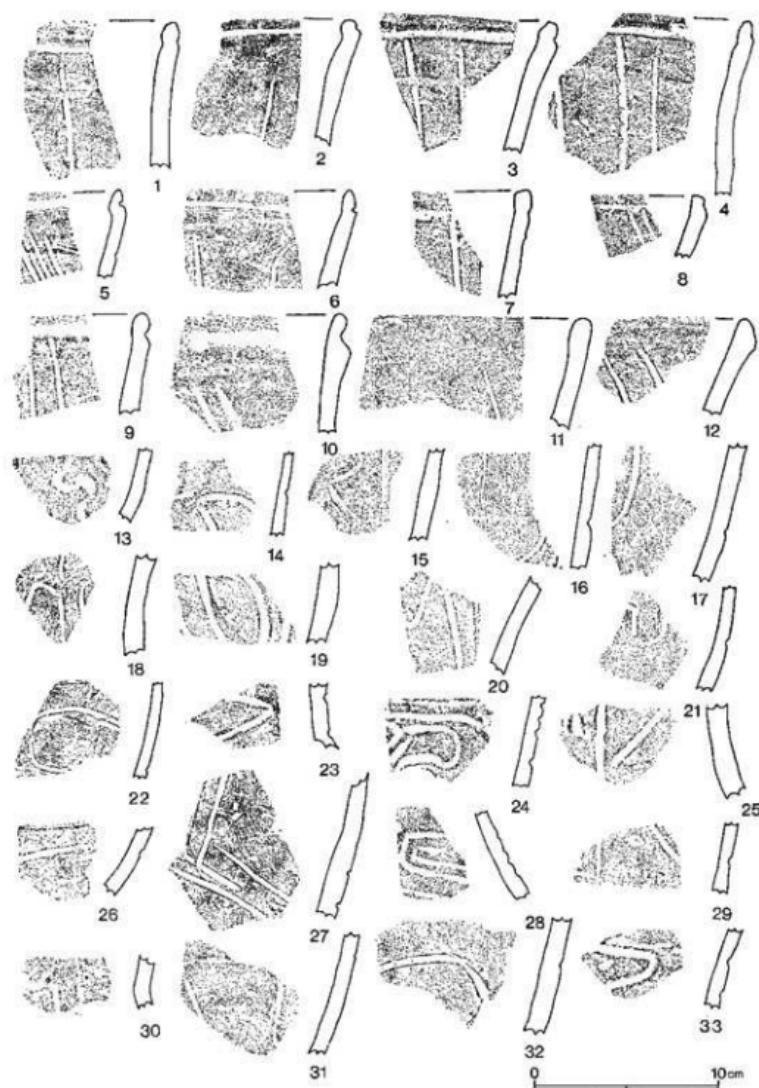
掘之内1式を一括した。分類については葦田遺跡と同様である。

第1類 沈線によって文様が構成されるもの

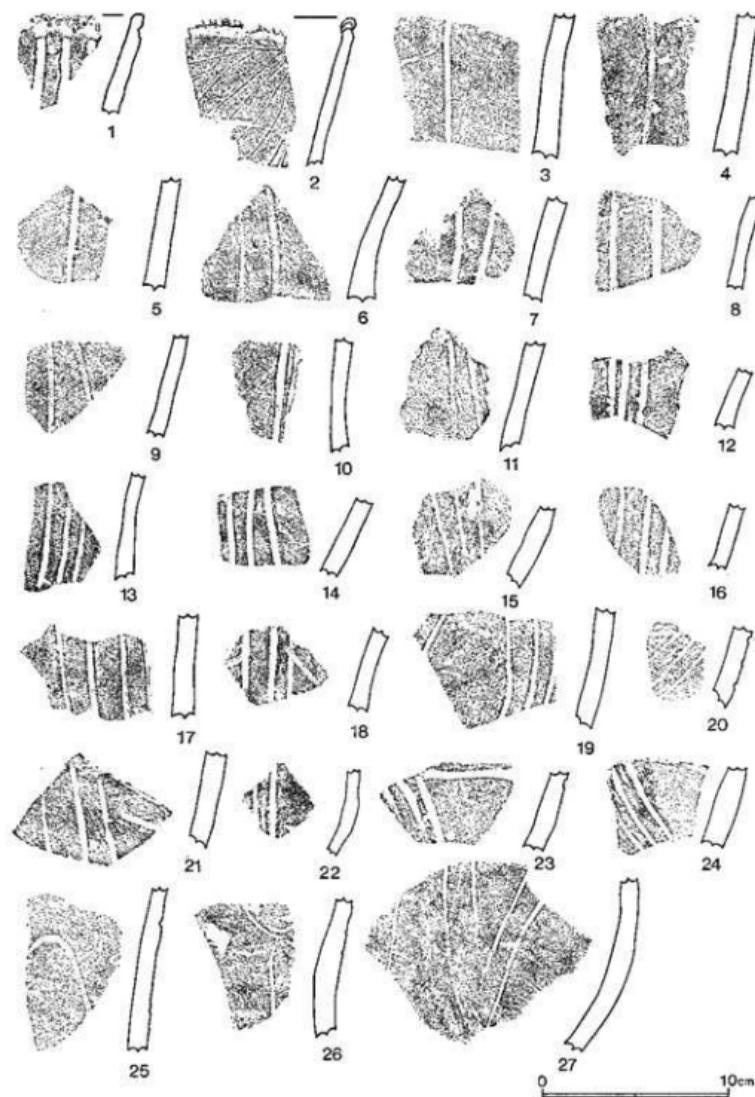
A型 口縁上部に円形の列点文がめぐるもの（第51図、5～10）5～6、10は口縁上部に円形の列点文がめぐる。胸部は無文となっている。8は口縁部が一單くびれて、やや内湾するものある。口縁上部には円形の列点文がめぐる。7、9は口縁上部に円形の列点文がめぐるものであるが、7は胸部に斜位の沈線、9には「匚」字状の沈線が施されている。

B型 口縁上部に沈線がめぐり、刻目が施されるもの（第51図、11～19）13～14は口縁上部に1条の沈線がめぐり、斜位の刻目が施される。11は口縁上部に1条の沈線がめぐり、縦位の刻目がめぐる。胸部には「匚」字状の沈線が施される。12は口縁上部に1条の沈線がめぐり、横位に円形竹管文が施される。15は沈線下に縦位の刻目が施され、胸部に斜位の沈線が施されている。16～19は口縁上部に2条の沈線がめぐり、沈線間には刻目、又は円形竹管文が施される。16は胸部に斜位の沈線が3条施され、17は胸部に縦位に1条の沈線、19には斜位に1条の沈線が施される。18は口唇部に刻目が施されている。20は口縁上部に円形の列点文が施され、2条の沈線間には円形竹管文が施され、逆「C」字状の貼付文が付けられている。貼付文には、円形の列点文が施されている。

C型 口縁部に沈線がめぐるもの（第51図、22～28、第52図、1～10）22～23は円形の列点文を施文後、
縫が1条施されている。24～28は口縁部に1条の沈線がめぐり、24は胸部に縦位、横位に沈線が施され、28は横位に1条の沈線が施されている。1～10は口縁部に1条の沈線がめぐるものである。1～2は胸部に縦位に1条の沈線が施される。3、7、9は胸部に縦位に2条の沈線、4は胸部に縦位に3条の沈線、5は縦位3条、斜位に1条、8、10は斜位に2条、6は縦位に1条「匚」字状の沈線がそれぞれ施されている。



第52图 包含层出土土器拓影图(8)



第53圖 包含層出土土器拓影圖(4)

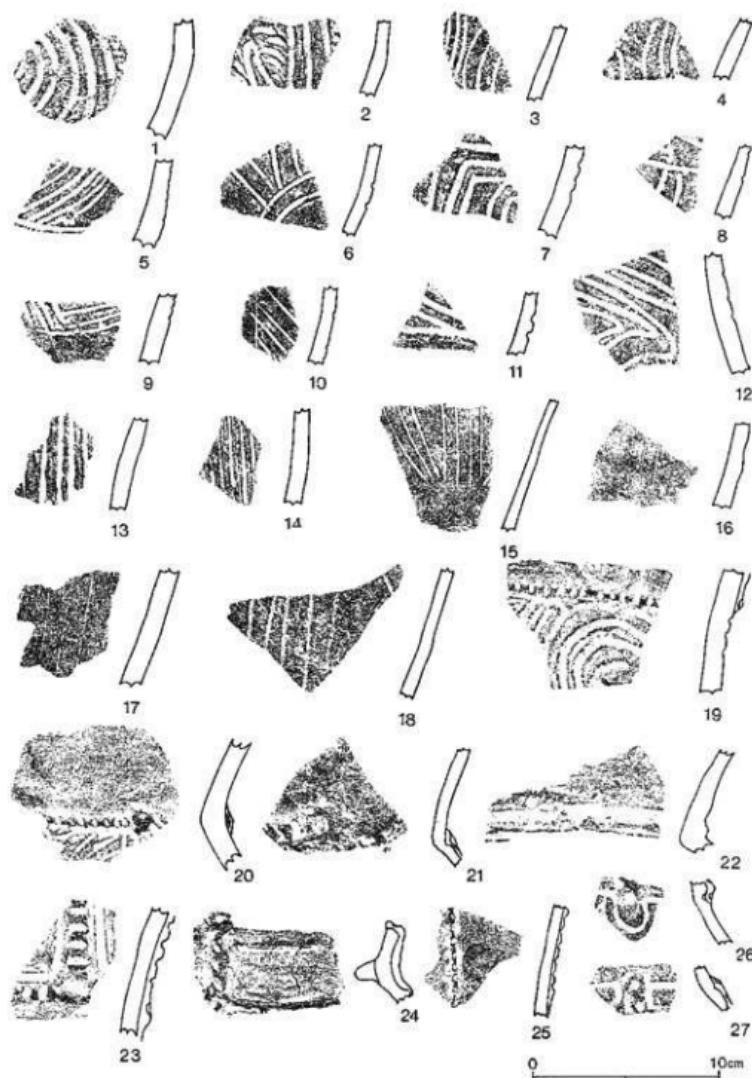
D型 脊部に直線的、もしくは曲線的な沈線が施されるもの（第52図、17~24、26~26~33）17
19、22、32、33は脣部に曲線的な沈線が施される。特に19は同心円状に沈線がめぐるものである。
18は「フ」字状、21は「U」字状の沈線が施されている。23、24、28~30は直線的、曲線的な沈線
か施される。26は横位に沈線がめぐり、27は沈線が切り合うように施されている。31は横位に1条
斜位に2条の沈線が施される。

F型 脊部に沈線が縦位、斜位に施されるもの（第53図、3~24、27）3~17は脣部に縦位の沈
線が施されるものである。3~5は脣部に1条、6~10は2条、11~16は3条、17は4条の沈線が
それぞれ施されている。18、19、21は脣部に縦位に3条、斜位に1条の沈線が施される。20、23、
24は斜位に3条、横位に1条の沈線が施されている。22は縦位に2条、斜位に1条の沈線が施され
る。22は脣部が弧状を呈すもので、平行する「V」字状の沈線が施されている。

F型 沈線が多条となるもの。（第54図、1~18、22）1は太い沈線によって同心円状の文様が施さ
れる。2は3条の沈線がめぐり、曲線的な沈線、及び短い斜位の沈線が施される。3~4は3条の
の弧状沈線が施される。5は切り合うように多条の弧状の沈線がめぐるものである。6は平行して
めぐる2条の沈線が縦位、斜位に施されている。7は脣部に「コ」字状の沈線がめぐる。8は縦位
に2条、横位に2条の沈線が施される。9は縦位、横位に切り合うように数状の沈線がめぐる。10
は細い沈線で縦位に1条、斜位に4条の沈線が施される。11は横位に1条、斜位に2条の沈線がめ
ぐる。12は曲線状の沈線が數状施される。13~17は脣部に縦位、斜位に数状の沈線13、14~17は
条線が施される。18は脣部に5条、斜位に1条の条線が施される。22は脣部に太い沈線を持つ。

G型 陰線もしくは貼付文が付つもの（第54図19~21、23~27）19は脣部に刻目を持つ陰線を伴
ない、脣部にはうず巻状の太い沈線が施される。口縁部には「V」字状の陰線を持つ。20は刻目を
持つ陰線に貼付文が伴う、脣部には斜位に沈線がめぐり。口縁部は無文となる。21は脣部に貼付文
が伴う。23は刻目を持つ陰線に沈線によって区画されている。区画内には櫛描文が施している。称
名寺に含まれる事も考えられる。24は刻目を伴なう陰線を持ち、口縁部内側に陰帯を施している。
26~27は脣部に貼付文を施こし、沈線によって区画されている。

第2類 創之内1式で纏文を施文後、沈線が施されるもの。（第55図、1~32）1は口縁部に1
条の沈線がめぐり、脣部に纏文を地文として数状の沈線が施される。2は口縁部に1条の沈線がめ
ぐり、LRの纏文を施文後、縦位に2条の沈線が施される。沈線間の纏文は消されている。3は口
縁部に1条の沈線がめぐる、脣部に斜位に4条の沈線がめぐる。沈線間の纏文は消されている。4
は口縁部が一早くびれるものである。口縁部に1条の沈線がめぐり脣部に藤手状の沈線が施される
5は口縁部に1条の沈線がめぐり、数状ずつ、横位、縦位、曲線的な弧状の沈線によって区画され
る。28は口唇部が欠損しているが、1条の沈線がめぐり、縦位、斜位、曲線的な弧状の沈線が施さ
れている。6~12は脣部に縦位の沈線がめぐるものである。7~9は沈線間がすり消されている。
13はLRの纏文を施こし、縦位に沈線をめぐらしその後に縦位に刺突が施されている。14~15は横
位、斜位に多条の沈線がめぐり、沈線内にLRの纏文が施される。16は平行する曲線的な沈線がめ
ぐるもので、横位にめぐる沈線間に纏文がすり消されている。17はLRの纏文を施文後、脣部に
縦位に太い沈線が1条施される。18はLRの纏文を施文後、横位、斜位にめぐる沈線によって区画



第54図 包含層出土土器拓影図(6)

されている。19、20、24は縦文施文後、縦位に環状を呈する沈線がめぐっている。21は斜位にめぐる沈線間にすり消された縦文が施される。22は縦文を施文後、横位に1条、斜位に2条の沈線がめぐるものである。23、25弧状にめぐる沈線に縦文が施されている。26はLRの縦文を施文後、弧状横位に環状を呈する沈線、横位にめぐる様々な沈線が施されている。27はLRの縦文を施文後、縦位に環状を呈する沈線、同心円状の沈線がめぐる。29はうず巻き状を呈す沈線、斜位の沈線によって区画され、区画内には短い斜位の沈線が施される。30は沈線によって区画された刻日を持つ隆帯を伴ない斜位に沈線が施されている。29は横位斜位にめぐる沈線によって区画された縦文を持つは刻日を伴なう隆帯が沈線によって区画され、幾何学的文様の沈線間に縦文が施されている。

第4群土器

掘之内I式を一括した。I式と同様、沈線を地文とするもの。縦文を地文とするものに分類したが、沈線についてはI式との分類が困難であった。

第1類沈線によって文様が構成されるもの（第52図、11～12、16）、第53図、1、2、25、26）11、12は口縁部が無文で、胴部に斜位に2条の沈線が施されている。19は胴部に縦位、横位に沈線が施される。1は口縁部下に円さの列文を持ち、列点文下に縦位に太い沈線がめぐらぐれる。2は口唇部に刻日を持ち、口縁部には沈線が1条めぐり、胴部条縁で幾何学状の文様が施されている。25、26は沈線で曲線的な文様がめぐらしている。

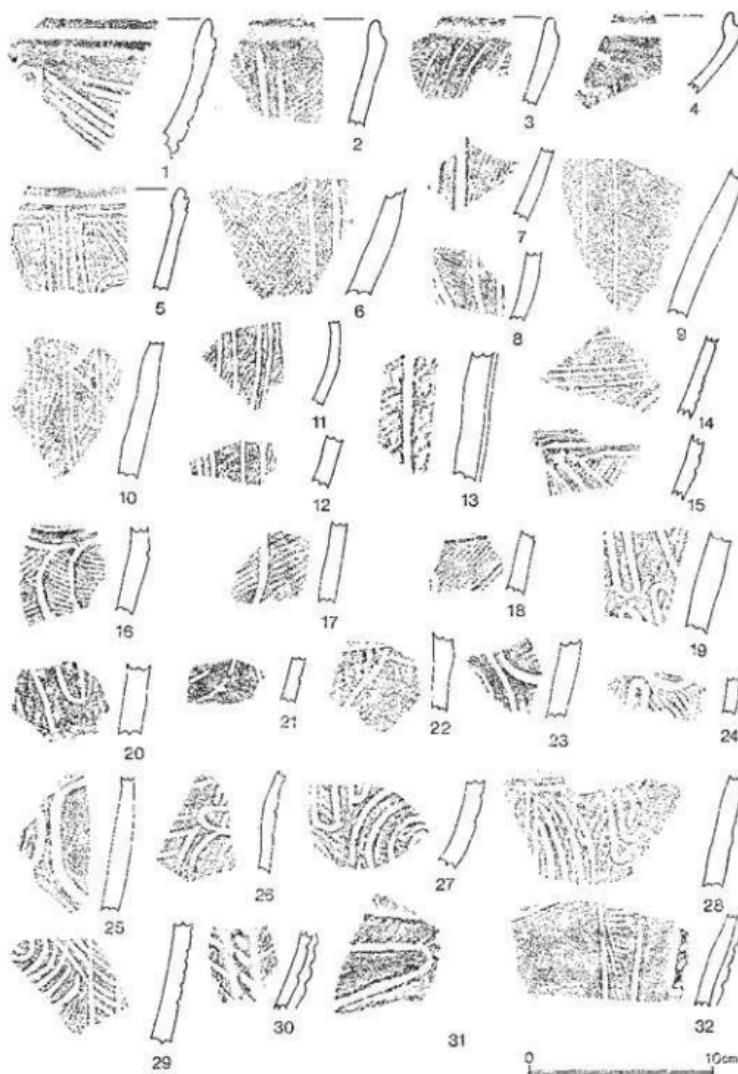
第2類 掘之内II式縦文を地文としているものを一括した。

A型 刻目のある隆線、「8」字状の貼付文を伴ないもの（第56図、1～10、27～31、第57図、1～17）1、3、5は口縁部に沈線が1条めぐり、斜位にめぐる沈線によって三角形状を呈する。沈線間にLRの縦文が施される磨り消し縦文である。4は口縁部が山形を呈し、口縁部は曲線によって区画された磨り消し縦文である。6～10は口縁部に平行、あるいは斜位となってめぐる沈線間にLRの磨り消し縦文が施されている。27～31、1～12いずれも三角形、もしくは菱形状に沈線が施され、沈線間に磨り消し縦文が施されている。13～16は曲線的な沈線によって磨り消し縦文が施されている。

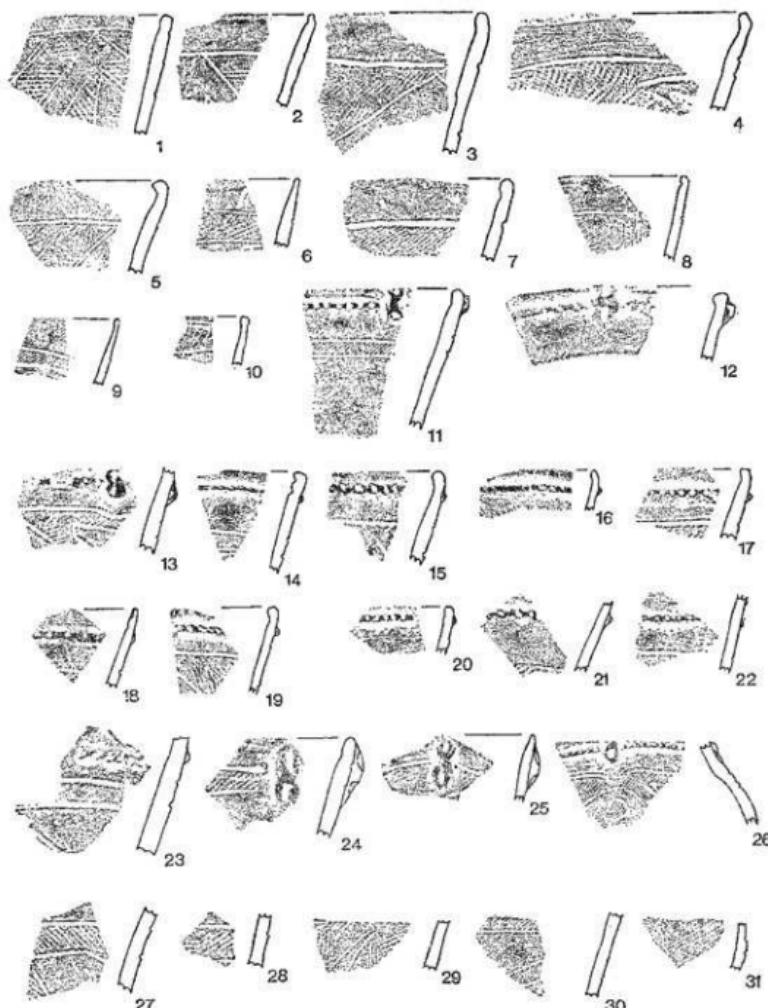
B型 刻目ある隆線、もしくは「8」字状の貼付文を伴なうもの。（第56図、11～26）11は刻目のある隆線上に「8」字状の貼付文を伴なうもので口縁下には、横位に平行してめぐる2条の沈線間に磨り消し縦文が施されている。12は口縁部が山形を呈し、刻目を伴う隆線上に「8」字状の貼付文を伴う。13、26は刻目を伴う隆線上に「8」字状の貼付文が伴ない、曲線によって区画された沈線にLRの磨り消し縦文を持つ。24は平行して施された2条の沈線内にLRの磨り消し縦文が施され、その上に「8」字状の貼付文が施されている。25は口縁が波状を呈する。曲線的にめぐる磨り消し縦文の上に「8」字状の貼付文が施される。14～18、19～20は口縁部に刻目の伴なう隆線が施され、その下に磨り消し縦文が施される。三角形を呈するもの、19、20、他は不明である。

第三類 無文土器である。（第58図、1～26）

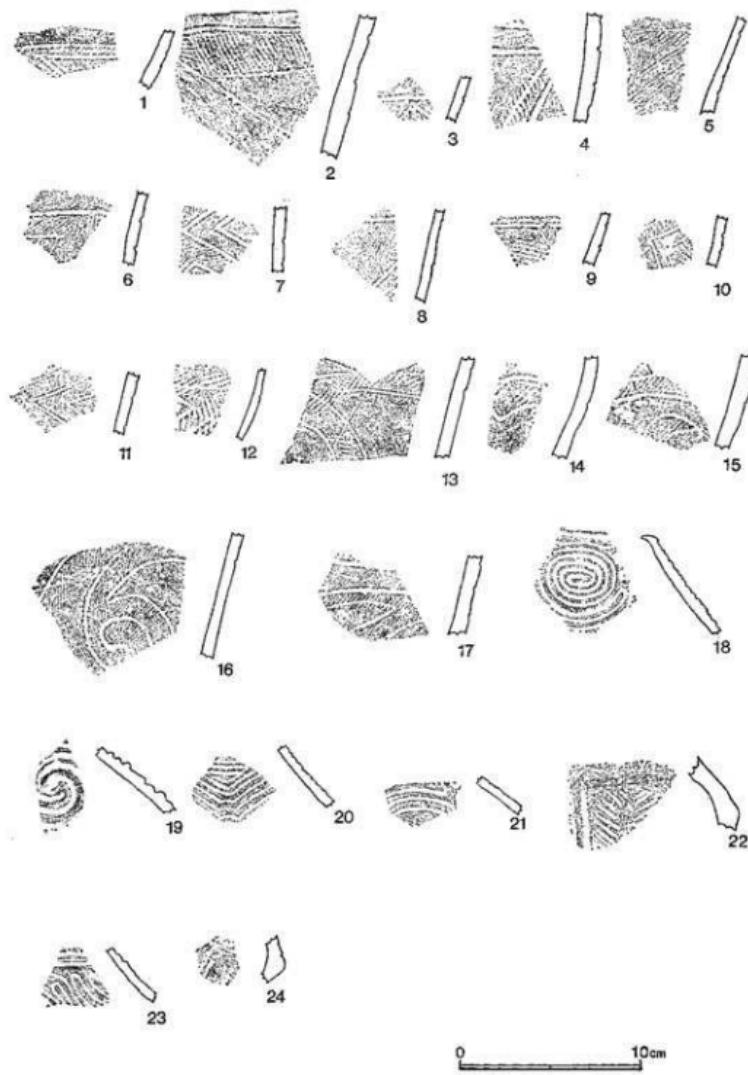
A型 摩されているもの（第58図、1～8、11、14、15、16）1はゆるやかに外反する器形を呈する。胎土に白色の砂粒を含んでいる。2は口縁部がやや脹らみを持つ、器壁は厚く、器面は表面とも良く研磨されている。3は口縁部から胴部にかけてすぼまる。横位の調整痕が見られるが、



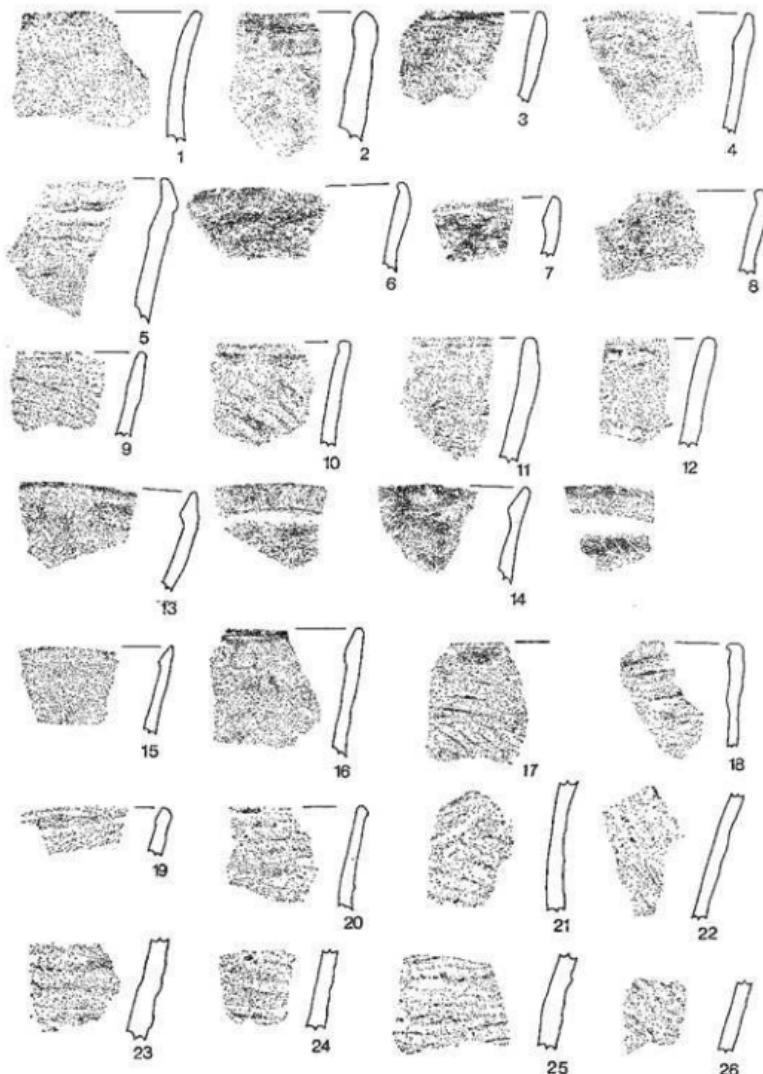
第55図 包含層出土土器拓影図(6)



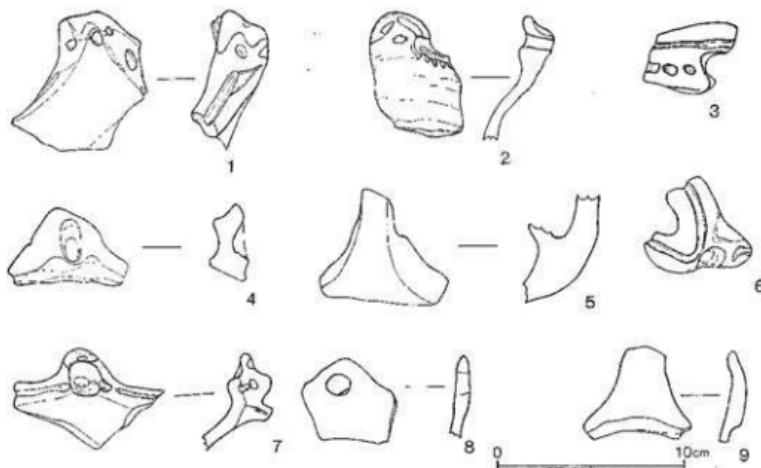
第56图 包含屑出土土器拓影图(7)



第57圖 包含層出土土器拓影圖(6)



第58圖 包含層出土土器拓影(9)



第59図 包含層出土土器実測図

器面は表面とも荒くザラザラしている。4、7、13～16は口縁部内側に縹を持った。5、6、8は口縁部がやや内湾する。いずれも器面は良く研磨されている。

B型 研磨されないもの（第58図、9～10、17～26）9～10、17～26いずれも斜位、もしくは横位に調整痕が認められる。10は口縁部内側に沈線が施され、17～18口縁部が内湾する。器面はザラザラしているが、内側はいくぶんぬめらかである。

第5群土器

注：口縁部である。（第57図、18～24）18はうず巻き状の沈線が施され、縫線には刺突が施されている。19はうず巻き状の沈線が施されている。20は横位、斜位にめぐる多条の沈線によって文様が構成されている。21、23は20と同じように曲線的に施された沈線によって、沈線間に刺突が施されている。22は竹管文により斜位に左右対象に刺突が施されている。24は斜位にめぐる2条の細い沈線が施されている。

第59図は把手部の破片である。1、5は握之内に式に比定される波状口縁を持つ深鉢の把手部である。1は口縁部に盲孔をつなぐ沈線が施されている。把手部の外面は無文である。5は橋状の把手部であり口縁部はするどく内曲し、内曲部分は無文である。2～4、7～8は平縁であるが小波状になったものである。2～3は把手部に盲孔が施されている。6は橋状をなす把手部であり、橋状には沈線が施される。9は内湾する把手部で、内湾部分は無文である。

（石川 俊英）

(5) 包含層出土石器 (第60図・61図)

1・2・3は短冊形打製石斧である。1は側縁部に比較的丁寧な細部加工がなされている。側縁部、刃部ともに磨耗が著しい。2は一面の左側縁を大きく剥離し、右側縁を細かい剥離を軽に施す自然面を多く残す。全体的に雑なつくりである。3は板状の原材を大きく剥離し、側縁部・刃部を細部加工することによって作り出している。側縁部に僅かに抉りが認められる。

4～7は分銅形打製石斧である。4は表裏ともに自然面を大きく残す。側縁部を大きく剥離し、右側縁のみ細かな剥離を施し、抉入部を作り出している。刃部は磨耗痕が頗るに認められる。5は左右から大きく剥離した後、細部加工を施している。6は一面に自然面を大きく残す。右側縁は左側縁に比べ、抉りが大きい。7は片面加工で刃部は雑なつくりである。

8・9は棱形打製石斧である。8は表裏とも左右から大きく剥離され、雑なつくりである。9は側縁部下半から刃部に向って大きく開く。側縁部、刃部には磨耗痕が認められる。

10は敲石である。河原石の両側縁を剥離し、作り出している。先端部は敲打痕が頗るに認められる。また、両側縁及び先端は、磨耗痕が著しく磨石としての使用も考えられる。

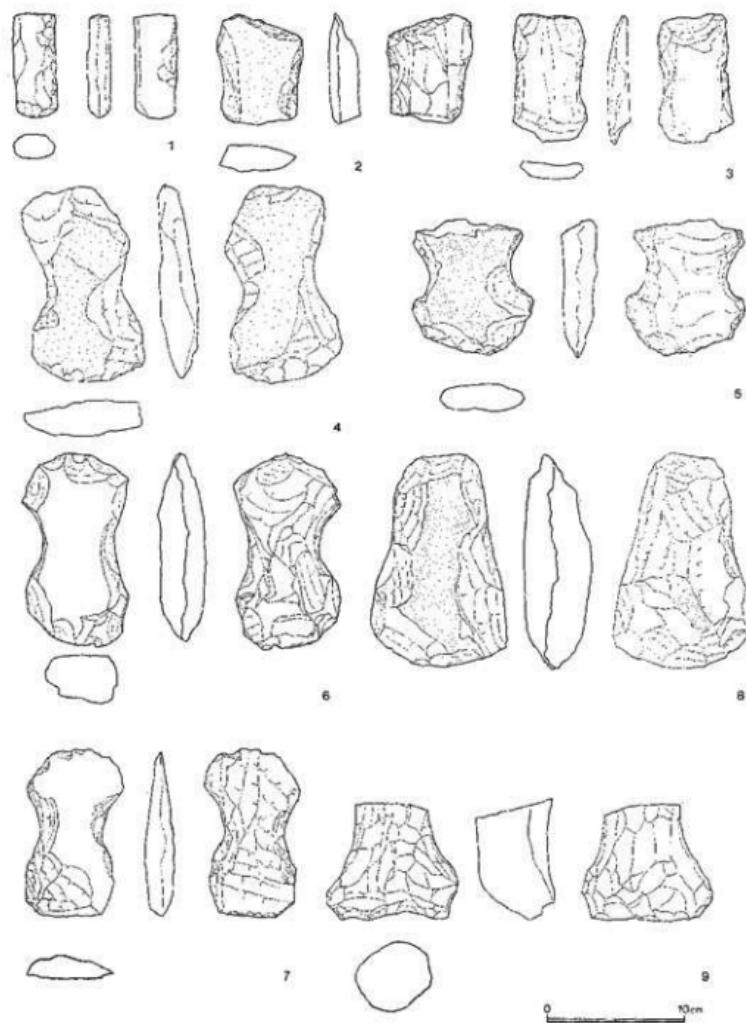
11～16は磨石である。11は縁辺部の磨耗痕が頗るに認められる。片面には打痕も認められる。12は縁辺部が使用されている。13は縁辺部全般に渡って磨耗痕が認められる。また、表裏面ともに打痕が残る。磨石と敲石の機能を併用したものと思われる。14は全側によく磨かれている。15は残存部の磨耗が著しい。16は全面が磨かれており、特に縁辺部は著しい。片面に數ヶ所の打痕が認められる。

17は研磨面の使用が著しい石皿の小破片である。

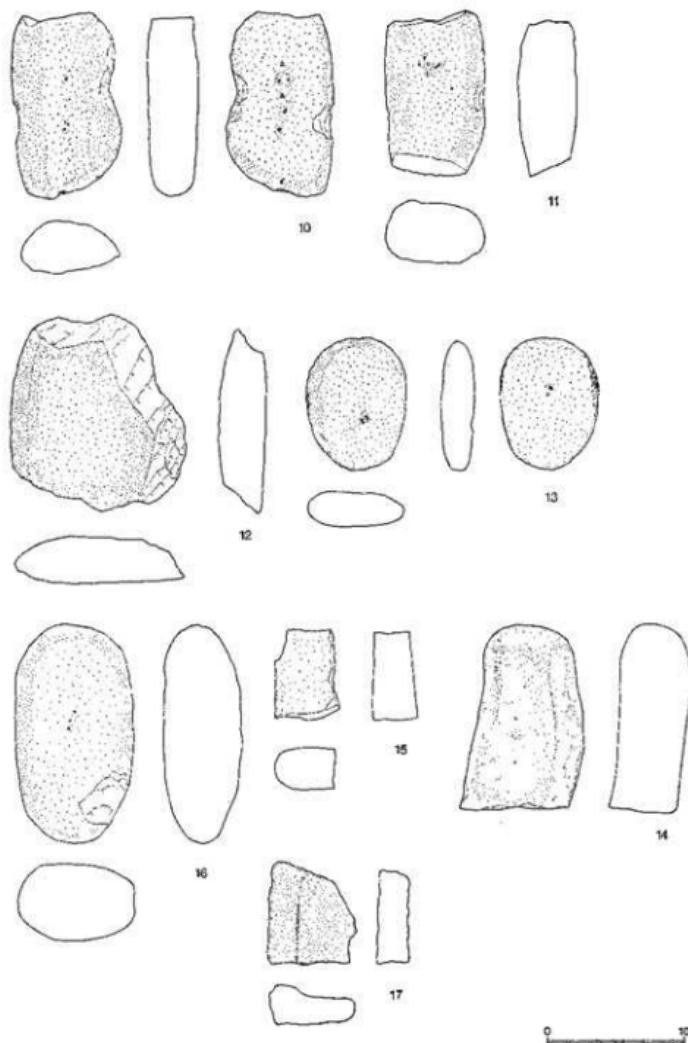
(丸山 謙司)

石器一覧表

No.	種 別	出 土 地 点	大きさ(cm)	厚さ(cm)	石 質	備 考
1	短 冊 形	第2号溝状遺構	(7.6)	1.9	砂質頁岩	基部欠損
2	"	"	(7.7)	1.9	粗綈紋砂岩	"
3	"	"	(9.4)	1.6	絆泥變岩	基部・刃部欠損
4	分 銅 形	44Dグリッド	14.1	2.5	粗粒砂岩	基部欠損
5	"	"	(10.2)	2.8	ホルフェルス	"
6	"	第2号溝状遺構	13.9	3.5	"	完形品
7	"	第10号住居址	12.1	2.2	砂質頁岩	刃部一部欠損
8	長 形	第2号溝状遺構	15.4	5.0	中粒砂岩	完形品
9	"	"	(13.5)	4.6	"	側縁部上半欠損
10	敲 石	"	13.2	3.9	疊泥變岩	端部欠損
11	磨 石	"	11.9	4.5	変質安山岩	先端部欠損
12	"	42Dグリッド	14.4	3.5	疊泥變岩	一部欠損
13	"	41Cグリッド	9.7	2.6	"	完形品
14	"	第3号土塗	13.6	4.0	閃綠岩	一部欠損
15	"	第2号溝状遺構	6.5	3.1	"	小破片
16	"	"	15.3	5.6	石英斑岩	完形品
17	石 盤	"	7.4	2.9	スコリア	小破片



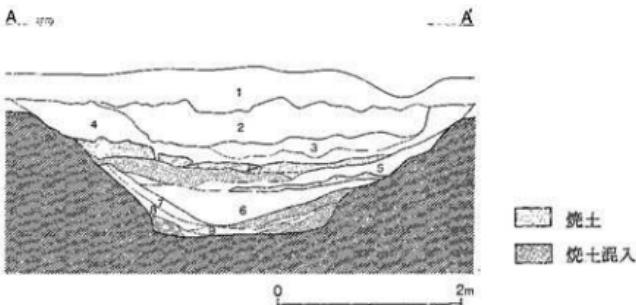
第60圖 包含層出土石器實測圖(1)



第61図 包含層出土石器実測図(2)

2 古墳時代の遺構と遺物

第2号溝跡（第49・62図）



第62図 第2号溝跡実測図

本跡は、調査区の東端、82～84—D～Lグリッドの範囲で確認された。

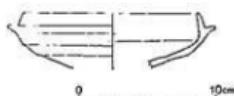
規模は、確認面での幅4.8m、溝底幅1.4m、深さ平均1.6mを測る。断面形は、立ち上がりの中位に後を有することから略箱蓋形を呈する。

溝の設けられた範囲は、調査区内（幅32m）の限られた空間であるため、どの様に設定されたかは想像の域を出ないが、第2図の地形図に示される通り、背後（北側）の高位台地を意識して南北に区画されたことは理解されるが、第47・48図の通り、調査区内では他に溝の存在を裏付けることはできない。箱形に区画されたものと考えるならば、当然東側に展開するものと考えられるが、国道（407号線）付近まで延長して設けられたトレンチからいは一切確認されていない。さらに東に延びるかなり大規模な構造物である可能性もある。一方、断面図（第62図）によれば、西側からかなり多量の焼上およびロームの流入が認められ、調査段階で随時設けられた觀察ベルトからも同様な所見が得られたことにより、焼上・ロームの流入が溝全体に及ぶことが認識されよう。

遺物の出土状態 各層間が明確に区分され、それぞれの層が、独自の内容で堆積する。遺物は土器を主体に、極めて散漫に少量出土した。しかし、図化可能なものは第63図に示した1点のみである。以上本跡の性格を知る上で、最も重要な要素、時間的位置付けとなる資料の提示が貧弱である。しかし、本跡が第1号跡により切られている事実を考えれば、下限は平安時代以前であり、第2号跡出土資料を重視すれば6世紀後半が上限となる。

出土遺跡（第63図）

僅かに図示した須恵器杯形土器が1点出土した。出土位置は、83—Gグリッドで、西側の立ち上がり部分で検出された。この部分は、焼土層下黒色系の水成層中に包含される。小片であるため、全て図上復元である。口径13cm、器高4.2cmを測る。受け部はほぼ水平に短かい。器壁は全体的に薄い。胎土は良好、色調は暗灰褐色を呈する。



第63図 第2号溝跡出土遺物実測図

3 歴史時代の遺構と遺物

(1) 溝 跡 (第64・65図)

第1号溝跡

本跡は、ほぼ東西に長く延び、調査域を貫通することから、広い範囲で確認された。

規模は、確認範囲での総延長が 115 m、平均幅 2.4 m、深さ 1.2 m を測る。断面形は、中位に後をもち、底面は幅 25 cm ほどのフラットな仕上りのため第 2 号溝同様箱築薬研形を呈する。

溝の標高は、最も西の調査区である 57—C

グリッドでは 26.50 m、東端では 83—I グリッドのほとんど変化なく、ほぼ中間に位置する 67—I-F グリッドではやや低い数値が得られた。これは、小支谷が南北に位置することから生じたものであり、溝底部のレベルも同様に低い数値を示していた。重複関係は、第 2 号溝との間にあり、調査区東端 83—I グリッドにおいて認められる。重複部分では、第 2 号溝の方が 40 cm ほど深く、覆土中に本跡の溝底がある。

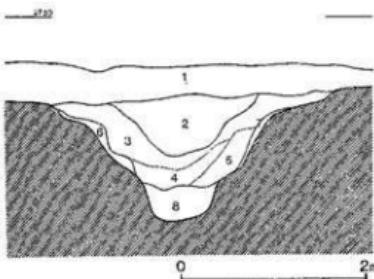
本跡の方位は、ほとんど屈曲せず直線的に位置することから、N—87°—W を示し、ほぼ西北に直交する形で造られたことが解る。

覆土は、第 64 図に示した通り、大別 3 層に区分できる。ロームの混入は、溝底部にブロックに存在する他は比較的少ない。主体となるのは黒色系の埋土である。溝底部付近の堆積状況は、所謂水成層の成形は認められず、前述の通りフラットな溝底に対し、極めて規則性をもった堆積である。

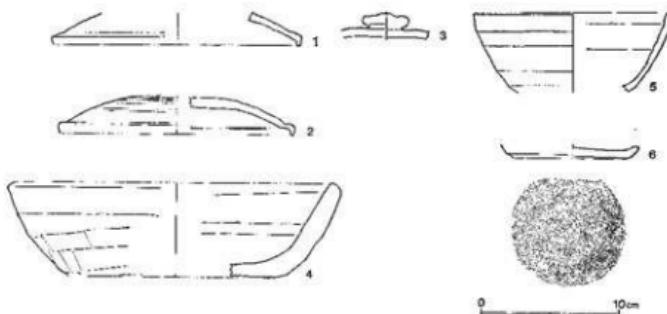
出土遺跡は、須恵器壺形土器を中心におよそ 100 点ほど出土したが、集中する箇所もなく散漫な分布であった。しかし、その大半が洞部片であるため図示可能なものは僅かである。

次に、本溝の性格についてであるが、遺構の立地する低位台地とほぼ同方位の占地であるため、地形に則した規画があることは十分想定できる。しかし、検出した部分が直線的な範囲のみであるため、区画がどの様に展開するかは不明である。一方覆土の堆積状況は、前述の通り用水等の利用が考え難い現実では内区、外を区別する空掘的性格であることは明らかである。以上、第 2 号溝同様、本溝の内容に迫る事実は得られなかった。

(村田 健二)



第64図 第1号溝跡実測図



第65図 第1号溝跡出土土器（第65図）観察表

第1号溝跡出土土器（第65図）観察表

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵培	1	口径(14.4)	口径に比して器高が大きく、体部の立ち上がりはやや内湾きみに口唇へ至る。器壁は口縁部が若干肥厚する。	ミズビキ成形 色調暗青灰色 焼成良好	孔欠
須恵環	2	底径 8.2	底面中央がやや上げ底風。器壁は薄い。	ミズビキ成形、底部回転糸切り、周縁部の回転ヘラ削り。	
須恵蓋	3	口径(17.0)	天井部は平坦、やや腰高な作り。器壁は厚で。	天井部ヘラ削り。焼成良好 色調青白色	孔欠
須恵蓋	4	口径(17.8)	腰高な作り。器壁は薄い。	焼成、胎土良好、色調灰白色	孔欠
須恵蓋	5		宝珠部分のみ残存 やや薄手な作り	焼成 胎土良好 色調灰色	
須恵器 大形環	6	口径(24.3)	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。器壁は特に口縁が肥厚	体部下半は、横位のヘラ削り 焼成 良好 色調青白色	孔欠
	7	底径(15.8) 器高(7.0)			

(2) 井戸跡 (第66図)

本跡は、68—I グリッドで検出された。

規模は、東西1.44m、南北1.46m。深さ1.62mを測る。開口部のプランおよび底部プランは整った円形を呈する。断面の形状は、開口部のおよそ30cm下からロート状に開き、底部へはストレートに円筒状の形態をとる。

遺物は、やや大形の円錐数個が、底部付近で、小形のものが覆土中にアトランダムな状態で検出された。しかし、時期決定の可能な資は資料はほとんどなく、僅かに焰烙と思われる瓦器質の小片が検出されたに過ぎない。

本跡と状に関連のある遺構としては、東側に展開するピット群あるいは土壙が考えられる。これらの遺構は、その位置関係から、それぞれ分離して考えることは不適切であろう。

(村田 健二)

(3) ピット群 (第67図)

本跡は、67~69-H~J グリッドの広い範囲にわたって検出された。

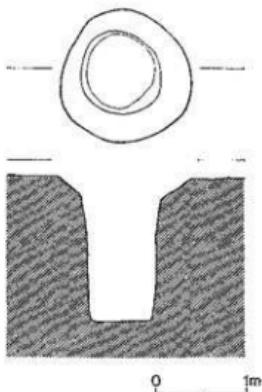
ピット群の占地する部分は、東側に浅い小支谷が南北に延び、更に西へ屈曲して深く入り込み、西側は東上線沿いにやはり南北に小支谷が認められる。また、南側は都幾川による沖積地となる関係上、東西に主軸をもつ独立丘の感がある。

遺構は、ピット、土壙、井戸跡が10m四方の範囲に群在して検出された。ここではピット群を中心説明しておく。ピットは17個が検出された。その規模については下記の表に示した通りである。ピット群の分布を見ると、蓋った上屋が想像できる配置は認められず、アトランダムなものである。やや規則性が認められるものは、P₅、P₁₁、P₁₃、P₁₅、P₁₆がほぼ一直線に並び、P₁、P₄を加えれば一間四方の建築跡と考えることも困難ではない。また、井戸、土壙跡がピット群からやや距離をもって位置することは、それそれが因果関係をもって存在することを明示している。

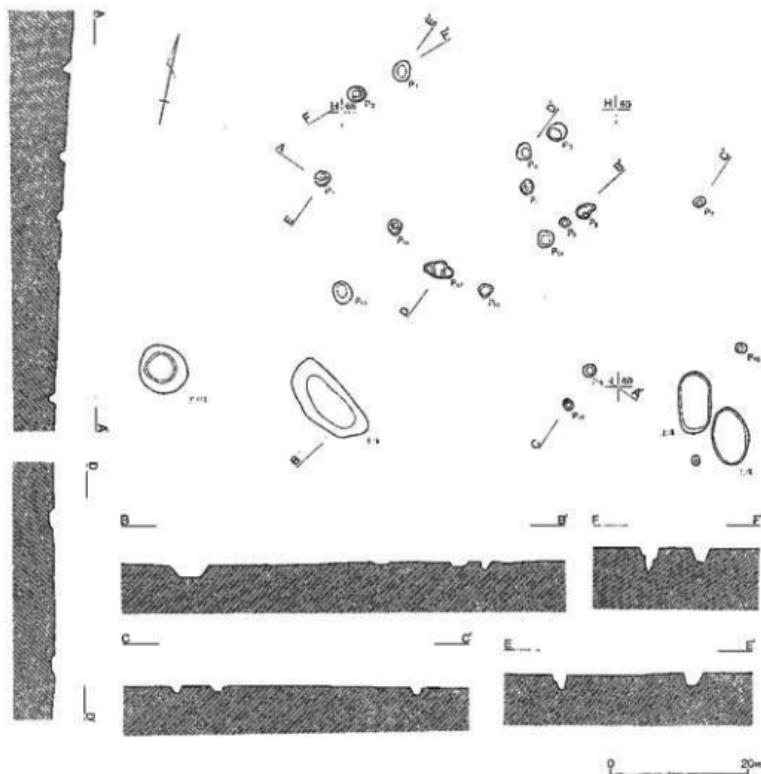
ピット群 (第67図) 法量観察表

単位 cm

番号	平面形	規模(長軸×短軸)	深さ	番号	平面形	規模(長軸×短軸)	深さ	番号	平面形	規模(長軸×短軸)	深さ
1	楕円形	31 × 25	20	7	楕円形	17 × 14	12	13	楕円形	33 × 27	32
2	タ	28 × 22	37	8	不整形	30 × 20	14	14	不整形	21 × 19	12
3	タ	50 × 26	31	9	円 形	16 × 14	8	15	円 形	18 × 14	16
4	不整形	25 × 19	18	10	方 形	25 × 23	24	16	タ	20 × 18	14
5	円 形	24 × 20	22	11	円 形	20 × 23	18	17	タ	18 × 15	16
6	タ	22 × 20	36	12	不整形	45 × 25	12				



第66図 井戸跡実測図



第67図 ピット群実測図

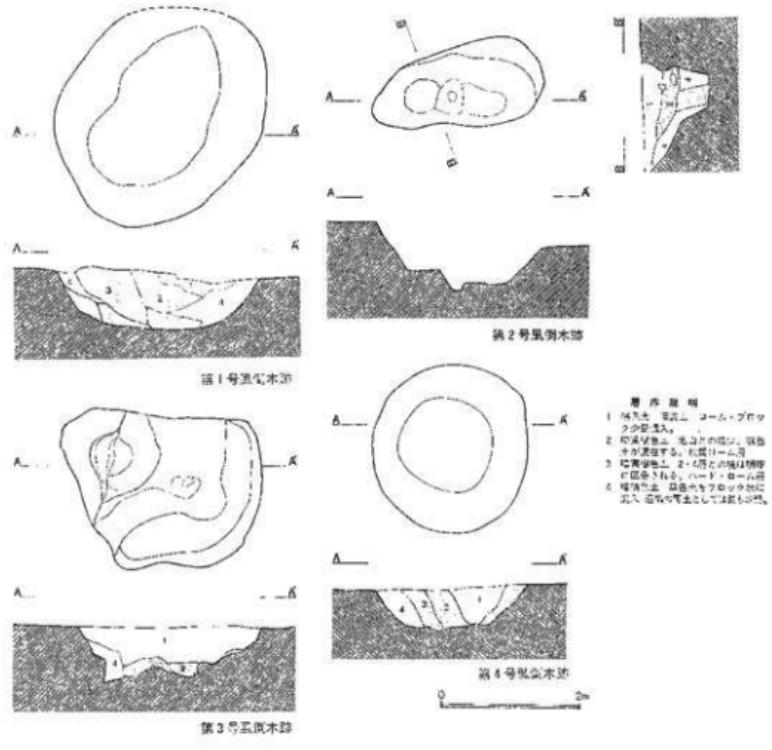
4 その他の遺構と遺物

(1) 風倒木跡（第68図）

調査区内には、不明瞭な浅い落ち込みが多数認められたが、その多くは蛙状の溝により削り取られたものである。ここでは、明確なもの 4 例について図示し説明を加える。

確認段階での所見では、黒色土がロームを半月状にとり囲む形態のもの第 1、3、4 号跡全体的に不鮮明なプランを呈するものの第 2 号跡に分類できる。一方、段面観察によれば、表土・ソフトローム・ハードロームの序列が、ほぼ 90° 回転した堆積を示す例（第 1・4 号跡）と不鮮明な例がある。前記の 2 基は、西に向って倒伏したことは自明である。また、確認段階で検出された。多くの不鮮明な落ち込み、東側の小支谷の上段から調査区西半部の南側に認められた。以上、限られた範囲ではあるが、分布の中心は、台地の南面にあると考えられる。

（村田 健二）

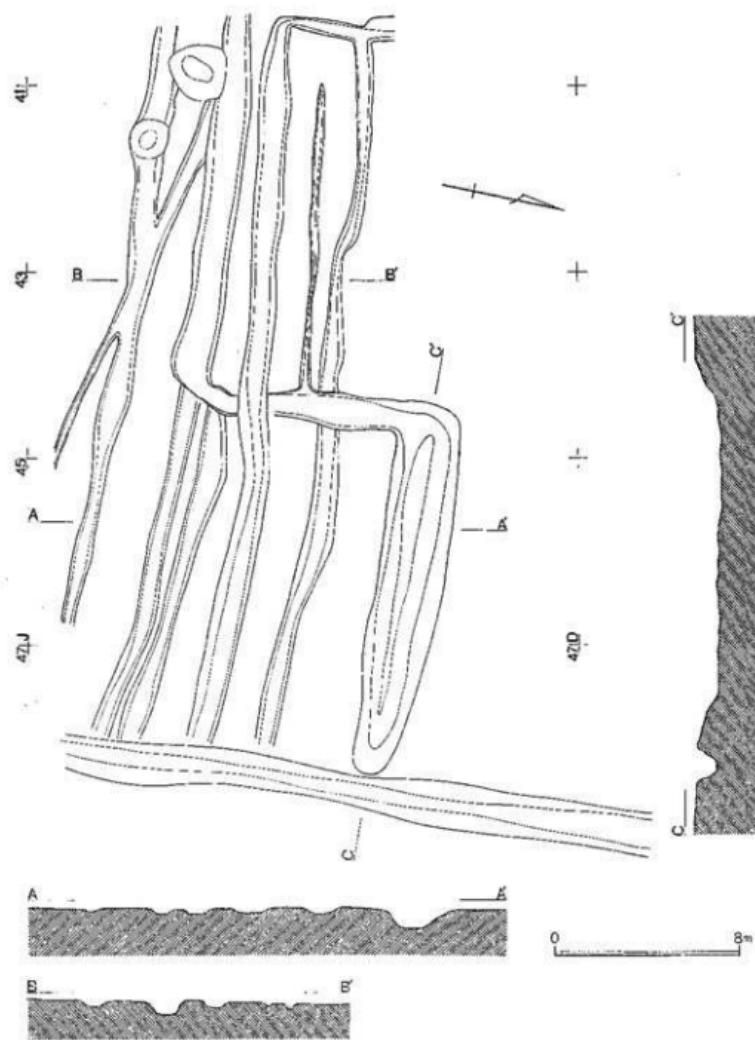


第68図 風致木跡実測図

(2) 畦状遺構 (第69図)

東西に6条、南北に1条がほぼ直交して存在する。その内、大きく鉤形に屈曲するものは、幅1m、深さ45cmを測り、断面形および区画性の点で多分に溝的性格の内容をもつ。遺物は、カワラケ培焼の小破片が少量出土した。他の遺物は、比較的浅く、断面形も明確な掘り込みを持たず、溝底部は掘り形が不明瞭で、しかも起伏に富む、また、南北に走る最も東側で検出されたものは、断面逆台形を呈し、かなりしっかりした掘り込みを持つ。いづれも、遺物はほとんど検出されず、その性格について位置付けることはできない。以上提示した遺構は、ややもすれば現世の畦跡と考えがちであるが、溝底に包含される遺物は近世陶磁器、培焼、カワラケ類が大略出土することから、一樣注視して考える必要があろう。

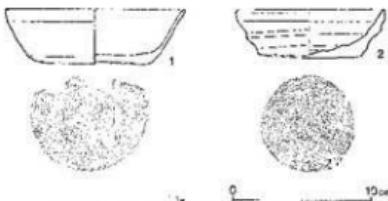
(村田 健二)



第 69 図 山状造構成調図

(3) 表探遺物 (第70図)

表土除去時に採取された遺物は、縄文後期からカワラケの段階までかなり長い時間帯で認められるが、主体はカワラケ、焼成須恵器である。しかし、その多くは器形を窺うことが困難小片で、図示可能なものは2点のみである。また、カワラケはピット群より出土した。



第70図 表探遺物実測図

表探土器 (第65図) 観察表

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵杯	1	口径 13.0 底径 8.0 器高 4.0	体部は下半および上位に弱い腰を有する。持つが、ほぼ直線的に立ち上がる。	水引き整形、底部回転糸切り再調整無し、焼成良好 胎土細砂粒子白色針状物質多量混入、色調淡灰色	ほぼ完形
かわらけ	2	口径 10.7 底径 7.1 器高 3.5	器盤は、底部が薄く、体部は肥厚している。底部はやや上げ底風。	水引き整形、底部回転糸切り再調整無し、焼成良好 胎土砂粒子多量混入 色調淡褐色	ほぼ完形

VI 東松山市上野本篠田遺跡炭化材樹種鑑定報告

(鑑定者 高橋 利彦)

篠田遺跡第7号住居跡から得られた多量の炭化材の内、大形で遺存状態の良好な資料12点について、その樹種鑑定をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。その結果は下記の通りである。

1 試料及び鑑定方法

試料は合計12点、何れも完全に炭化した細片である。肉眼及び双眼立体顕微鏡で表面を観察した後、合成樹脂を用いて、木口、板目、征目の三面の徒手切片を作成し、生物顕微鏡で観察、同定した同時に各試料の顕微鏡写真 (R d : 紙目、T g : 板目) を作成し、PLATE-1~12として後掲した。尚、7 H-114 試料は試料の状態が特に不良で、徒手切片の作成が困難であったため、征目面のみ反射光照明によって断面の撮影を行なった。

2 鑑定結果

鑑定結果を下記の通り一覧表とした。

樹種鑑定表

試料番号	種名	試料番号	種名
1 7 H-25	Cyclo bala nopsis sp アカガシ亞 属の一類	7 7 H-159	Cyclobala nops sis sp アカガシ亞 属の一類
2 -82	Cryptomeria japonica スギ	8 -189	Cryptomeria japonica スギ
3 -89	Cyclo bala nopsis sp アカガシ亞 属の一類	9 -196	Quercus neutissima クヌギ
4 -114	Quercus acutissima ma タヌギ	10 -204	〃 〃
5 -152	Cyclo bala nopsis sp アカガシ亞 属の一類	11 -214	Cyclo bala nopsis sp アカガシ亞 属の一類
6 -157	〃 〃	12 -216	Cha maecy paris sp ヒノキ属の 一類

(資料番号は、ドット固化的台帳番号を示す)

次に各試料の主な解剖学的特徴を記載する。

1) 7 H-82 Cyclobalanopsis sp

放射孔材で管壁はやや厚く、円形～橢円形、単独である。単旋孔を有し、放射柔組織との間には横状の壁孔が認められる。柔組織は短接線状～独立帶状で年輪界は不明瞭、放射組織は同性で10細胞高前後の單列のものと複合放射組織となる。

2) 7 H-82 Cryptomeria Japonica

早材から晚材への移行はやや急で年輪界は明瞭である。樹脂道はなく、放射仮道管も認められない。放射柔細胞の細胞壁は滑らかで、分野壁孔はスマスギ型 (Taxodoid) で1~2個、(稀に4~5個)のものが最も多い。放射組織は3~15細胞高、8細胞高前後のものが多く、單列である。

3) 7 H-89 *Cycloba lanopsis* sp

放射孔材で管壁はやや厚く、円形～橢円形で单孔である。单旋孔を有し、壁孔は交互状に配列、小型で密度は高い。また、放射組織との間には横状の壁孔が認められる。柔組織は独立帯状で年輪界は不明瞭、放射組織は同性で6細胞高前後の単列のものと5～10細胞幅の広放射組織よりなるが、広放射組織の密度は低い。

4) 7 H-114 *Quercutis acutissima*

環状材で孔眼部は2～3列、管壁は厚く橢円形、孔眼外では急激に大きさを減じ、放射方向に配列する。共に単独、单旋孔を有し、壁孔は密で交互状に配列し、時に六角形になる。また、放射組織との間には横状の壁孔が認められる。柔組織は短接線状～独立帯状で年輪界は不明瞭、放射組織は同性で10～15細胞高のこれまでに部分的に複列となる単列のものと複合放射組織よりなる。

5) 7 H-152 *Cyclobalanopsis* sp

放射孔材で管壁はやや厚く、橢円形、単独で单旋孔を有し、放射組織との間には横状の壁孔が認められる。柔組織は独立帯状で年輪界は不明瞭、放射組織は同性で2～15細胞高の単列のものと複合放射組織よりなる。また、ピスフレック (pithfleck) と思われる異状組織も認められる。

6) 7 H-157 *Cyclobalanopsis* sp

放射孔材で管壁はやや厚く、橢円形～円形、単独で单旋孔を有し、壁孔は交互状に配列または放射組織との間では横状となる。柔組織は独立帯状で、年輪は不明瞭。放射組織はやや同性で、6細胞高前後の単列のものと10細胞幅程の広放射組織による。

7) 7 H-159 *Cyclalanopsis* sp

放射孔材で管壁はやや厚く、橢円形～円形、単独で单旋孔を有し、壁孔はやや小さく、密に交互状に配列し、放射組織との間では横状となる。柔組織は独立帯状で年輪界は不明瞭、放射組織は同性で3～18細胞高、多くは5～10細胞高の単列のものと6～10細胞幅の広放射組織よりなるが広放射組織の密度はい。

8) 7 H-189 *Cryptomeria japonica*

早材から晩材への移行は急激で年輪界は明瞭、生長は可なり悪い。樹脂道はなく、放射仮道管も認められない。放射柔細胞の細胞壁は滑らかで、分野壁孔は大型でヌマスギ型 (Taxodoid) ～スイショウ型 (Glyptostrobid) で1～3個、2個のものが多い。放射組織は2～11細胞高、多くは6細胞高程の単列である。

9) 7 H-196 *Quercus acutissima*

環孔材で孔眼部は1～2列、孔眼外では急激に大きさを減じ、管壁は厚く円形である。孔眼外では極く稀に放射方向に複合するが、殆んどは単独、单旋孔を有する。柔組織は短接線状で年輪界は不明瞭。放射組織は同性、2～13細胞高の単列のものと複合組織よりなる。

10) 7 H-204 *Quercus acutissima*

環孔材で孔眼部は1～2列、孔眼外では急激に大きさを減じ管壁はやや厚く、橢円形～円形、単独で单旋孔を有し、壁孔は密で交互状に配列、放射組織との間では横状となる。柔組織は散在及び短接線状で年輪界は不明瞭。放射組織は同性で3～13細胞高の単列のものと複合組織よりなる。

11) 7 H-214 *Cyclobalanopsis* sp

放射孔材で管壁は厚く、円形、単独で単旋孔を有し、放射組織との間には橋状の壁孔が認められる。

柔組織は独立帶状で年輪界は不明瞭。放射組織は同性で5細胞高前後の單列のものと複合組織よりなる。

12) 7 H-216 *Chamaecyparis* sp

早材から晚材への移行は緩やかで、晚材部は薄い。年輪界は明瞭。生長は良好である。樹脂道はなく、放射仮道管も認められない。放射柔細胞の細胞壁は滑らかで分野壁孔はヒノキ型 (Cupressoid) ~スマスギ (Taxodioid) で1~2個あり。放射組織は3~15細胞高、若しくは10細胞高以下で單列である。

尚、今回同定された *Cyclobalanopsis* spp の中でNo.89、157、159はNo.25、152、214と比較し、管孔の密度が低く、放射組織も5~10細胞中で細胞高も低く内眼で認められるような複合組織とならない等の差異が認められる。この違いが、種レベルのものなのか、或いは樹令や生育環境などからくる同種内の個体変異によるものなのか、現時点では判断することはできない。樹木をその顯微鏡的構造のみで、種まで同定することは困難である場合もある。従って、上述の2群に更に分けられる可能性のあることを指摘するに止めておく。

VII 結 語

1 繩文時代

筆田、鶴田遺跡で検出された包含層は、早期茅山式から後期掘之内式まで、断絶はあるものの長い時間を経て形成された。しかし、包含層を主体的に形成する時期は繩文時代後期のある一定時期に限定される。

さて包含層については一般には土器捨て場と解釈される事が多く、可児通宏氏による平和台遺跡の調査例を引用すれば、住居址以外の特定地域から土器が掘って出土することに注目し、後に平和台パターンとして今日に至るようになった。

上記を踏まえて、筆田、鶴田両遺跡について考えて見たい。遺跡の立地について概観すると、都幾川の沖積低地に、ほぼ直角に開口する支谷は、調査区をとりかこむ様に西折し、丁度独立丘となる。遺物の分布する部分（包含層）は、この独立丘の北東斜面において検出された。分布状態は水平分布を見る限り、かなり密度の濃い分布といえるが、垂直分布は分層が可能なほどの厚さではなく短期間で終えたことを物語っている。

土器捨て場としての性格を持つものであるならば当然生活空間の場として存在し、そこには集落がなければならないが、調査区内よりは集落の存在は認められず、繩文時代の遺構としては筆田1号土壙が検出されたに過ぎない。ただ、包含層は調査区北西側に更に延びることが予測され、集落の存在の可能性があるとすれば、隣接する地域内に認められてもおかしくないものと考える。又、出土した土器の時差については、称名寺式から掘之内式、Ⅰ式まではほとんど時間的な断絶ではなく早期、前期、中期の土器が全体的な量分からみれば少ないので、出土状態の在り方がレベル的にも層位的にもほぼ均一であることは、以前より土器捨て場としての利用が想定できる。

以上、筆田、鶴田両遺跡より検出した遺物包含層を考えるにあたり、土器捨て場としての性格付けをする上で、様々な問題点があると思われる。今後、集落との関連を踏まえて、土器捨て場としての意義付け、あるいは位置付けを再度考える必要があると思われる。

引用・参考文献

- 可児通宏、安孫子昭二『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅶ』 多摩ニュータウン遺跡調査会 1969年
鶴田勝はか 「増善寺遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第5集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
1982年

竪田、鶴田遺跡出土縄文土器について

竪田、鶴田両遺跡の発掘調査によって、縄文時代の遺物包含層が検出し比較的多量の土器が出土した。時期は早期茅山式から前期黒浜式、中期曾利式、阿玉台式、加曾利E I～E IV式、後期称名寺式、堀之内 I、II式が出土した。特に後期称名寺式、堀之内 I、II式が主体を占める。ここでは包含層出土の中で主体をなす、第Ⅰ群土器称名寺式、第Ⅲ群土器堀之内 I式、第Ⅳ群堀之内 II式について若干の検討を加えたい。

まず称名寺式については、神奈川県横浜市称名寺貝塚の資料をもって提唱され、縄文時代後期初頭に位置付けられている。しかし、県内において出土例は多いものの、住居跡から出土した例は九ヶ崎遺跡、馬込遺跡などほんの数例だけが知られている。まとまった資料が得られず型式の存在すら疑問視される事もあった。しかし、今村啓爾氏の「称名寺式土器の研究上、下」で確固たる位置を確立したと言えよう。

では、両遺跡より出土した土器について見ると、所謂磨り消し縄文を伴なう土器は少なく、沈線によって区画された中に刺突、及び梯描文などによって文様を構成される土器が比較的多く見られる。ここでは文様構成によって4つに細分したが、文様タイプを考えれば時期的差はあまりないものと考えられる。又、第51図3に示した土器については新潟を中心に分布される三十番場式に類似する土器が出土した事については余り例が報告されておらず、当地域と日本海側との交流を考え上で示唆的な資料と思われる。

第Ⅰ群土器とした堀之内 I式は出土した縄文土器中一番主流を占める。細分にあたっては大きく沈線を主とするもの、縄文を地文に沈線が施されるものを分類し、更に細分した。特に堀之内 I式の土器にあっては、沈線を主たる文様構成とする土器が縄文を地文とする土器よりも圧倒的に出土量が多い点である。これは確かに堀之内 I期の住居跡が検出された神明貝塚とは全く逆の様相である。さらに沈線を主たる文様構成とする土器が出土した地域を見れば、神奈川県伊勢原市下北原遺跡、鎌倉市東正院遺跡を例として提示することができる。又、同じ埼玉県に立地する神明貝塚の土器群の様相は、千葉、下総台地と言った海岸部に見られ、堀之内 I期では地域によって全く異なる土器の様相を呈する。沈線系文化圏、縄文系文化圏の二つの文化領域が形成されるのは単に沈線系文化圏の民族が主として狩猟、採集だけの氏族であり、縄文系文化圏の民族が漁労を主とする民族といった単に地域だけから見ただけで論考するのは的はずであるが、ただ地域によって独自の様相を見せるのはまぎれもない真実である。特に県内では堀之内期の住居跡を検出した例は、神明貝塚、栄光院貝塚、大宮公園内遺跡、岩の上遺跡などあるが、1軒もしくは2軒の住居跡が発掘されているに過ぎない。昨年、当事業団で実施した蓮田市久台遺跡の調査では、堀之内期の良好な集落が発掘された。該期の集落調査としては初めての事例であり今後の研究に与える影響は大きいものと考える。当東松山市内でも堀之内期の遺跡は少なく前述した岩の上遺跡が唯一の調査例であり、竪田、鶴田遺跡出土土器はこれに統くものである。しかし、県内を見ればやはり住居跡から一括資

料に乏しく、又、地域によっても土器の様相が異なり混泡としているのが現状であろう。今後とも引き続き資料の増加をまたねばならないが、何よりも地域性を重視して検討することも忘れてはならない。

(石川 俊英)

引用参考・文献

- 青木秀雄 「称名寺式土器の再検討」 埼玉県考古第16号 1977
安孫子昭二他 「平尾遺跡調査報告」 1970
安孫子昭二他 「神明貝塚」 庄和田文化財調査報告第2集 1970
市川修他 「高井東遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査報告第4、5集 埼玉県教育委員会
今村啓爾 「称名寺式土器の研究上、下」 考古学雑誌第63巻1号、2号 1977
岩崎卓也 「忍ヶ前貝塚」 松戸文化財報告 1963
折原繁他 「千葉市中野僧御堂遺跡」 千葉県文化財センター 1977
大宮市史記室 宮崎繁他 「丸ヶ崎遺跡」 大宮市史第1巻
小川良祐、宮崎朝雄他 「大宮公園内遺跡発掘調査報告」 埼玉県立博物館紀要2 1970
金子浩品、和田哲 「剣取C地点貝塚の発掘一小名浜所収」 いわき市教育委員会磐城山張所 1968
清瀬一順編 「千葉市矢作貝塚」 千葉文化財センター 1978
栗原文藏他 「岩の上、蛭子山」 埼玉県遺跡発掘調査報告第1集 埼玉県教育委員会 1973
郷田良一他 「千葉東宝部ニュータウン一木戸作(第2次)一」 千葉県文化財センター 1979
笹森健一ほか、「志久遺跡」 埼玉県遺跡調査会第31集 埼玉県教育委員会 1976
庄野靖芳ほか 「加倉、西原、馬込、平林寺」 東北鉄道自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 1972
鈴木保彦 「東正院遺跡調査報告」 1972
鈴木保彦 「下北原遺跡」 神奈川県埋蔵文化財調査報告14 神奈川県教育委員会 1977
谷井聰 「称名寺式土器の推移について」 埼玉県立博物館紀要3 1977
谷井聰ほか 「坂東山」 埼玉県遺跡発掘調査報告第2集 埼玉県教育委員会 1973
沼沢豊 「松戸市金舎台遺跡」 房総資料刊行会 1974
藤井功、前田潮 「松戸市東ヶ沢遺跡調査報告」 松戸市教育委員会 1966
宮崎朝雄ほか 「ト伝」 埼玉県遺跡発掘調査報告書25集 埼玉県教育委員会 1980
三友国五郎ほか 「榮光院貝塚発掘調査報告書」 1966
村上後嗣 「松戸市上本賀貝塚の土器」 大冢考古第9号 1968
吉田格 「横浜市称名寺貝塚」 武藏野文化協会 1960

2 弥生時代

検出された遺構は、吉ヶ谷式土器終末段階を示す良好なセットを出土した住居跡 1軒である。

この住居跡の特徴は、第Ⅲ章および第Ⅶ章の 2 で触れた通り、該期の資料としては余りにも一般的でない内容を多分に包含しているといえる。まず、焼失家屋であり、南壁下を中心に所謂ベッド状遺構を付設し、炉は粘土板をもじいた広義の地床炉である。遺物は、覆土中には少なく小破片の出土も稀であった。遺物の大半、完形もしくは大形破片、は主にベッド状遺構上かあるいはその周辺から検出された。そして、何よりも不可解なことは、柱穴が全く存在しないことでありピットと呼べる掘り込みは、西壁下中央に設けられた貯蔵穴 1ヶ所だけである。

この様な住居跡例、特に無柱穴例は現在までのところ報告されていない。今後、吉ヶ谷式土器文化を考える上で、新たに加えるべき課題の一つになりそうである。

さて、本跡の概要を中心記してみたが、ここで住居跡と遺物について特筆すべき部分（細部）を中心に検討してみたい。

遺構については、従前吉ヶ谷式土器文化を中心に論じたもの（柿沼、1982）、櫛指文系土器文化を中心に論じたもの（石岡1982）、県内の弥生文化の推移を概観したもの（井上1980）等個人研究のほか、報告書の中でも諸々の検討をその都度紹介されてきており、吉ヶ谷式土器を出土する住居跡に対する共通認識も提示される様になった。集約すると、住居の長軸と短軸の差が南関東より大きく、炉は東関東に類似が求められる複数（2～3ヶ所）所有であり、炉の内最大のものは主柱を結んだ縦外に構築される。また、終末段階の根平遺跡の時期には南関東との差は見出されないとされている。しかし、これらはいずれも今後の資料的増加を期待する部分が大であると思われる。

本跡の問題に立ち戻り、まず、炉跡を考えてみる。厚い粘土板を用い、表面は長期間の使用を裏付けるかの様にヒビ割れ、かなり深部まで赤変していた。同様な例は、東京都駿河台遺跡の他、神奈川県稻荷台地遺跡、静岡県豆呂遺跡等に見い出せるが、特に集中する地域は認められず、散漫な在り方といえる。しかし、本跡の場合、中心に掘り込みを持つタイプは、器設部を意識しての構築と考えた場合、本跡の様な掘り込みのないフラットな構造では機能面を生かした事例として理解することも必要であろう。台付壺の用法から考えても合理性が指摘できる。

ベッド状遺構については、本例の場合 70 厘メートルと比較的細い造りで、北東および北西壁下にまで一部跨がるが、末端ではやや明瞭さを欠く。平面形は略「コ」の字形を呈するものであった。この様な例は、ベッド状遺構の全圓的規模の集成、分類を行なった先駆によれば、まず熊野正也氏の 6 分類方法に従えば B ないし E 類に相当する。また、熊野分類の不完全な集成作業をより充実、発展させた河野真知郎氏は、60 遺跡およそ 100 軒以上の住居跡例を提示し、8 類型に分類、更に B 類を 2 細分、D 類を 4 細分という様に 22 類類のバラエティーを示した。河野分類に従えば D₂ 類に相当しそうである。従来吉ヶ谷式期の住居に付設された例は、東松山市桜山 Y 2 号住居跡、比企郡滑川町屋田遺跡例と共に弥生時代後期ないし終末の範疇でとらえられる時期であり、古い段階では余り知られていない。これに対し、南関東あるいは県南部での検出例は、東京都道灌山遺跡例で弥生時代中

期と最も古く、前野町段階の東京都鞍骨山遺跡、最も新しい例として、千葉県小室遺跡の古墳時代中期が知られている。北関東においてもかなり新しい段階まで遺存することが知られており、栃木県櫛山北遺跡（古墳時代中期）が代表的なものである。この様に他地域では長い期間継続して認められることを証明すれば、本地域の在り方はやや特異なものとして貢献する。

熊野、河野両氏の示した多くの例をもってすれば、当然廐所と考えることには不適当なものが多く和島誠一氏等により唱えられた一集落内での階級差としての認識理解をそのままスライドしてはめることについても検討を要する様に思われる。ここでは、河野氏が論じる様に、関西ではかなり普遍的な存在であったものが、関東地方ではごく少數のベッドを有する住居が特異な地位を占める傾向を示し、ベッド状構造も権力表象の一部分を構成するという意見に賛同したい。

また、性格についても、廐所とするより土器の在り方から祭儀をとり行なう場として認識する方がより適切な考え方かと思われる。

出土遺物は、壺3、甕1、高杯4、瓶1の計9点である。その内、胴部上半のみ残存の壺形土器(1)は、口縁部に4本1組2対の棒状浮文が貼付されているが、器形および口縁部の接口方法等桜山Y2号住居跡例に酷似している。共に橢円形の胴部であるが、無造作に太い単第R Lを横軸施文する点、「吉ヶ谷」的色彩をよく残している。壺形土器、(2)は、根平4号住の土器群によく対比できるし、高杯形土器、(5)は、かなり大形の製品であるが、輪脱み痕は著しく退化しているものの規模の点では従前の伝統をよく残している。また、高杯形土器については、高い脚部を有する(7)や、より西日本的な器形の(8)などバラエティに富む。瓶形土器(6)、あるいは台付壺形土器(9)は、直線的でシャープな造り、装飾もなく実用性を優先した日常雑器に徹する造りのものが多い。以上、本来の吉ヶ谷式の伝統は、甕・壺形土器に強く残りバラエティも少ない。これもこの文化が終末間近であることを如實に物語っているといえるであろう。時間的には、柿沼幹夫氏の提示した編年案に従えば、Ⅲ式に位置付けられよう。根平4号住、桜山Y2号住とはほぼ同様な時間帯と考えている。

(村田 錠二)

引用参考・文献

- 柿沼幹夫「吉ヶ谷式土器について」『土器考古5号』土器考古学研究会 1982
石洞憲雄「吉ヶ谷式土器について」『研究紀要4号』埼玉県立歴史資料館 1982
井上尚明「埼玉県における弥生時代研究の現状と問題点」『情報7』埼玉考古学会 1980
村田健二・井上尚明・劍持和夫・富田和夫・西口正純「埼玉の弥生後期円錐形土器」 1982
水村孝行・今井 宏「根平」埼玉県遺跡調査報告第27集 1980
栗原文廣・谷井 雄「駒岡」埼玉県遺跡調査報告書第4集 1974
小久保 智・利根川章彦ほか「桜山古墳群」埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第2集 1981
井上義安ほか「笠釜」大洗地区遺跡発掘調査会 1980
服部敬史ほか「鞍骨山遺跡」東京都八王子市谷野遺跡調査会 1971
服部清道・寺田兼邦ほか「都府台地遺跡調査報告」藤沢市文化財調査報告書第2集 1963
日本考古学協会編「夏目」本稿 1954

- 熊野正也「弥生時代集落構造の一考察」『史館第2号』 1974
河野真知郎「初期農耕集落の解明」『Circum-Pacific 1』 1975
早稲田大学考古学研究室「道灌山遺跡」 1955
房總考古資料刊行会「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書1」 1974
久保哲三ほか「椎巣山北遺跡」宇都宮市教育委員会 1979
和島誠一・田中義昭「住居と集落」日本の考古学Ⅱ 1966
金井深良一「原始・古代の吉見」『吉見町史』吉見町 1978
中島利治「比企地方の弥生式土器」北武藏考古資料図鑑 1976

3 古墳時代

検出された11軒の内、吉ヶ谷式土器を出土した第7号住居跡を除く10軒が該期の遺構である。その内訳は、古墳時代初頭と考えられるもの8軒、古墳時代後期2軒である。古墳時代初頭（第1～3、6、8～11号住居跡）で全容が窺えるものは僅か5軒に過ぎない。

検出された住居跡の平面プランは、いずれも方形ないし隅丸長方形を基調とするが、規模の点ではかなりの格差が認められる。

柱穴は、遺存状態の著しく悪い第2、3号住居跡を除く全ての住居跡に認められ、しかも整然とした4本柱である。（6、10号住居跡の場合、建て換え後も同一の柱穴を使用しており、同位置改築の証例もある。）貯蔵穴は、第1号住居跡の1例であるが、周囲に突堤をめぐらしたやや大形のもので、桜山古墳群（小久保ほか1981）に好例が求められる。炉跡は全ての住居跡で検出されたが、構築位置に関しては2種類存在する。一つは柱穴間のほぼ中央にあり、他は全て住居跡の中央に付設されている。形態は全て地床部の形をとるが、明確な掘り込みを有するものは少ない。この様に、前代の在り方からすると住居空間の機能に大きな変革が加えられたことが推察される。（弥生後期の炉跡は、複数で検出される場合が多く、中心となる炉跡は柱穴間に構築される例が多い。）

後述の通り、得られた遺物は極めて微量で遺構の時間的位置付けすら危うい状況である。最も困惑することは、第2・3号住居跡が無遺物に近い状況に加え、重複して存在することである。

さらに、第6・10号住居跡に見られる抜張事例である。遺物の時間的差違（棒状浮文を複合口様に貼布した壺一口唇部に押圧の見られる台付壺→素口様の台付壺）は余り顯著でないことも見のがせない事実である。さらに、周辺の地形、調査区の位置関係等を考慮にいれると、次の様な状況復元が可能であろう。

都幾川の形成する広大な冲積地を臨む狭い段丘上に10軒前後からなる小規模な農業共同体が弥生終末段階に形成され、段丘縁辺の冲積斜面の水田經營に従事したが、2世代前後で放棄し、古墳時代後期まではほとんど順りみられることがなかった。放棄した理由としては、やはり都幾川による自然災害が考えられるが、現状では極めて模拝に乏しい。しかし、方形周溝墓の想定が、可能な遺物の出土、さらに、ベッド状遺構の検出は、農業經營に対する過分な儀礼的呪術の世界の存在を物語っている。

以後、古墳時代後期には、鶴田遺跡に見られる大土木工事に裏付けられる。強力な農業基盤により、かなり大規模な集落が展開していたものと思われる。

個々の住居跡構造については、拡張事例以外ほとんど新しい知見を得ることはできなかったが、それらを複合体（集落）として見た場合、西側に開口部をもち、南北に展開する集落が想定される

出土土器について

古墳時代初頭と考えられる遺構は、前述の通り 8 軒であるが、第 2・3・10・11 号住居跡は無遺物に近い状態であり検討材料は得られず、残る 4 軒についても器形を窺かであった。かかる貧弱な内容であるが、十分に検討を行なってみたい。

4 軒（第 1・6・8・9 号住居跡）から出土した土器群の器種は、壺形土器、甕形土器、台付甕形土器、台付壺形土器、高环形土器、甄形土器の 5 種が認められるが、器台形土器は明確にし得ない。器種毎にその特性を探り検討してみたい。

甕形土器・台付甕形土器 破片が出土量の大半を占め、明確に分離できないため一括した。（底部が欠失し明瞭でないが 9 号柱の 2 が唯一の甕形土器といえる。）

台付甕形土器は、口唇部への刺突あるいは押圧の有無により 2 大別できるが、口縁部の長短、胴部の形状、施文具の違い、施文方法、脚部の造りにかなりの差違が認められる。これらの特徴は、単にバリエーションとして処理できる部分と、地域性、型式差として現われる場合があり、明確な区分が必要となる。特に後者の場合、第 1・9 号住居跡出土資料は頗著である。

つまり、板状工具による口唇部押圧、球形の胴部、間隔の密な刷毛目による調整台付甕（3）は、素口縁を有し、間隔の荒い刷毛目により充填、胴部はやや長胴ぎみの台付甕（4）と共に伴っている。

（3）は所謂前野町式土器に該当するもので、最近ではその主要な分布領域を多摩川上流域・荒川流域に求め、刷毛調整甕形土器として認識されている。また、この刷毛調整甕形土器には、数条の S 字状結節文で羽状繩文を区画する壺形土器の伴出が知られている。これに対し（4）は、川越市鍛ヶ関遺跡、五領遺跡 B 区等に代表される在地性の強い土器群である。一方、唯一甕形土器とした朝顔風の口縁部をもつ 9 号住（2）は、類例に乏しく明確にし得ないが、強いてあげれば見玉郡三里村塙本山古墳群第 30 号方形周溝墓出土土器、大宮市大宮公園内遺跡出土土器が該当すると思われる。

高环形土器 完形はなく全て破片である。大形と呼べるものは明瞭でなく、小形のものが大勢を占める。环部のバラエティーは少ない。全て塊状を基調とし、体部下端に弱い稜をもつもの（第 1 号住 12）と半円形の整った塊状を呈するもの（第 1 号住 13、第 6 号住 1）に、脚部は、裾が広く低い造りのもの（第 1 号住 15、16）、环部との接合部分が幅広で、緩やかに外に広くもの（第 8 号住）整った円錐形を呈し器台的な造りのもの（第 6 号住 2、3）に分けられる。その内、第 8 号住出土のものは、五領遺跡 B 区 6 号住出土の高环に類似点を見ることができるが量的には少ない。一方、第 1 号住出土の（15、16）は小片であるため不明瞭であるが、東海地方西部に範が求められる。（千葉県小田部古墳等で見られる装飾性が高く、脚部が低い造りのものを示す。）

壺形土器 広口で直立ぎみの口縁部、外面は刷毛目調整後磨きが加わる。最大径は脚部下半にあ。以上が第 9 号住居跡出土遺物 1 の特徴であるが、関東地方では極めて一般的な出土土器として

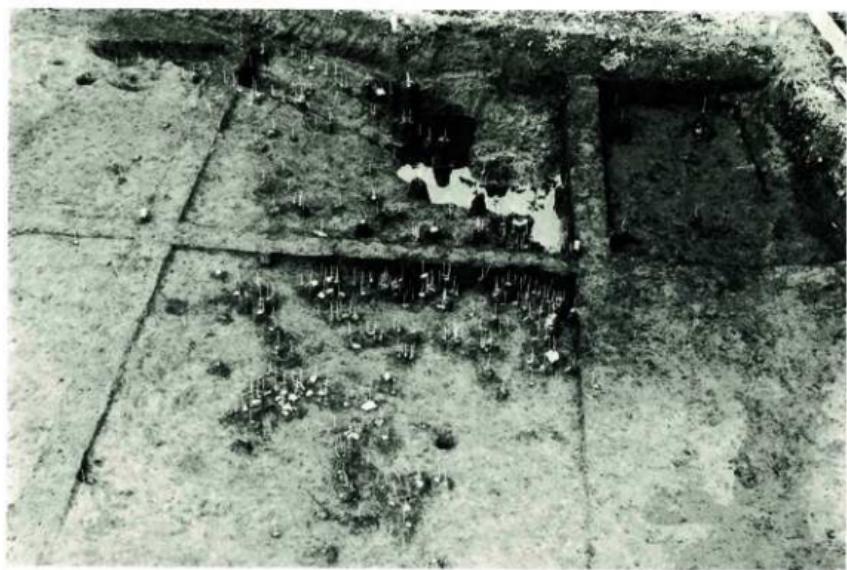
認識できる。例として群馬県下郷天神塚古墳、埼玉県本庄市諏訪遺跡第25号住居跡、神奈川県横須賀市長井内原遺跡F地点1号住居跡などがあげられ、S字状口縁台付甕と共に伴する事例もよく知られるところである。

以上、本跡出土土器について略記してみた。当然のことであるが、資料的な不足は否めない。そして、貧弱な資料をベースにしても、比企地方独自の土器の在り方はやはり明確に成し得なかった。今回、弥生時代と古墳時代に区別したが、第7号住の吉ヶ谷終末段階と、肩毛調整台付甕を出土した9号住との時間的な差異がどの程度存在するのか微妙であるが、一応本跡の場合、他の住居内、あるいは遺跡全体の中での吉ヶ谷式土器の分布が、ほとんど認められること（僅かに第6号住で数片出土した。）などを吟味すれば、やや後出程度に考えることが妥当であろう。

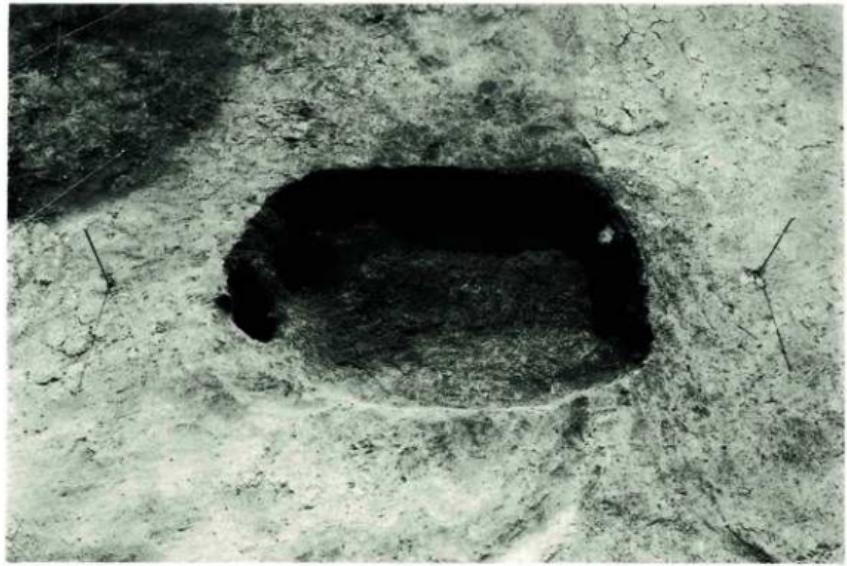
引用・参考文献

- 東松山市『東松山市史 資料編第一巻 原始古代・中世 遺跡・遺構・遺物類』 1981
金井琢良一「五領遺跡B区発掘調査中間報告」台地研究13 1963
小久保義ほか「鶴ヶ丘遺跡」埼玉県遺跡発掘調査報告書第八集 1976
小久保義ほか「桜山遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第二集 1981
埼玉県『埼玉県史 資料編2 原始古代』 1982
日本考古学協会編「関東における古墳出現期の諸問題 <資料>」
佐々木達夫「古代村落の変遷過程」『原始古代社会研究!』枝倉書房 1974
湯川悦夫ほか「南関東出土の東海系土器とその問題」『小田原考古学研究会報』第5号 1972
北田井克仁「古墳出現前段階の様相について」『考古学基礎論』3 1971

図版

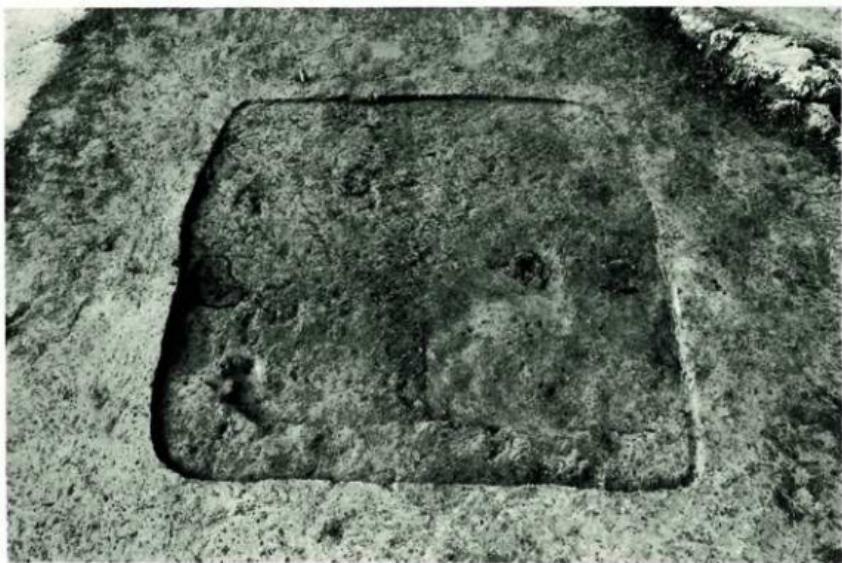


籠田遺跡包含層

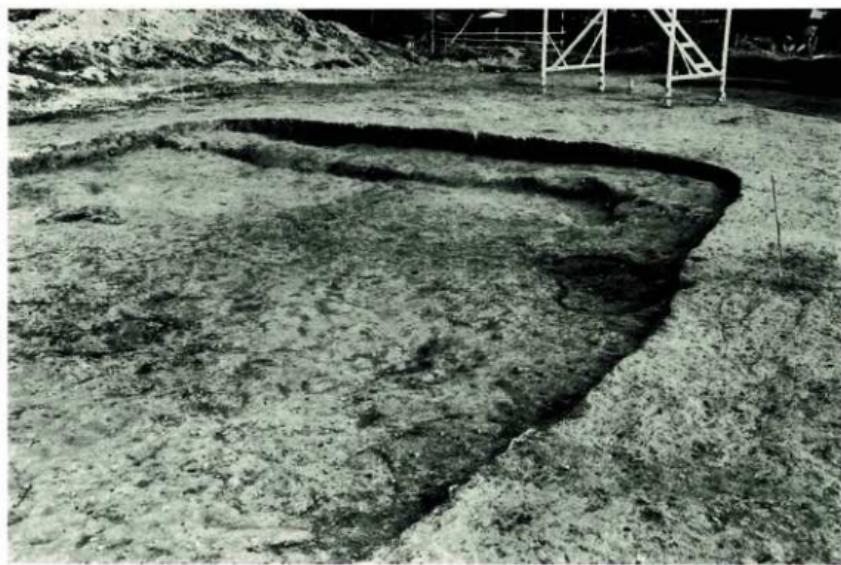


第10号土壤

図版 2



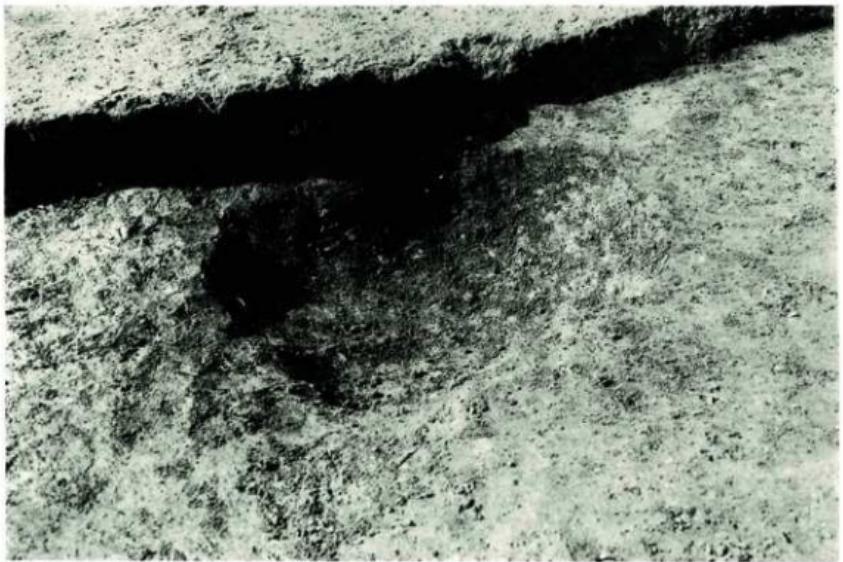
第7号住居跡全景



第7号住居跡ベッド遺構



第 7 号住居跡貯藏穴



第 7 号住居跡貯藏穴



第7号住居跡遺物出土状態(1)



第7号住居跡遺物出土状態(2)



第 7 号住居跡遺物出土状態(3)

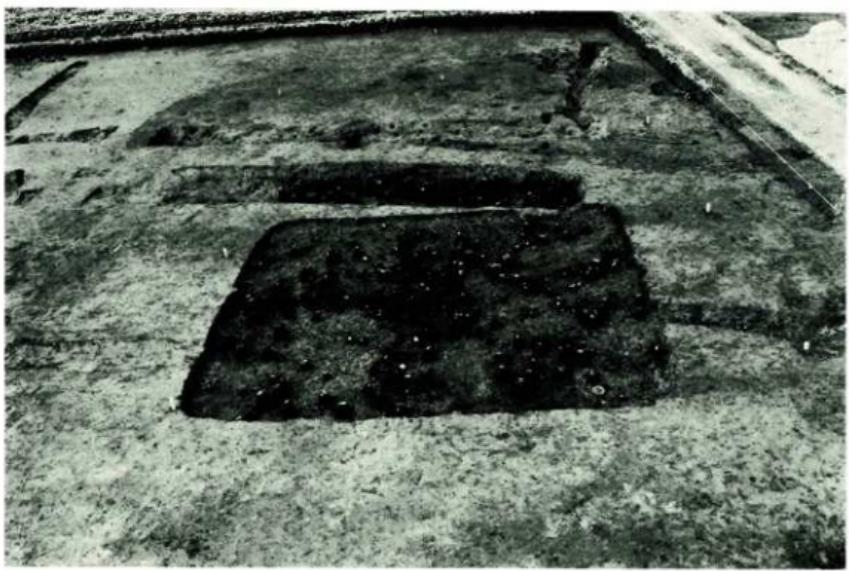


第 7 号住居跡遺物出土状態(4)

図版 6



第1号住居跡全景（掘り方）



第1号住居跡遺物出土状態(1)



第1号住跡居遺物出土状態(2)



第1号住跡居遺物出土状態(3)

図 版 8



第2・3号住居跡全景



第4号住居跡全景



第4号住居跡カマド部分



第4号住居跡遺物出土状態

図版 10



第4号住居跡ピット半断面



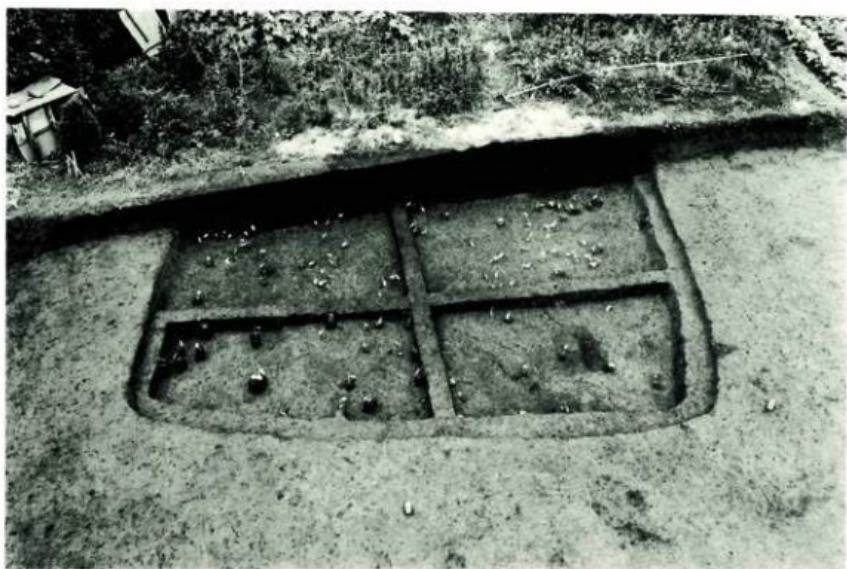
第4号住居跡ピット断面



第5号住居跡全景



第6号住居跡全景



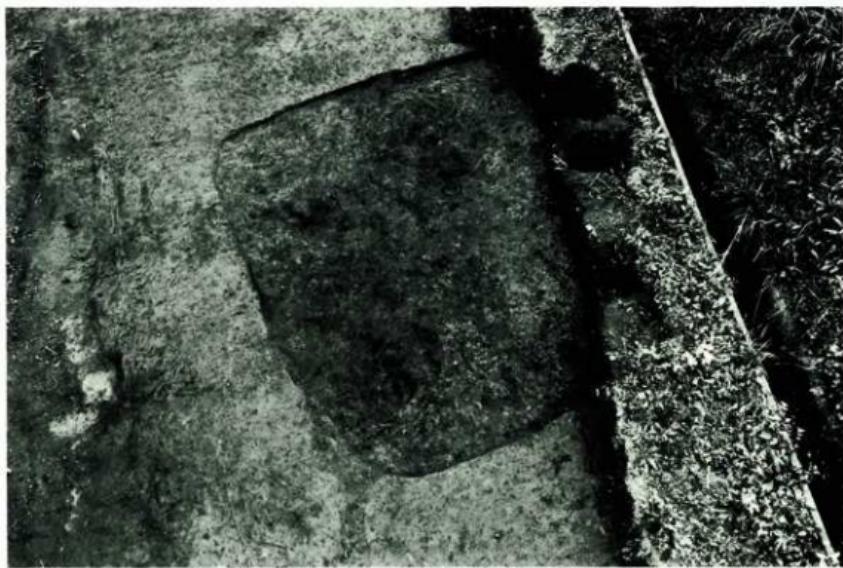
第6・10号住居跡全景



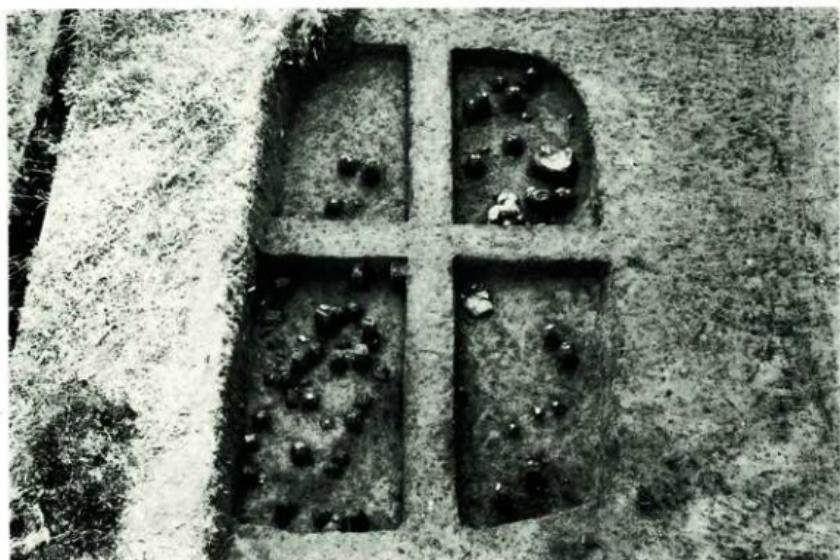
第6号住居跡ピット半載面



第 8 号住居跡遺物出土状態



第 8 号住居跡全景



第9号住居跡遺物出土状態(1)



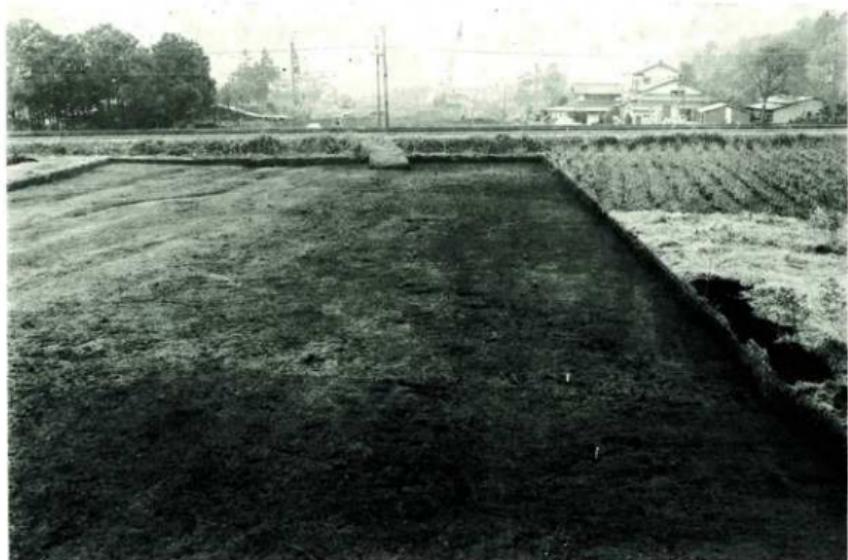
第9号住居跡遺物出土状態(2)



第9号住居跡遺物出土状態(3)



第1号満状遺構



鶴田遺跡包含層（東方より）



第1号風倒不跡セクション



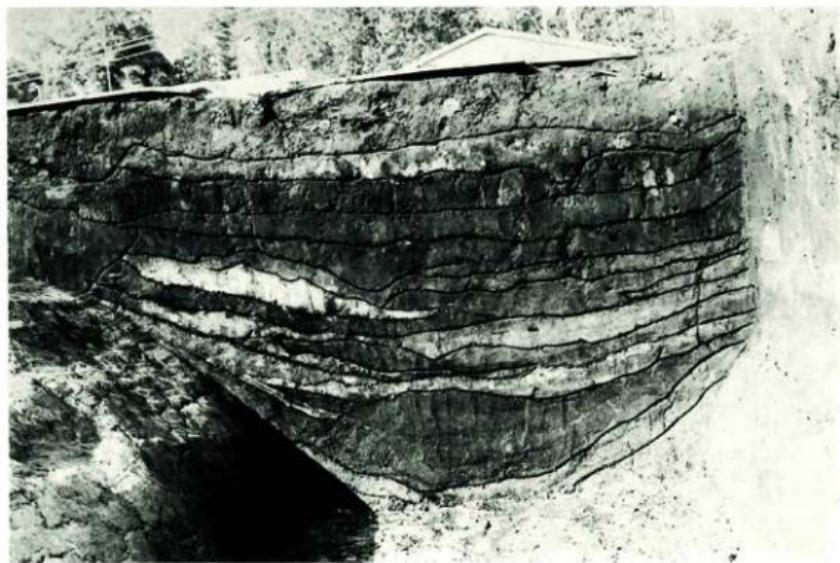
第1号集石土壤全景



第1号集石土壤断面



第2号溝北面セクション



第2号溝北面セクション

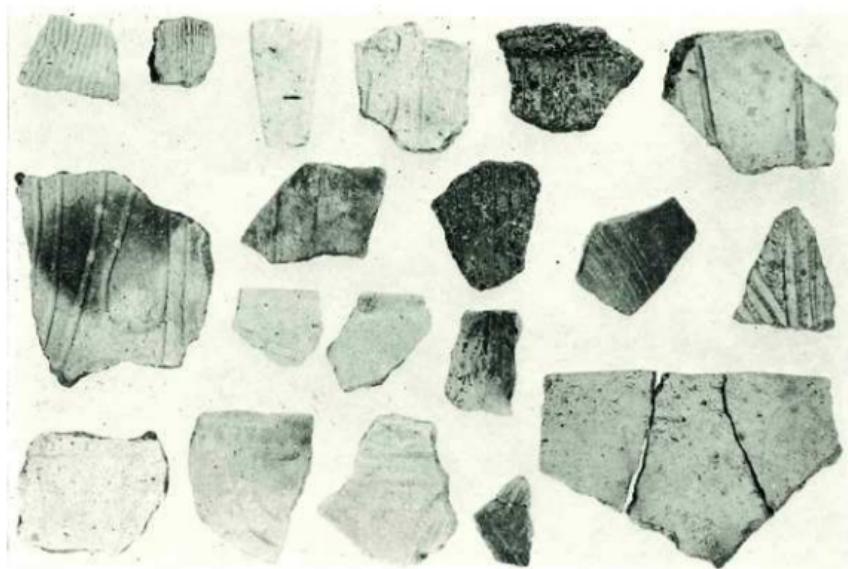


第2号溝北半部分

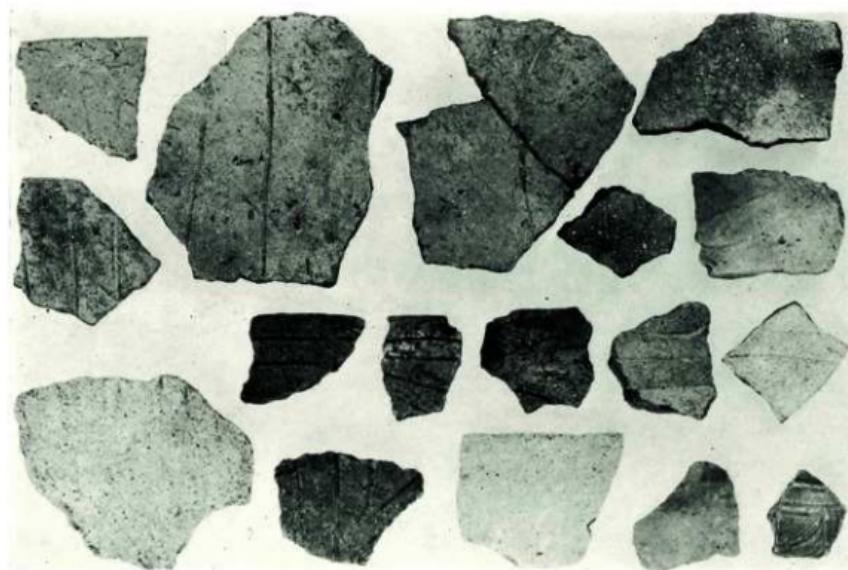


ピット群

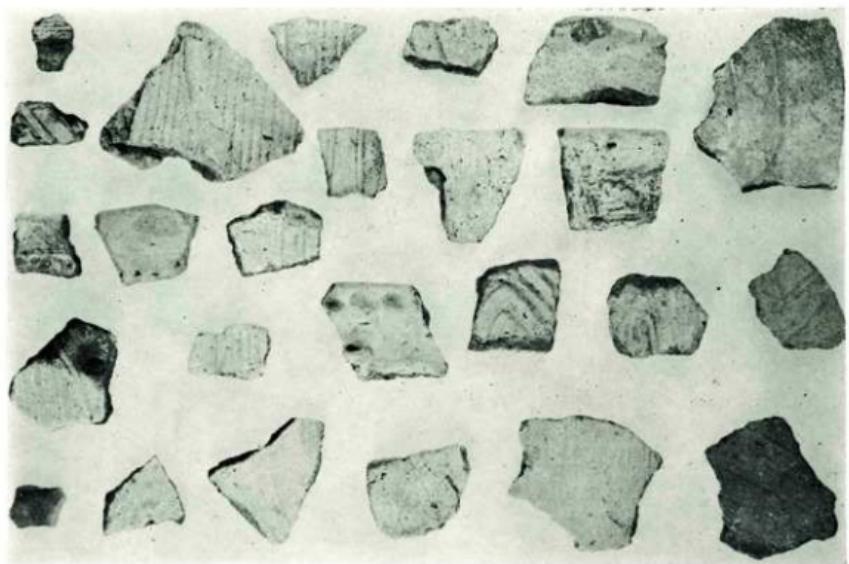
図版 20



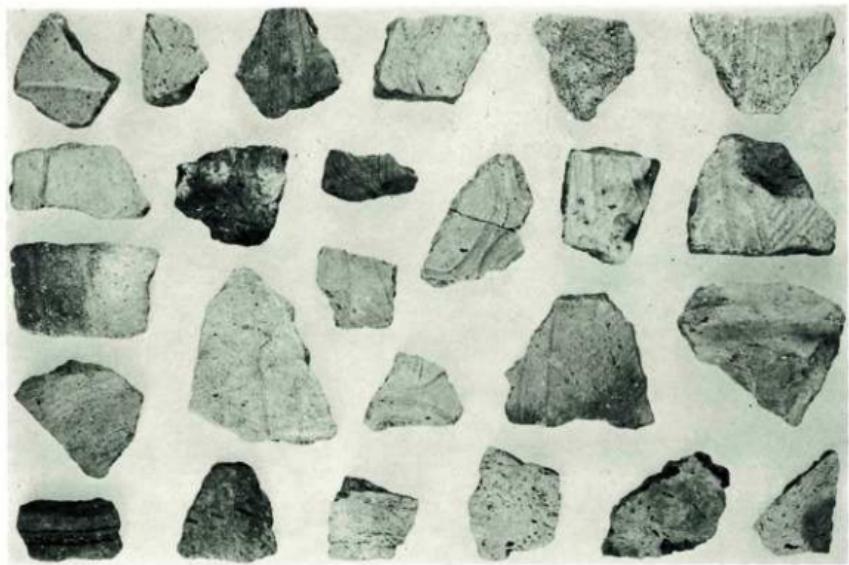
笠田遺跡包含層出土土器 その1



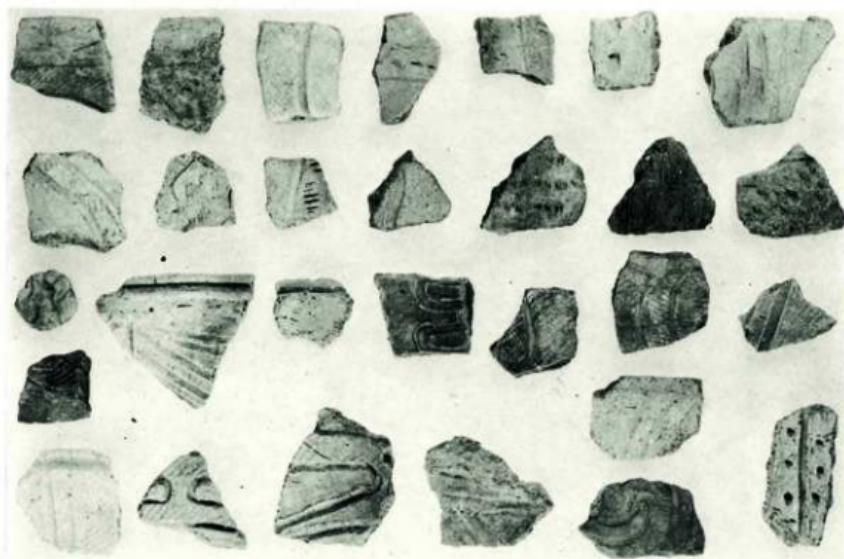
笠田遺跡包含層出土土器 その2



篠田遺跡グリット内出土土器 その3



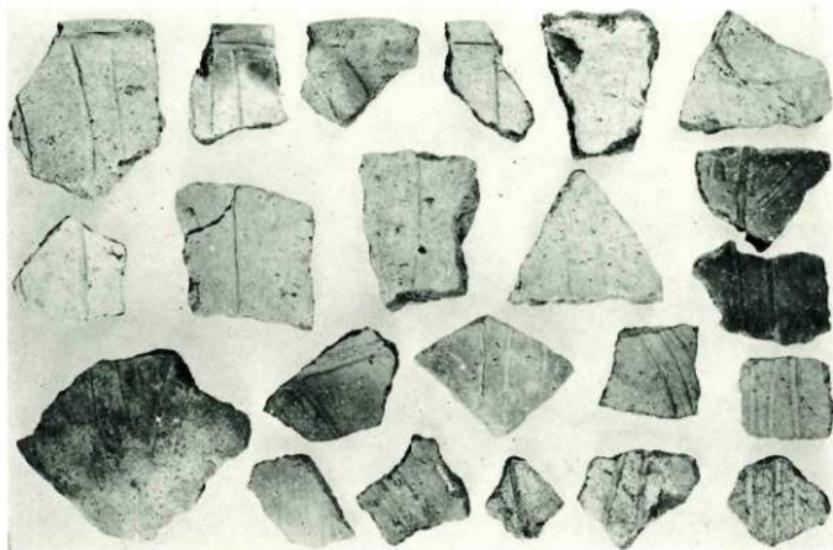
篠田遺跡包含層出土土器 その4



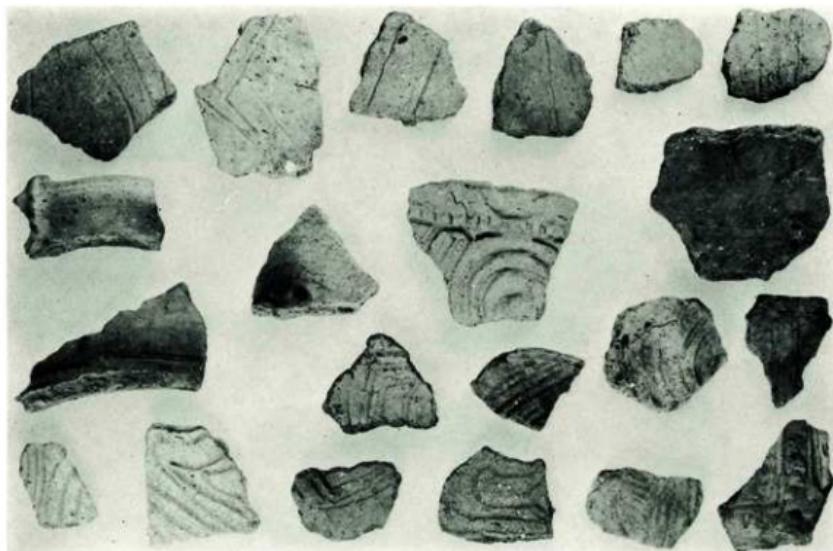
鶴田遺跡包含層出土土器 その 5



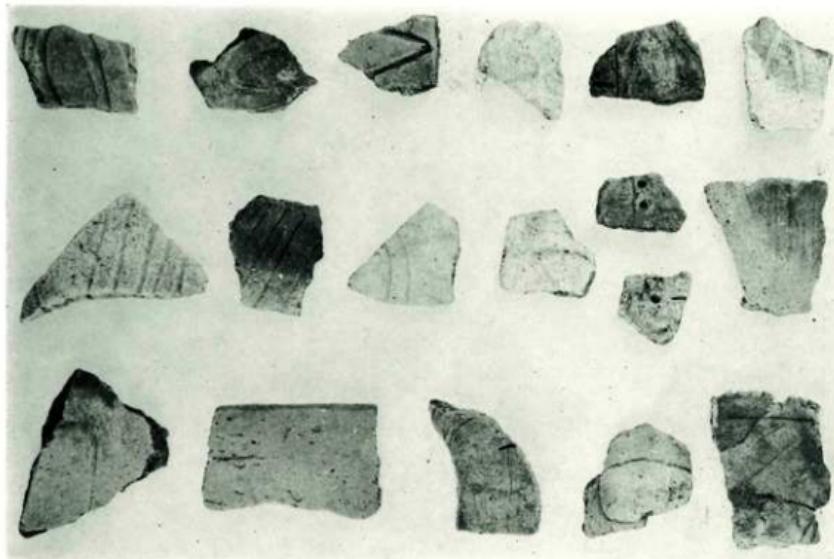
鶴田遺跡包含層出土土器 その 6



鶴田遺跡包含層出土土器 その7



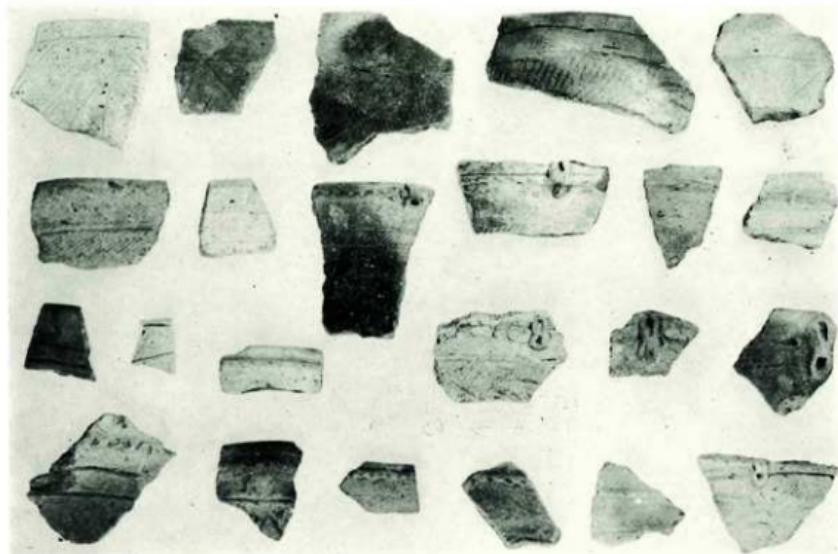
鶴田遺跡包含層出土土器 その8



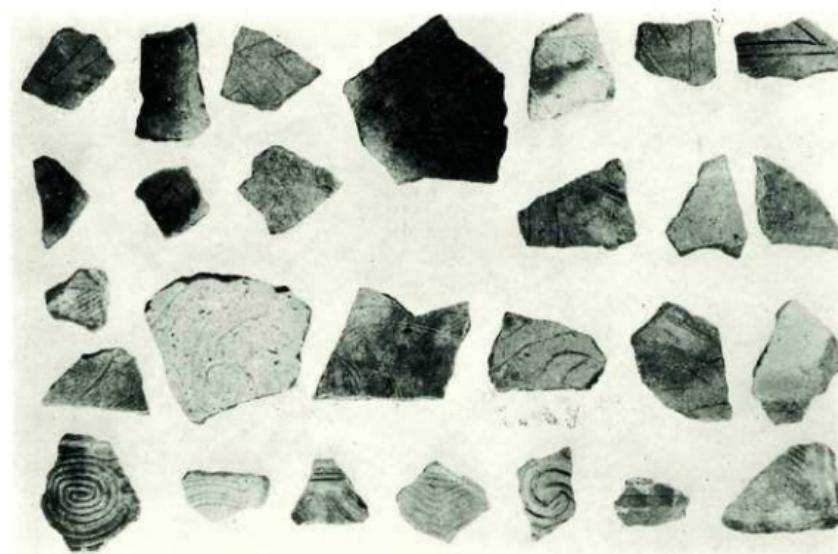
鶴田遺跡包含層出土土器 その9



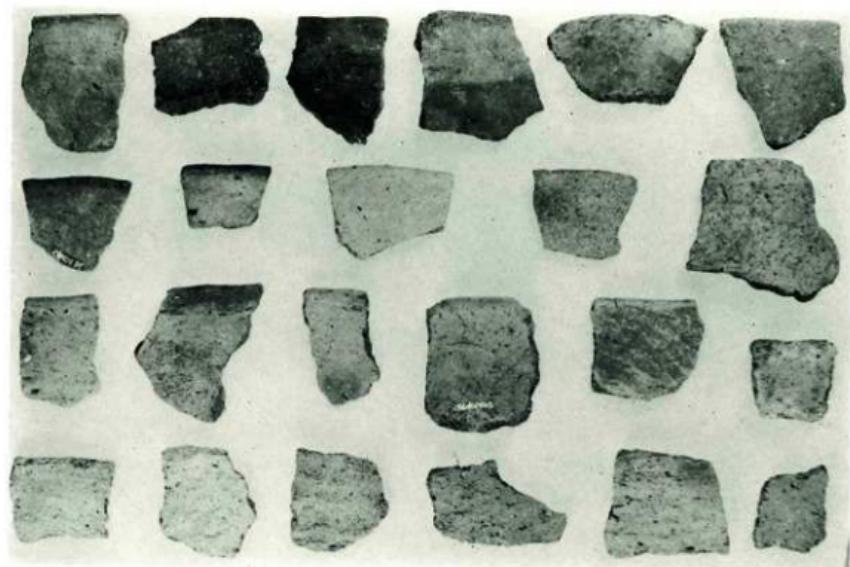
鶴田遺跡包含層出土土器 その10



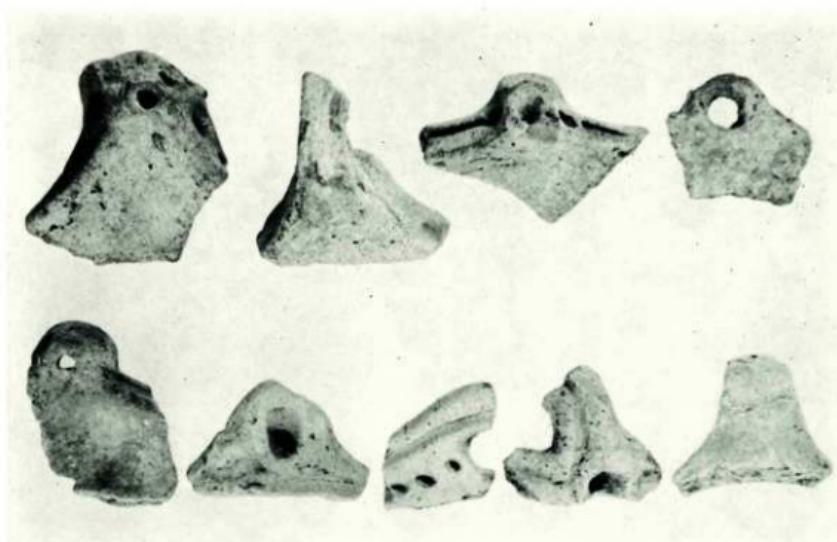
鶴田遺跡包含層出土土器 その11



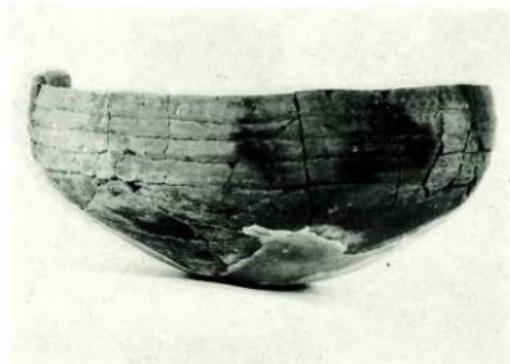
鶴田遺跡包含層出土土器 その12



鶴田遺跡包含層出土土器 その13



鶴田遺跡包含層出土土器 その14



篠田遺跡第7号住居跡出土土器



篠田遺跡第7号住居跡出土土器



篠田遺跡第7号住居跡出土土器



篠田遺跡第7号住居跡出土土器



篠田遺跡第7号住居跡出土土器



篠田遺跡第7号住居跡出土土器



笠田遺跡第7号住居跡出土土器



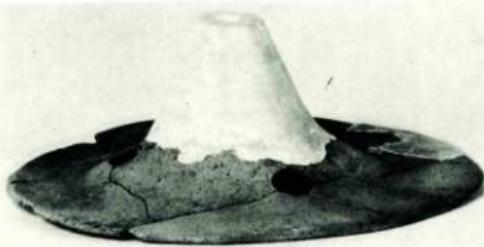
笠田遺跡第7号住居跡出土土器



笠田遺跡第7号住居跡出土土器



笠田遺跡第1号住居跡出土土器



笠田遺跡第1号住居跡出土土器



笠田遺跡第1号住居跡出土土器



笠田遺跡第1号住居跡出土土器



笠田遺跡第1号住居跡出土土器



箆田遺跡第 6 号住居跡出土土器



箆田遺跡第 8 号住居跡出土土器



箆田遺跡第 9 号住居跡出土土器



箆田遺跡第 9 号住居跡出土土器



箆田遺跡第 9 号住居跡出土土器



箆田遺跡第 9 号住居跡出土土器



笠田遺跡第4号住居跡出土土器



笠田遺跡第4号住居跡出土土器



笠田遺跡第4号住居跡出土土器



笠田遺跡第4号住居跡出土土器



笠田遺跡第4号住居跡出土土器



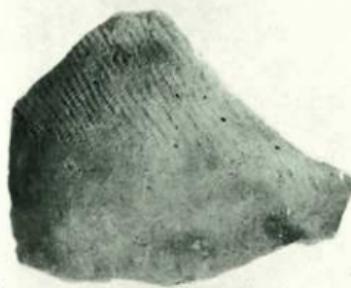
笠田遺跡第4号住居跡出土土器



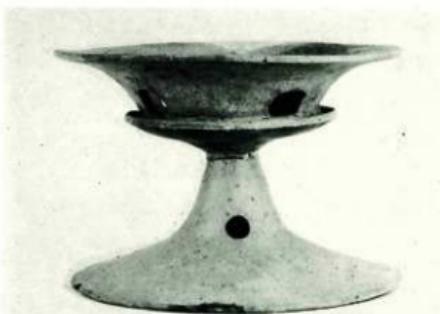
笠田遺跡第5号住居跡出土土器



鶴田遺跡表面採集土器



笠田遺跡第6号住居跡出土土器



篠田遺跡一括出土土器(1)



竪田遺跡一括出土土器(2)

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第20集

一般国道 254 号線東松山地内
埋蔵文化財発掘調査報告 1

笠 田 • 鶴 山

昭和57年 9月20日 印刷
昭和57年 9月30日 発行

発行 財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
印刷 株式会社 誠美堂印刷所